明治三十一年九月二十四日發兌

女學

第百六十五號

東京國之社

女鑑第百六拾五號

目錄

待宵小侍従



女鑑　第百六十五號

將來の母たる人に望む

我が社友の一人、此の頃はるばる招かれて、天ざかる鄙のはてなるさる中學校にあり、國語を敎へむとてなり。さて、敎への場にのぼりて、兒童に讀みも書かせもするに、發音いとみだりがはしく、廣嶋(ひろしま)をふろすまといひ、一人(ひとり)をふとりといひ、引(ひく)をふくといひ、品よくをふんよくといふなど、すべて、ふといふべきをひといひ、而して、舟(ふね)をひねといひ、風呂(ふろ)をひろといふなど、ふといふべきは、また、ひとあやまり、さては、梨(なし)をなすといひ、可(べし)をべすといひ、飯(めし)をめすといひ、爲したりを爲すたりといふなど、すべて、しをすといひ、而して、春日山(かすがやま)をかしがやま、爲(なす)をなしといふなど、すをしといひあやまり、さては、梅(うめ)をれめといひ、家(うち)をれつといひ、糖(ぬか)をのかといひ、うの段の音とれの段の音とまぎれ、イ音とエ

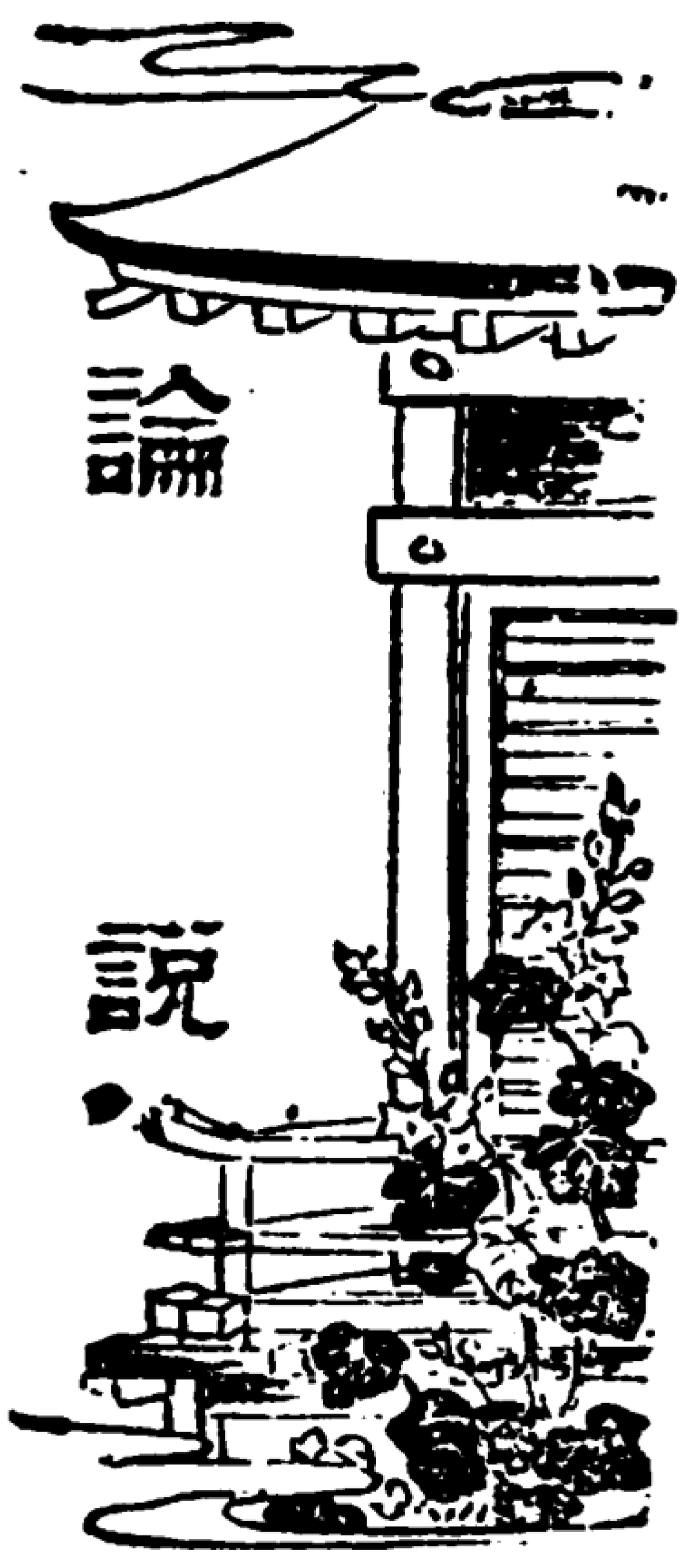
音とのけじめなく、をは、すべて、音聲の差別明かならず、いろは四十八音の聲も、此の地の人にては、唯十七八音を存するばかりに思はれ、發音のみだらなる事、實に驚くばかり、殆んど何をいふかをきゝかね、何を書きたるかを讀みかねたり。さても、小學校の敎への場に七八年の日月を學びたる者が、餘りにも發音のみだりなるに、小學校の敎員どもは、かゝる事に注意せざるにやとあやしみて、あふ敎員毎に正したるに、いないかでかは、學校にては、發音の事は、日毎に注意の上にも注意して、これを敎へ正せど、如何せむ、家庭はかゝるみだりなる發音の家庭なり。一日學校にてつとめて敎へ正したる音も、家に歸りては、一夜の中に、またもとのみだりなる音にあやまられ、つひに敎員が、日毎敎場にての敎へも、其の効を見る能はざるなりとか。

おのれ、これをきゝて、いと深く心を動かせり。今更のことにはあらねど、家庭の敎への大切なるは、これにても知るべしと思ひてなり。

あはれ、學校にては、つとめて發音を敎へ正すも、家庭にて、これをみだすなり。兒

童は、學校にては正しき發音をきくも、家庭にて發音のみだりなるために、つひに正しく發音するを得ざるなり。あはれむべき事ならずや。家庭のあしきが爲に、此の地の兒童は、つひに發音の正しきを得ざるなり。これ、單に一地方の發音の事のみ。然れども、家庭の敎への大切なるは、この一事を推しても知るべきならずや。實に人の精神、人の言行、共に多くは家庭の敎へによれり。人を成すも、家庭の敎へにあり。人を破るも、また、家庭の敎へにあり。家庭の敎へこそ、世に大切のものなれ。而して、此の大切なる家庭の敎への業を身にひきうけて、家庭をあづかり家庭を守るべき者は、誰れぞ。やがて、一家の婦たり兒童の母たる女子の任ならずや。實に家庭の如何は、そが家婦たり母たる女子の如何にあり。家庭をつくるも女子にあり、家庭を破るも女子にあり、やがて、人を成すも女子にあり、人をやぶるも女子にあり、これを大きくしたらむには、社會を成すも、やがて女子にあり、社會をやぶるも、また、女子にありといふべし。女子の任、誠に大ならずや。女子の身分誠に尊からずや。

然り、女子の任は、誠に斯くの如く大なり。女子の身分は、誠に斯くの如く尊きものなり。女子よ、女子は此の尊きに居り、此の大きなる任務を負へる者なり。されば、女子よ、此の尊き身分に恥ぢざる精神言行を有たさるべからず。また、よく此の大任を遂ぐべき覺悟なかるべからず。然らざれば、美はしき家庭を成す能はず、うるはしき人を成す能はず。うるはしき社會を成す能はず、やがて、女子の大任を遂ぐる能はず、尊き女子の身分たる能はず。現時の家婦たり母たる女子にして、はたして、よく此の精神言行、此の覺悟あるものありや、吾人はこれを問はさるべし。唯、これより、必ず、家婦たり母たるべき女子にむかつて、此の尊き身に恥ぢざる精神言行、此の大任を遂ぐべき強固なる覺悟を有たむことを、吾人は是非に希望してやまざるなり。如何となれば、吾人は、今日の風俗をして匡正せまほしき事多ければなり。今日の世風、輕薄、淫猥、醜陋、奢侈、不德、非情、柔弱、腐敗せるもの、これを、將來の家庭、人物、社會を成すべき家婦たり母たる人の力を待ちて、吾人は是非に匡正せまほしく思へばなり。



割烹と禮節と（四）

石井泰次郎

第一編　小笠原流といふ禮節を論ず（續）

首唱者は實にかくの如き來歷を有せることを讀了せば、直ちに正統禮節の敎授者、又正統弓馬の敎授者たらざるを知るべし。實に非正統僞稱小笠原流にして時勢に相遇して、不思儀にも一大勢力を有したりし原因をも詳細に知る事を得ん。かゝる僞稱小笠原といふ禮節敎授者が傳說は、直ちに總括して取るべからざるは勿論、分別しても其傳說の儘に隨ふ事はあたはざるなり。

然るを、其敎授法傳說の下に立ちて、此首唱者が口授の筆記の殘留せる物を、守木尊として、この非正統禮節を敎授し、この僞稱小笠原流傳說によりて著述したる者あるは、甚だ憐むべき限なり。

口授の筆記は、伊勢家傳説(禮節) 小笠原家傳説(弓馬) 四條流傳説(料理) 此三傳説を引寄せて、當流(即小笠原)の二文字を冠らせて我物となせる所なり。又此三傳説に加ふるに諸種の牽强附會説を以てし、世上の流行に乘じて、小笠原家の古實によらず、伊勢家の正説を暗に使用して、四條流の料理法式と共に、亂に改めて我説の如く外見を粧ひて成立しめたるなり。

しかるに、此本尊佛を迷信せる、敎授者著述者は、此佛の光明に眼瞑して、其眞影を窺ふあたはず、只其尊像の、僞稱小笠原と唱する檀上に安置せるを見て、双手を組合して合掌をなしたれど、實に其佛の何國より渡來せる物なるかを慥めざるべし。

論者愚なりと雖ども、既に、此非正統小笠原流諸禮といふ物は、右にいへるが如く、三つの傳説を引合せて成立せるよしをしれり。

是の三傳説を素として組織せる、首唱者口授の筆記の傳はれる物の色目を列擧せん、口授の筆記。敎授書。門人寫本等に別れたれど、大くは口授の筆記を元としたれど、口授の筆記と記載せるなり。又色目に口授筆記のなれる年月日の順序を追ひて掲載すべきなれど、今は近く見聞せる書目をのみ取りて、弘く求めて擧んとせざるによつて、其年月日の順序を正さず、只かたはしより列擧しつるなり。

僞秘小笠原流傳書色目

一婚禮推嫌記　四冊
一婚禮之次第　延寶三年正月十八日
一三ツ目座敷飾　延寶二年
一婚禮床飾之書
一祝言道具之次第
一女宮仕之次第
一五節句之次第
一婚禮行列之卷
一初着仕立之次第
一婚禮里出之部
一婚禮合盃之卷
一酌之次第　寛永五年
一當家弓法躾引歌
一四季法禮
一葬禮口決、行列
一當流本式折數硯
一女禮集　延寶五年八月
一莊明綱目
一嫁取婿入之次第
一百八ヶ條躾ヶ條　元祿五年
一胸之守の卷
一萬通之次第
一誂物之次第
一嫁入道行之次第
一女中仕立物調法記
一小笠原祝言之書　元祿四年
一同結納之卷
一書禮之法
一當流龜足寸法
一移徙行列、規式
一入部行列
一壽老神之卷
一婚禮結入次第
一御娶入道具飾　延寶二年
一貴人目錄口傳
一女房衆躾方　貝合對末
一鴛鴦衾之卷
一酌之次第
一膳部木具寸法
一輿請取渡場所之次第
一女禮秘傳集
一婚禮道具帳
一小笠原進納禮
一銚子提子之卷
一天兒秘傳之卷
一凶禮師語錄
一古實集　六卷
一懐妊着帶之卷

一御黒祝元服之次第
一同行列之卷
一五胎五輪之卷
一魚鳥名所之卷
一獻立口傳之卷　延寶三孟冬
一當流獻立食物禁戒條々
一當流獻立土器同輪寸法
一表劔包卷
一御成獻立之卷
一移從口傳書
一御厨子黒棚之卷
一産所諸用集
一産所道具之卷
一保呂かけはづしの卷
一小笠原流食禮口傳
一鳩杖之卷
一假粧眉作口傳

一産所道具圖式
一香爐灰押樣之卷
一あげまき、長かもじ之卷
一山川陰陽之卷
一諸祝儀膳部之卷
一六藝細釋
一萬龜足寸法之卷
一五箇句飾之卷
一切腹法式切紙
一諸祝儀床飾之卷
一書棚飾
一胞衣納
一萬積方之書
一破魔的
一書院床飾品々
一楊枝往來
一弓之書

一宮參之次第
一裂礑蘊輿之卷
一四季莚物之卷
一雜煮之卷
一出家公武精進酢菜之卷
一料理雜學集
一傘袋膀建之卷
一天兒之卷
一流罪法式
一小笠原流俎板寸法名所
一書院床飾之圖
一宮參之次第
一武羅進樣秘傳卷
一古老聞書
一草露傳
一陳羽織之辨
一弓之名目

一矢之書
一當家執矢之次第
一蟇目之次第
一矢開之卷
一寸法秘書
一宮參之口傳
一百手傳記
一實撿藴奧卷

一小笠原櫓之卷
一年賀式
一肴組之書
一草履萬故實覺
一移徙書傳記
一銚子の卷傳記
一丸物傳記
一訓閲集諸藴奧卷

一草鹿之卷
一年始例式
一獻立口傳書
一懸道具之書
一産着傳記
一建立口傳之傳記
一小笠原皆傳秘圖

（以下畧之）

かく擧げきたれるは、論者が所藏する所の禮節書中、水島元成が記名あるを旨として、門弟伊藤幸氏等が記名せるを合せて、順序をも、年月をも正さで、擧たるなり。かく記載したる色目中、起居進退すべて殿中にて執行すべき禮節の事に關せる書目は、皆伊勢家の傳說を引寄せ來りて、亂に改めて口授、敎授せし所の傳記なり、又弓馬の事より、すべて軍陣に關せる書目は、皆小笠原家の傳說を引寄せ來りて、誤てるをも正さず、私說を設立して講述せし所の傳記なり。又料理に關せる書目は、四條流の傳說を引寄せ來りて、直ちに當流と稱し、又牽强附會說を附して口授せし所の傳記なり、かくて此傳記を門人に授くるに順序を設けて、僞稱小笠原の流名を尊敬せしめたりし一證を擧げん。こ

は既に列擧せると重復する嫌あれど、首唱者が教授の如何を窺ふに足るべけれど、再び登載しつるなり。

（僞稱）小笠原免狀以後一ヨリ拾マデ目錄書

○壹番　口傳書　初免狀以後

一進納禮　五十ヶ條　二册
一配膳門
一書札拔要集
一馬具積方
一進納禮　百ヶ條

一躾拔要集　三
一古實拔要集
一武具積方
一衣服積方

一配膳門
一婚禮間法門
一弓具積方
一魚鳥積方　雜類

○二番　薀奧書　免狀以後

一幕薀奧傳記　一册
一旗竿薀奧傳記
一實檢薀奧傳傳
一同仁
一同義
一讀本自戒

一母衣薀奧傳記　一
一鎧薀奧傳記
一穢薀奧傳記
一同禮
一同智

一旗薀奧傳記
一圖薀奧傳記
一當流軍法
一同信
一三禮傳授口評　弓馬軍

○三番　　諸祝儀傳記　　免許以後

一年始例記傳記
一年中例式傳記
一五節句飾傳記

一懷妊着帶傳記
一産着傳記
一胞衣納傳記

一宮參傳記
一移徙傳記
一婚禮大道具傳記

一御厨子小道具
一同七飾
一三ッ目飾

一胸守
一冠蔦之衾
一婚禮床飾

一膳部木具寸法
一献立之卷
一雜學集

○四番　　書札

一草露傳
一料紙品
一四季往來

一大内雜法
一朝庭記事
一公家雜事

一大内文法
一女房奉書
一公卿文集

一和歌回文
一武家雜法
一御教書古案

一武家文法
一願書記請文
一軍中狀

一制高札
一太刀目錄
一諸目錄

一魚鳥目錄
一僧家書體
一代官補任狀

一當流言語門
一武具文字
一菊亭右府公草案

一飛鳥井家歌書
一古今書法相傳寫

○五番　故實書

一根元諸物記　六冊　一古實集　六冊　一古實拔糸　六
一推鷹師語錄　六　一探題大諸禮拔書　四　一利方集　軍利集ともいふ三
一神書和國文字集　二　一古實志記　一　一古實條目　一
一古實條々　一　一推々古事傳　一　一享祿寛正年中古事　一
一享保志記　一　一年中風俗考　一　一嘉祥考　一
一子の子餅考　一　一琵琶爭名所　一　一聚蘭書　一
一當流頭禮集　一　一當流揚枝　一　一臨事服忌品　一
一茶、多葉粉初抄　一

○六番　七冊書目錄類

一請取渡之書　一　一萬躾之書　一　一通之次第　一
一酌之次第　一　一喰初之書　一　一婚禮之書
一書札禮　三　一七冊之書頭書　三冊　一拔目錄　四
一射禮目錄　一　一弓具ヶ條錄　一　一馬法禮目錄　二
一同濫觴目錄　一軍禮目錄　一軍法目錄
一甲冑部目錄　一八冊目錄　一童訓集

○七番　諸祝儀卷物

一年始例記之卷
一年中例式之卷
一五節句飾之卷
一產所道具之卷

○八番

女中之書 膳之書

一萬躾之次第　一
一還之次第　二
一酌之次第　三
一五節供之次第　四
一章の次第　五
一女中進物之次第　六
一女中勤束之次第　七
一產所之次第　八
一萬祝之次第　九
一女中躾之次第　十

〆十册

一齒黒祝之書
一女中調
一衣服書
一女中衆衣裝之次第
一十二月衣裝
一女中仕立物調法記
一女禮秘傳集
一女中躾歌百首
一女禮配膳酌之次第
一女房方古實
一女房之古實
一女房衆躾方之次第
一女房故實方
一女房故實
一香之書
一香要集
一香搭之次第
一香之書　乾坤
一十炷香之次第
一十炷香記錄次第
一香式十册之書
一聞香秘傳書
一十炷香之記

○九番

嘉禮之書

一鑑所諸用集　二
一元服之次第
一着帶之卷
一同規式之卷
一入部行列之卷
一荷寸法之卷
一鴛鴦衾之卷
一莊明綱目之卷
一嫁入道具飾之卷
一嫁入諸道具行列之卷
一嫁入道行次第之卷
一あけまきの卷
一山川陰陽之卷
一土器輪寸法之卷
一獻立の卷
一出家公家精進酢菜
一鳩杖之卷

一宮參次第　一
一婚禮道具書
一胞衣納之卷
一同規式之卷
一御厨子寸法之卷
一表さし包之卷
一愛敬守之卷
一御厨子黒棚三莊之卷
一嫁入の次第
一婚禮行列之卷
一輿請取渡塲所之卷
一假粧眉作之卷
一銚子提子之卷
一獻立口傳之卷
一四季臺物口傳之卷
一雜學集　三
一貝合對末之卷

一元服口傳
一婚禮推陳記　四
一宮參行列之卷
一移徙行列之卷
一婚禮大道具之卷
一傘袋仕立之卷
一天兒之卷
一書棚飾七通之卷
一同
一同
一長かもしの卷
一婚禮床飾之卷
一膳部木具寸法之卷
一雜煮之卷
一四季臺物圖之卷
一御成獻立之卷
一灰押形之卷

一初直著仕立之卷　一當流本式折數硯卷　一婚禮諸入記
一婚禮 結納 里出 合盃 之部 三　一古今婚禮集　一婚禮之扣
一婚禮之書 陰、家之書　一祝言之書 陽家之書　一若水祝
一年賀之式　一飾式口傳圖書　一獻方七册
一獻方帖　一龜足寸法　一喰合菓物
一酌酒配膳傳

○十番　雜書（凶禮）

一軍禮畫圖武具　一同 衣服　一同 魚鳥類、雜
一傳授心得次第　一四使勤行集　一四季法禮 假名
一同 眞名　一弓法躾引歌　一推[illegible]言語集
一古實撰要集　一拔要集口傳　一禮法全集 三
一胸明集 二　一飛鳥井家鞠書 一　一蹴鞠要集
一蹴鞠傳　一躾方明記 蹴鞠門　一同 能次第
一凶禮　一凶禮師語錄　一葬禮口譯之卷
一同行列之卷　一同灌奧之卷　一切服作法之卷
一切服刎頸之卷　一流罪法式

○

一反閉
一箭之卷
一兵數
一水冠
一軍詞
一日取
一內幕
一廳
一鎧着
一出軍
一産所蟇目
一弓袋笠袋
一簾
一的場次第
一十張
一籾
一鏑之矢

一虎卷
一武羅
一軍扇
一敷皮
一鳥氣
一虎卷日取
一鐙
一鞭
一決拾
一屋食
一草鹿
一鬮結
一破寬的
一笠掛
一行縢
一九張弓
一騎射之揚

一張良虎卷
一肴組
一六具
一城取
一首實撿
一杠
一螺貝
一籏
一鎧衣
一弓名所
一射儀
一蟇目
一奉射
一弓袋
一八張弓
一萬矢本
一鐵

一入的
一極々
一平胡籙
一百手
一射初
一闘的
一三的
一持清矢
一小的
一射落
一歩射入的
一當家傳
一持清矢本
一地祭
一挟物
一張弓
一弦披
一闘結射様
一敷皮
一笠掛
一三々九
一遊奥入的
一三國弓寸法
一革箙
一五度弓
一甲乙
一弓緣記
一徳次弦披
一御前的
一流鏑馬
一群規矩
一谷向
一證的

以上」

又此外に、當流書物目録といふに、揭載せる靈之部に、

一靈道具之巻
一靈方口傳書
一定家鄕靈問答
一花に鳥付る口傳
一靈起源
一靈名所
一靈方古實集
一西園寺殿靈百首
一靈十二架

以上

雜之部に

一進退抄　一三儀一統大雙紙　一音樂器

一立花書

獻立之部に

一鳳鳥鳳鯉由來　一魚鳥切形　等あり

かくの如く諸説を引合して、皆當流小笠原の流名を冠して、敎授したりし首唱者、又門弟子の設計實に驚嘆にたへざるなり。

しかるに現今、なほ此跡に繼立して、小笠原諸禮と名稱して敎授したる者あるは、首唱者の傳へたる二百年間の謬傳誤解説を、看破する事を得ざるによれるなり。既にあげたる三傳説引合の理由を考究せざるによれるなり。此謬傳誤解を矯正し、三傳説引合を分離せしめて以て、禮節の古今の變遷を尋ね、而して後、小笠原家は弓馬の家なり。伊勢家は禮節の家なりといふ事を知り。現今應用すべき禮節の基本は、本邦古來の禮節を主として。なほ伊勢家傳の禮節と、時勢の應用せらるべき禮節と、膳夫家にて敎授せる所の禮節とによりてなれる、一の禮節に非ずんば成立すべからざるなり、といふ理由を知り、起居進退すべて殿中にてなすべき、冠、婚、祝、祭の禮節の事を議するに、口頭第一小笠原流は禮節の流名にあらず、小笠原の三文字は禮節家の冠らすべきものに非ず、近

世。よ。り。名。稱。せ。る。小。笠。原。流。は。僞。稱。に。し。て。其。傳。說。は。取。る。べ。き。物。に。非。ず、といふ言語を以てすべし。（第一編終）

正●說●　割烹と禮節と（二）　女鑑百六十三號二十一ペーし四行目弓馬の師範な。り。し。な。り。は●に●も●あ●ら●ざ●り●し●な●り●の誤

女德のしをり　（十三）

三輪田眞佐子

第一　嫉妬　むかし祇王が淸盛の愛に離れて（萌え出つるも枯るゝも同じ野邊の草いづれか秋にあはではつべき）と歌ひつゝ、嵯峨の野の奥に無常をかこつと聞くより、新に寵を得し佛御前も（思はずも秋にあひぬることと草の我身のうへにれひしげるらむ）と本意なき惡因をくいて、遙〳〵祇王を尋ね、同じ草庵に生涯を送りけるとかや。こは男子の情操は定めなき實例にして、何れの世にもかゝる類多けれど、女子たるものは、れのづから愛を失はじとて、嫉妬の心を起す原因ともならん。

更に、花の朝も月の夜も、つねに良人を敬愛するあまり、若しわが背の君には、花月にあくがれて、道ならぬ巷に迷ひやしつらんと苦慮するより、わざとならずも、亦嫉妬の心を醸す原因ともなるべし。

さりながら、暴を以て暴に報ゆるは、固より女徳にあらざれど、嫉妬の原因は如何なるものにもせよ、決して人を怨むべきにあらず。反りて我が分を盡して、道ならぬ人をも感服せしめて、其の非を悔ゆるに至らしむべし。大内義隆の妻貞子は、日ごろ義隆の寵愛せし妾が、久しく留主にありけるを、徒然ならんとあはれみて、小袖など種々の物を贈り、細々の文さへそへて、その奥に(身をつみて人の痛さぞしられけることひしかりけり戀しかるらむ)との歌を讀みけれど、妾大に耻ぢて尼とならんとせしを、貞子はそは我が本意ならずとて、諫め止めて終生睦じく共に暮しけりと傳ふ。實に女子たるものかゝる雅量あらんには、嫉妬の癖に陷らで、女徳の譽を全うするに足らんかし。

東洋には、これまで、男子は妾を蓄ふを以て道徳に背きしものと思はざるめり。元來わが國の如き、家族制度の行るゝ以上は、男子の血統を重するより、所謂目的は方便を神聖にする理にや、子なきものは妾を養ふも可なりと言ひけんか、近來に於ては、財寶多く、官位高きものは、幾人の子女あるに拘はらず、なほ妾を養ふものあり。こは人倫の大道を亂すものなれど、戒むべきことにこそ。されど、そは社會の改良に伴ひて、早晩廢さるゝべき惡風ならんも、今日女子の口より唱道するは、寧ろ嫉妬に近し。おのれ思ふに、女徳を修めんとならむ、男子の操行などを責めんより、獨り女子一身を顧みて、

疾しきことなきを勸めざるべからず。在原業平は、家に可憐の妻あるに、なほ河内の國なる高安郡の里に契りけるものありとて、夜な〳〵通ひけるが、されど、妻は露ばかりも嫉妬の念を現はさずして、いとねもごろに送りけるを常とせしかば、業平反りて思ひけらく、妻こそ花染のうつろひ易き心を起し、我が出で行くを歡ぶならんか、いざや試みんと、前栽の樹陰にひそみて妻の擧止を窺ひけるに、その夜の空のけしきのたゞならぬをうちながめて、風ふけば沖津しらなみたつた山夜半にや君がひとり越ゆらん)と獨吟しければ、忽ち業平もあはれに袂も露けく覺ゑて、往日の過を悔い、以來あだし心を有たざりけりとなん。そは妻たるものゝ摸範にてこそあれ。

蓋し嫉妬の原因は、社會及び男子にのみありとおもふはひがことなり。妻たるものゝ德澤未だ夫を潤すに足らず、あるは粗野なるその言語動作は、人を厭ふ心を起さしめ、あるは家庭の風波絶ゆることなきより、出でゝは歸るを忘れしむる等が、間接に嫉妬の原因となる例もありと聞く、兎に角嫉妬は女子の性癖と知りて、つかの間もその念な懷きぞ。



侍宵小侍從

鹽井ふく子

目に見えぬ鬼神をもあはれと思はすとかや。和歌の德のためしも多きが中に、尤も此の道に優なるみやびめこそあれ、近衛院大后の、大宮殿と申すに仕へまつりて小侍從と聞えし女房なりけり、はじめの名を阿淡の局と申し、父をやはの撿校光西法院と云ひ、母は建春門院の女房小大進の局と聞えし人とかや。さても、世に貧のわづらひほどくるしきものはあらじと人の云ふめる。阿淡の局若うして宮仕へしけるはじめ、また、いと貧しくて、人なみ〳〵の裝束も拵らへつくる資力なく、夏冬の衣更へも便りなく、流石に內裏の御宮仕へ、花に染めし衣をもしみてかへずと春は云はんも、蟬の羽衣うすくも覺ゆる秋はまた重ねん言葉もなく、あまりにあらはなるも悲しくて、太秦の藥師に詣でゝ七日こもり、偏に冥加あらん事祈りけれども、さしたるしるしもなし。侍從いと悲しくて、我が身のうすきを怨むこと限りなく、此の上はたゞ世をすてゝ尼にもならむやと思ひ、なほ佛の名殘を惜みてありけるに、藥師はもろ〳〵の病をこそ治する神なれ、富貴ならむ事を願ふとて聞くべき神かはと、人の云ふ聲しけるに、侍從とりあへず、

南無藥師あはれみ給へ世の中に
　　すみわづらふも病ならずや

とうち詠じて、ふとまどろみたりけるに、御帳のうちより白き衣を給はると見て ふとれどろけむ夢なりけり。

さめてそゞろうつしみにうつりて、何となう末たのもしく覺えけるが、げに、その後は、ありし世に似ず、

花やかに物足り、君の御ればゐも人にすぐれてめでたかりけりとか。

なはまさりてめでたかりけるは、高倉の帝御なやみましまして、慰む御事もなく、御つれ〴〵さに、如何に、阿淡よ、歌だによみたらば、このなやみも煩ひも去り、供御もまゐりぬべしと仰せられければ、御詞の下に、

君が代に二萬の里人かずそへて
今も供ふる貢物かな

とはやも一首をよみたり。二萬の里とは、其かみ、皇極天皇の御時に、新羅、高麗、日本に仇しける時天皇備中の國下津井の郡に下らせ給ひて、軍兵を召されしに、一の郷より二萬騎の軍兵まゐりたり。それより二萬の郷と名くとかや。又ある説には、聖武天皇の御宇に、藤原の廣嗣兵を起し、大軍を集め、都に攻め上らんとするに、天皇大野あづまんどを大將軍として兵をさしそへ討手に向けられしに、敵が軍つよくして官軍すでに敗れんとせし時、下津井の郡より黄なる鎧着たる軍兵二萬騎、忽ちあらはれ出で丶、廣嗣をうち亡ぼして、その軍兵何處ともなく消ゑ失せたりとか、それよりその處をにまの郷とよべり。されど彼のにまの郷の人數になぞらへて、君の御命の久しかるべき事をよみたりしなり。　天皇いたく感じればしめして、いとめでたがらせ給ひけるが、げにそれより御なやみも去り、ぐごも召させ給ひたりきとなん。鬼神も感じけるにや、兎に角にめでたかりける御事なりき。後近衞院大后に仕へまつれるが、大宮殿は大炊の御門右大臣公能公の女、後德大寺大將實定卿の御妹にれはしましければ、實定卿よく宮へまゐられけるが、侍從の歌にすぐれ、物にかしこく才あり、かつ貌ざせもめでたきにわりなくればしめして、二つなきものとぞせられける。或夜必ずこんと契りれきて、れそくれはしたり、宵のまだに待つは苦るしきためしに引かれつるを、更け行く空にかねの響、いとゞうかりければ、

まつよひに更けゆくかねの聲きけば
　わかぬ別れの鳥はものかは

とよみたりけり。之をきゝいたくめでられけるが、此の歌あまりにあはれなりしより、待宵の小侍従と人皆呼ばれたり。さて、實定卿まゐられ、夜もすがら語らひ、きぬ〴〵の別れ、いとをしみつゝ、歸られけるに、小侍従いとはかなく、遙かに見送り、立ち去はれつゝありしを、德大寺殿もまた常よりもの思はれ、やがて供なりける藏人に仰せて、其許は今一度侍従が許へ亘り、何なりと申し參れとあるに、藏人はゆゝしながら立ち歸へり見れば、侍従はなほ元の所へ立ちしまゝながめ亘しけり。藏人、さて、何をがなと思ひつゝ、やがて、

物かはと君が云ひけん鳥の音の
　けさしもいかにかなしかるらん

と、仰せなりと云ひければ、侍従うちきゝて、

またばこそふけゆく鐘もつらからめ
　別をつぐるとりの音ぞうき

と取り敢ず返しけり。さて藏人かへりて大將に語りけるに、實定卿いたく感じ賞しけるが、これよりこの藏人をやさ藏人と稱しけるを後に物かはの藏人と人々呼びなせしとか。後此大宮、洛陽曇華院といふ比丘尼御所ありて、代々待宵の小侍従とて女房めしれかれ、又德大寺家にものかはの稱號ある大夫世々ありけるとぞ優なる事どもなりかし。そが作りし歌かずある中に、

　たつ春の心

春立つと去らでも見ばや天の原
　かすむは今朝の思ひなしかと

　海邊の散花

ちるはなを吹上の濱の風ならば
　またも梢にかへりさかせよ

　葵

いかなればそのかみ山の葵草
　年はふれども二葉なるらん

山家のあらし

あらしにも尾上の風はひゞきけり
霜ぞかりぞと何思ひけん

山家の心

しきみつむ山路の露にぬれにけり
あかつきおきのすみぞめのそで

正治二年百首歌に

咲にけり遠方人に言とひて
名をしりそめし夕がほの花

羇旅

今宵もや宿かりかねん津の國の
こやとも人の云はぬわたりは

又二月ばかりに小侍從あづまより上りぬときゝて法橋顯昭より

今はよし君まちえたりかくてこそ
都の花をもろともに見め

と云ひおこせしに返し事とて

逢ひみんと急ぎしものを君はさは
花ゆゑのみやわれをまちつる

顯昭がいみじき詞の花も小侍從が心の色の深きにはまけにけるよ、いと才あり、心ある事なりかし、なほ秀歌あまたありて、もろ〳〵の勅撰集の中にも、かず入にけり、又新古今集冬の部に

百首歌奉りし時

思ひやれ八十年年のくれなれば
いかばかりかは物は悲しき

とある歌を見れば、又壽ありけんと思ふもめでたけれ。

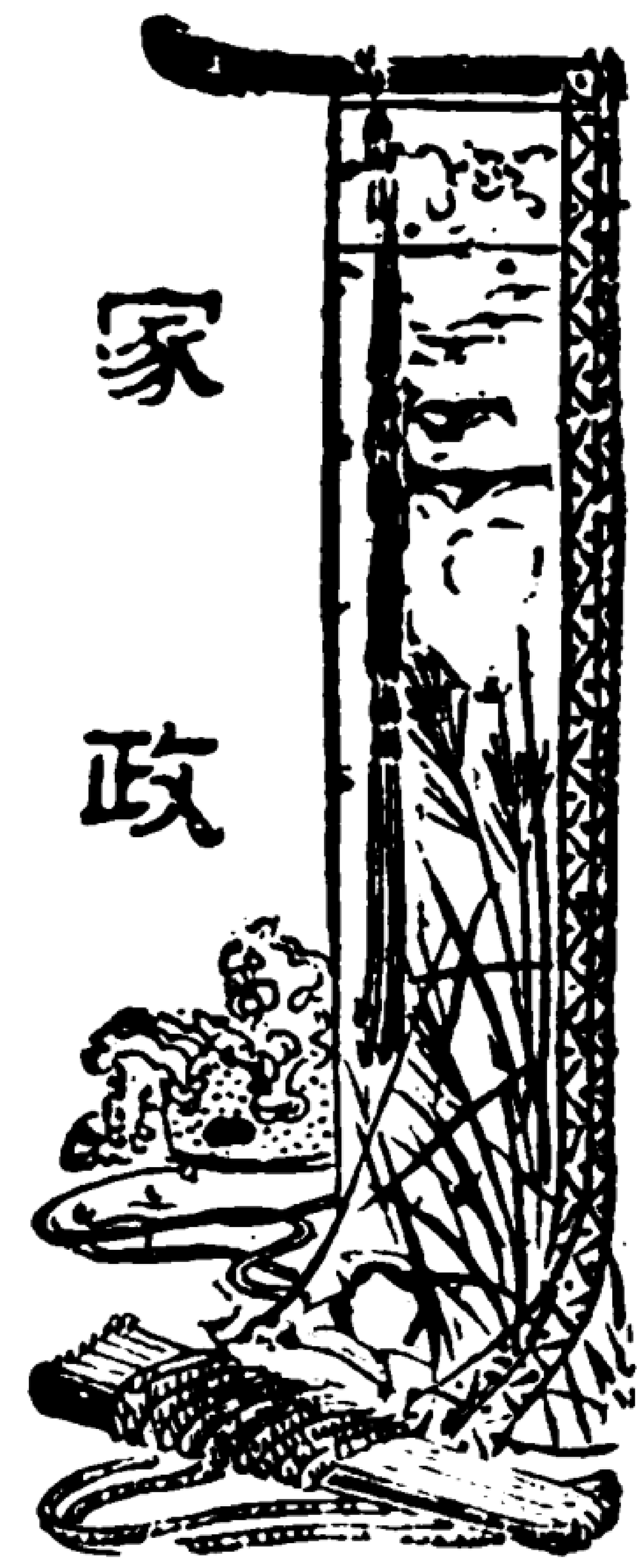
儀八郎が妻

山本正周

備前の國、世良郡、甲山市の賈人に、儀八郎といへる者あり。其の妻のなにがしは、御調郡、宇津戸村の農半兵衛といへるが女にて、十六歳の時この儀八郎が許

に嫁げり。儀八郎が家は、所有の田地二三町もあり、且父母も、麻糸を績み、農具などを賣りて日を送り、奴婢の一二人をも備ふほどの身代にて、固より、貧しといふにあらず。されども、其の姑、性質いと荒々しくして、婦をあしらふこと、頗る嚴しかりけり。しかはあれども、婦は少しも之を怨とせず、能く婦道を盡し、能く耕作を務め、我が身はいとゞ節儉して、兩親と、夫とには、常に精飯嘉肴を供し、身は、奴婢に同じき物を食ひけり。かくて、舅姑ともに、年いよ〱老いけるが、老人の常として、夜の眠の覺め易すけれど、婦は、幾度となく起きて、其の疼きを搔き、其の痛きを撫で、其の意の如くにして、止むを常とせり。然るに、其の後、夫もまた、病の床に臥しけれど妻は、一しは出精して、親を養ひ、夫の看病をなし、百五十日の間晝夜ともに、衣帶を解かざりき。かゝりけれども、その甲斐もなくて、夫の病は本復せず、八年の長病になやみて、終に死にしかど、悲歎遣るかたもなきに、かくて、數年來、くさぐさの出費の爲に今は身代も傾きて、其の日の生活だに覺束なきばかりになりにけれど、悉く奴婢に暇を遣り、妻一人の手にて、耕作の片手には、紡績などをもして、辛じて、父母を養ひけり。されど、父母は、かくまでに、身代の傾けるを知らざりけれど、折々に贅澤がましき事をいひ出でけり、或る時の事なり、姑、良き茶を喫せしめよといふに、折ふし、盡きてあらざりけるを、妻は、之を色にも出さず、己が衣を售りて、錢に代へ、茶を求め來て進めけり。其の他、四時の菓子などをも、父母の請ふがまゝに、求めて進らせしとなん。されど、舅姑ともに、後には、其の孝心に感じて、かく十八年が間も、貧苦の中に、何一つ不足を感ぜしことなかりしは、全く婦の力なりと嬉し涙を落して、人に語りきといふ。かく奇特なる女の行何時までか埋もるべき終に、官に聞えて、米を賜はり、租を免され、門閭に旌表せられけるが、後三十三歳を一期として、身うせけ

り、子も幾人かありたれど、何れも、皆、不幸にして夭死せしかば、妹の子なる虎松といへる者に、家を繼がしめたりとなん。けだし、其の宇津戸村の實父半兵衛が祖は、內海山城守の胤なりしといへば、以て、其の素養ありしを知るに足るべし。



家政

包の記

（折形續）

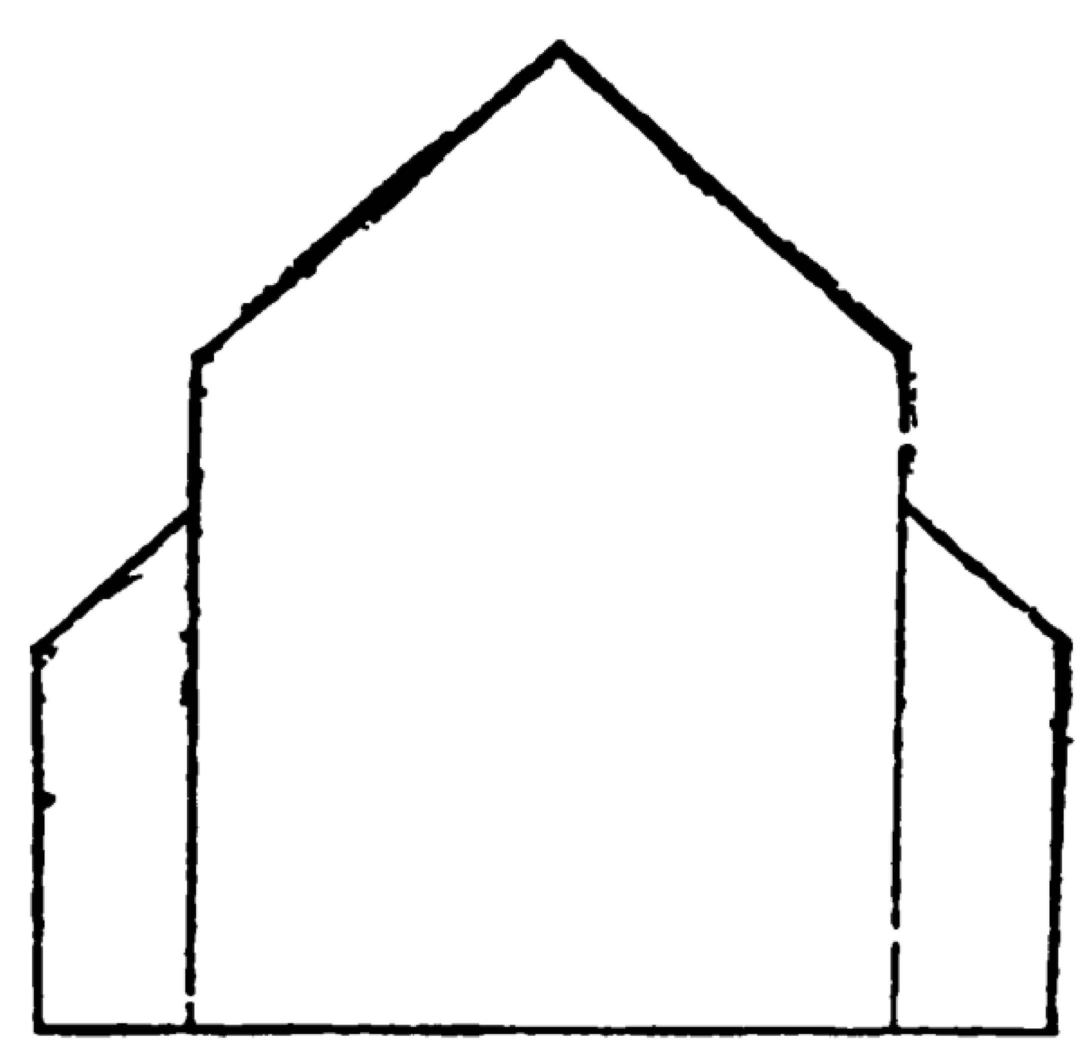
故實禮節師範 有住齊 教授

門人 平なみ子 小林眞子 筆記

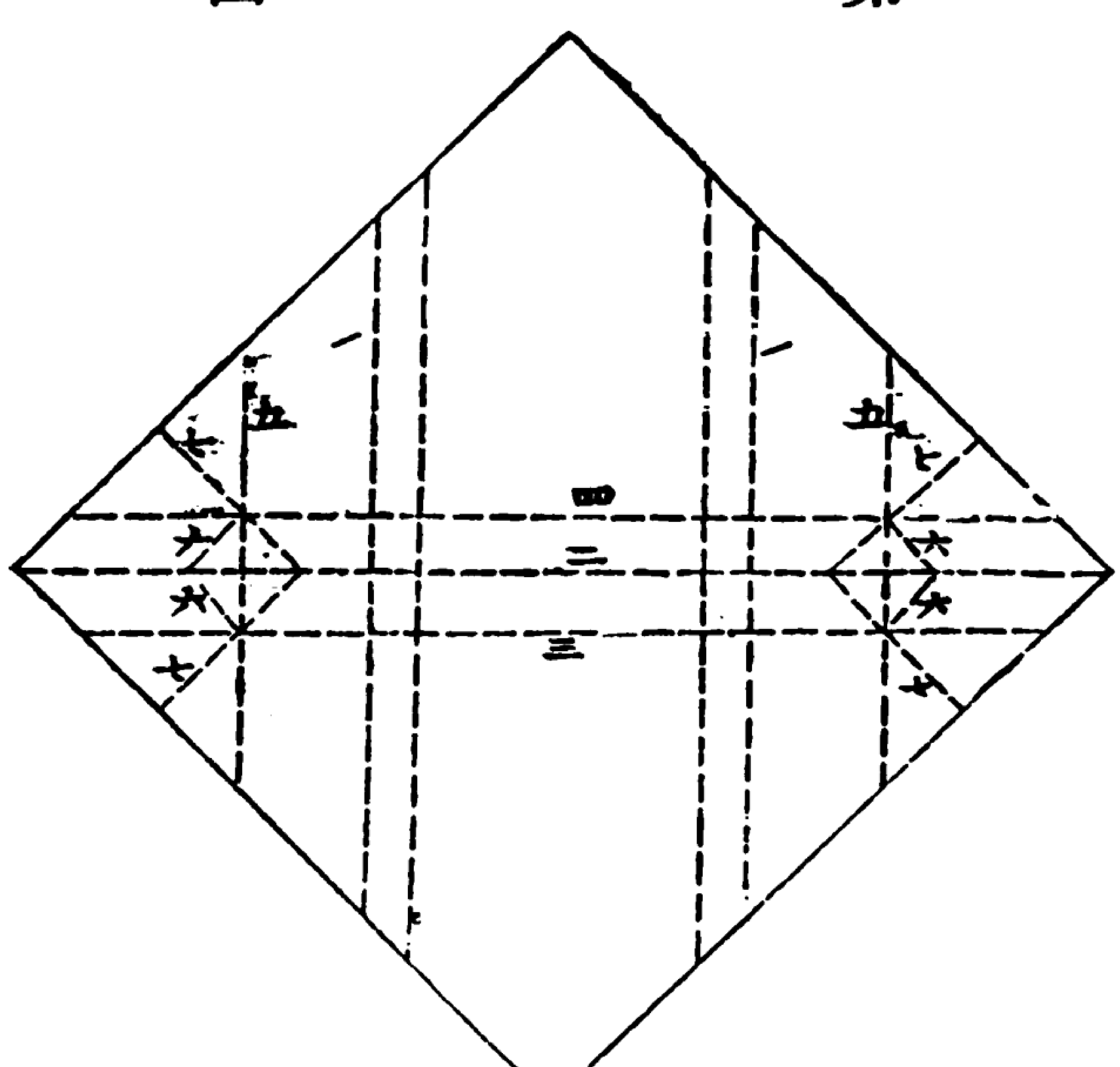
眞の兜包

菖蒲蓬包む事。紙は角取にて折る。

第一圖



第二圖



二枚にて折る、（內部を紅とし外部を白とす）菖蒲蓬の刻みたるを中に入れ、節句の餅の上に載せて出すなり。

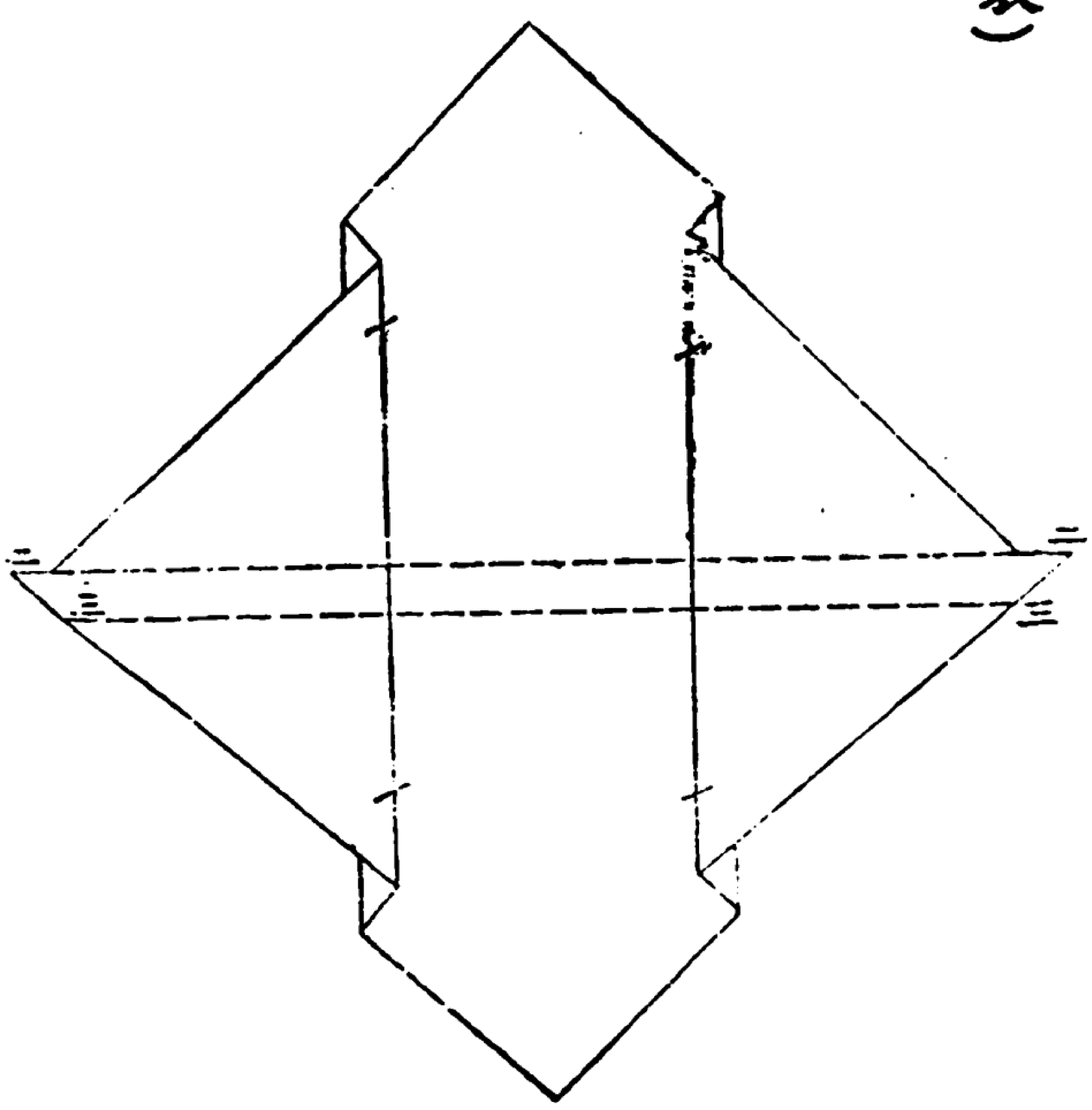
第一圖は折り上りにして、第二圖は悉皆開きたる所なり。

先づ初め第三圖の（一）の如くに折りて、次に（二）の所即ち中央を外面に

向けて折りて、(三)の點線(表の(三)の點線は裏の(四)の線と同じ所なり)にて示せる通りに筋を入れて再び内面に向けて折り返す、(斯く折りたるが第三圖にして、第四圖は其背面を示せるなり)斯樣に折りたる后、三本の横線を延して、さて第五圖の如く左右を内部に

第三圖

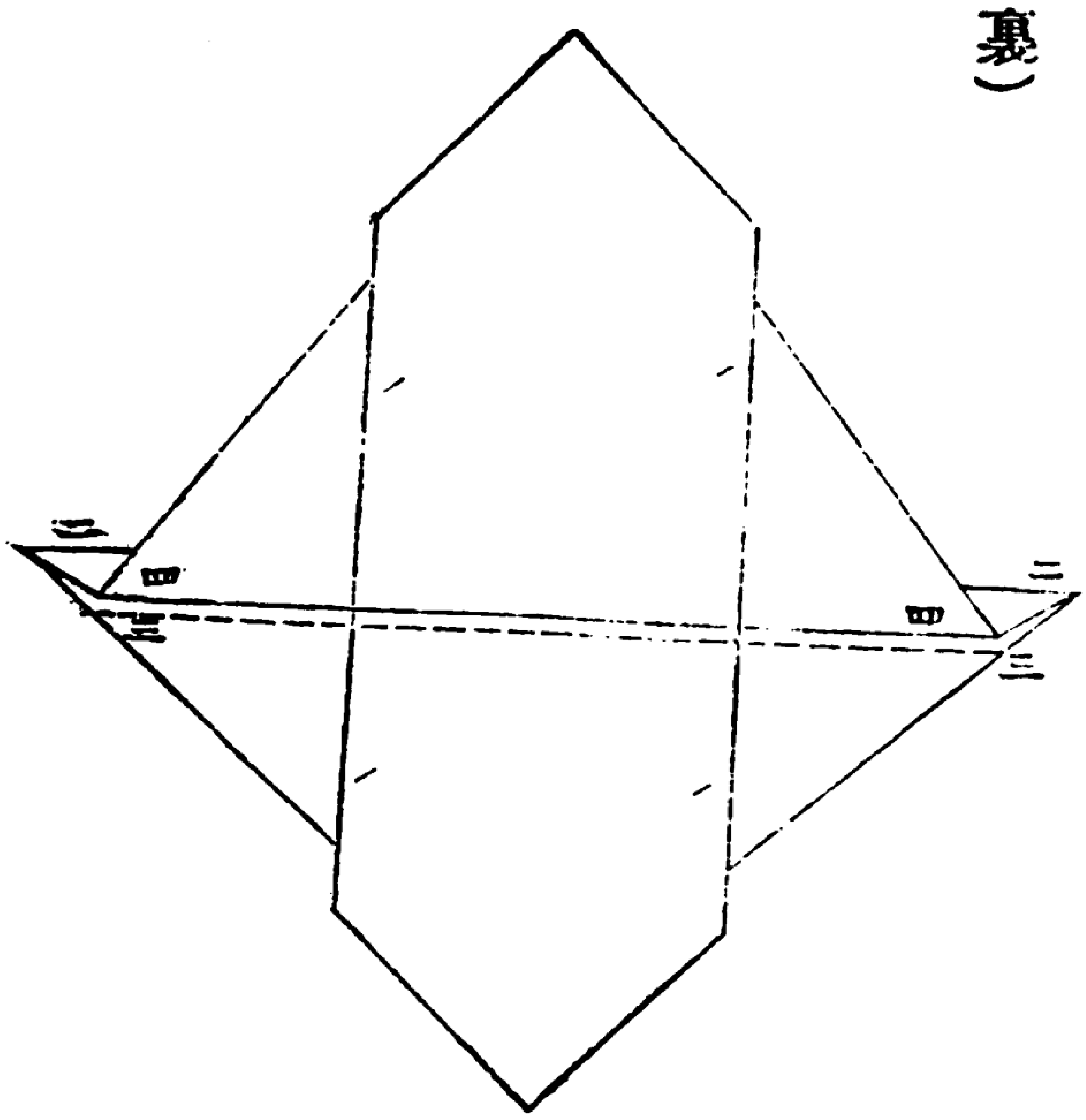
(表)



折り返し、三角形(六)の線の所に筋をつけ、第六圖の如く開き、(七)の通りに筋をつけ、左右ともなしをへて、后第三圖の如く中央の線(二)を外面に向けて折り兩側の二線(三)(四)を内部に向けて折り返し、(三)(四)を

第四圖

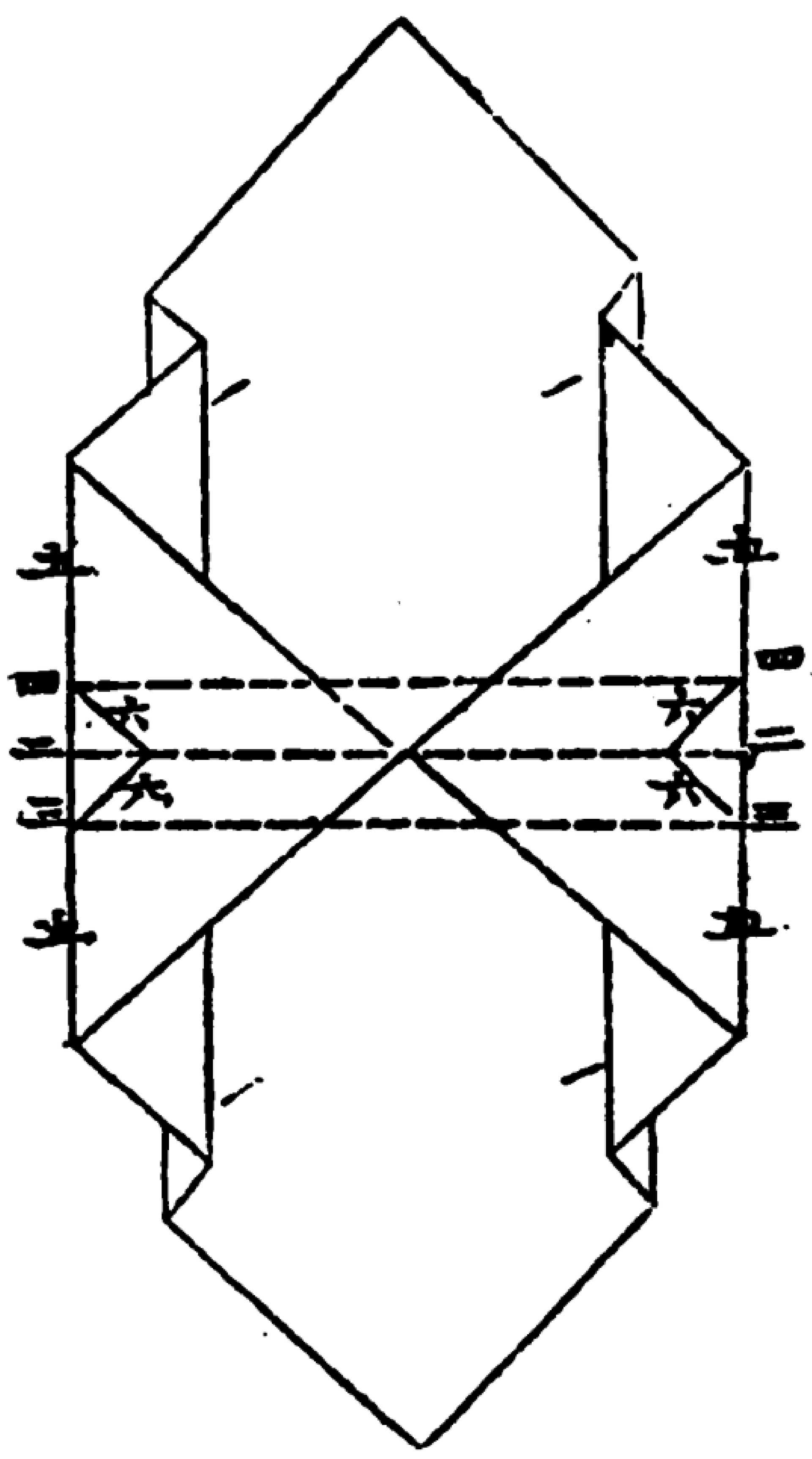
(裏)



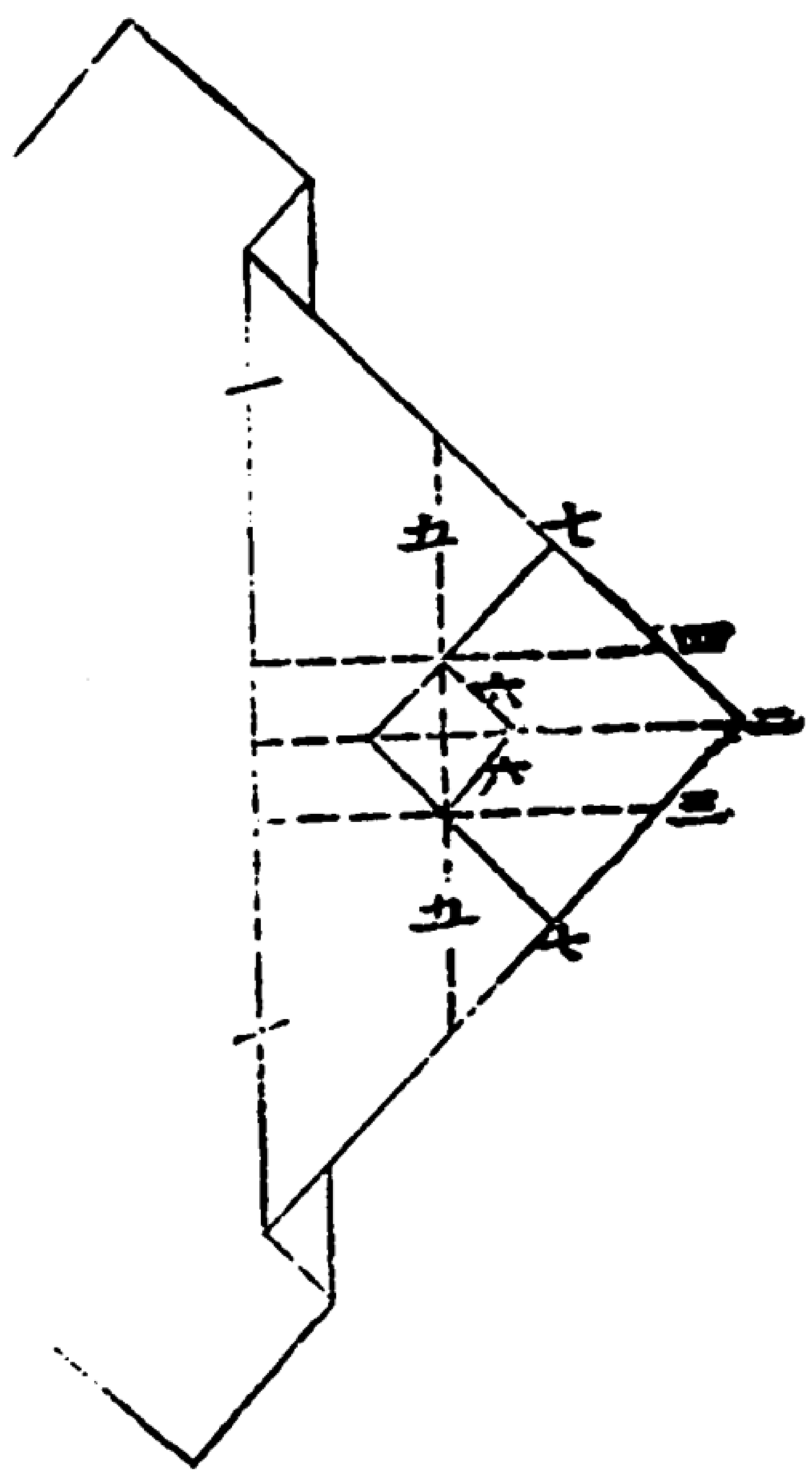
開きて中央の線を上に向けて立つ樣になしれき、(五)の線を折りて、第七圖の如く(二)(三)(四)(七)を上に向けて立てゝ、猶

(五)(六)の所工合よく折り、左右とも斯の如くして、兩方折り合せたるもの　即第一圖なり。第七圖は折り上げたるを一つ開きて其の立ちたる處を横側の少し左の方より斜に見たる圖なり。猶みづから試みたまはゞ自ら明ならむ。

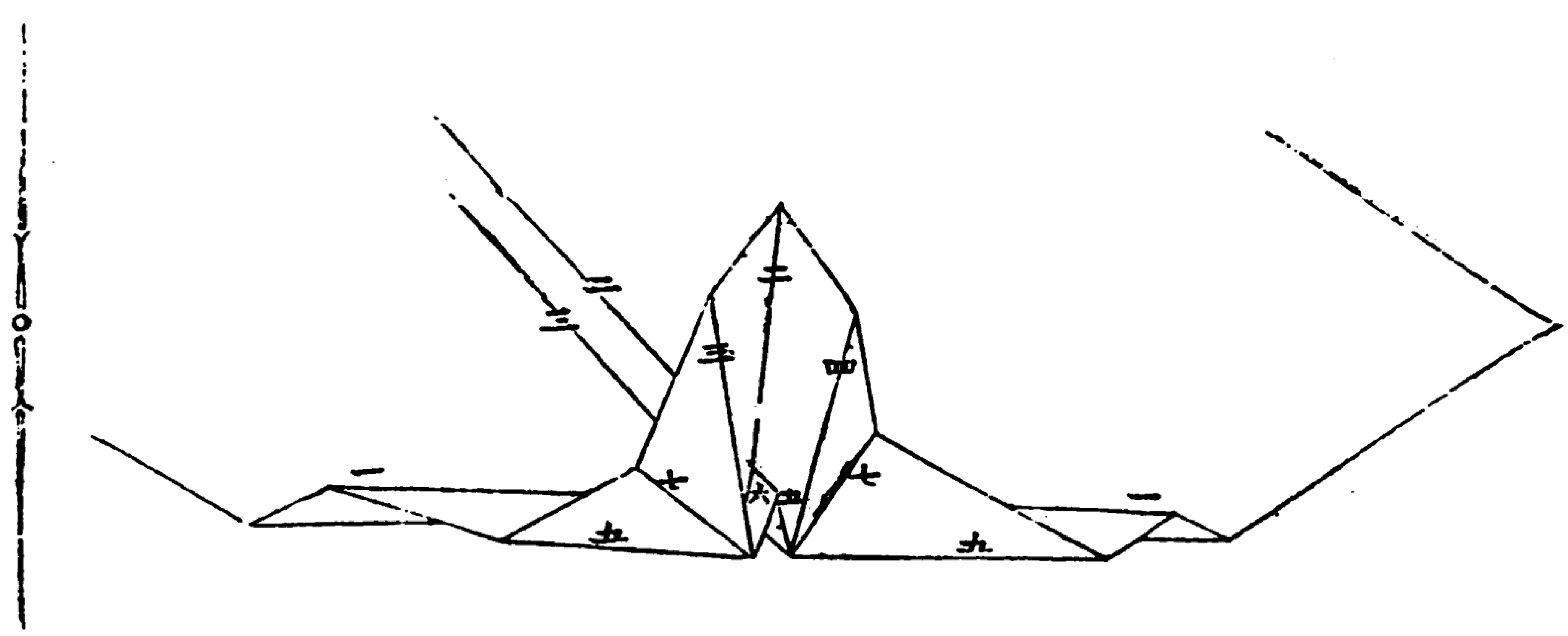
第五圖



第六圖



第七



茶の湯

茶禮初學（續）

孤峰菴不羨
關　葦雄

一料理方拵へ不殘仕度の事

註釋、不羨曰、さて料理拵方とは、汁の實、向付に可成品、椀盛の種、燒物、吸物、八寸の物、香の物迄一切拵方の事は、献立を前日迄に定置とも、當日に至れば、實際生魚野菜の品と雖、或はなき品物もあるべけれど、臨氣に變更なす事あるべし、先白米を研ぐべし、味噌も摺べし、（但し三州味噌を用ゆべし）椀類、折敷、向付、飯繼、湯桶、抄子、通ひ盆、脇取盆、八寸、吸物、椀盛、燒物鉢、香物、鉢箸類に至迄取出し。夫々拂拭すべし。魚類も夫々習の如く庖丁を加へ、薄鹽を振とか、下蒸をかくると歟、中々に多端なるものなり、是等の細事は、茶道初歩の令孃等には、はじめより一手負擔せよと云は餘程困難なる場合もあるべけれど、此邊の事は、半東と唱る事馴たる人に依頼するか、又は該宗匠を聘する歟して其事を取扱はさしむべし。客一二名入り來らば、飯の火を焚付べし、水加減は、飯は柔かなるを好む、其外は口傳に讓る。只萬事に心を用ひ、氣配專一に活用を旨とすべし。

一客入來らば取次の者出、待合へ通すべし、亭主は茶席の中をざつと座箒にて掃くべし。賓客揃たらば手水桶を持出、手水石の水を入替、而して後迎に出べし但し歸り掛、中潜り又は猿戸數奇屋の戸少し明かけ置なり。夜會には手燭持出、潜り又は猿戸の外飛石の邊見計置べし。

註釋、本行客入來らば取次の者と云は、則通

ひの者也（但し茶道に馴たる人、又男女の少年可然）此所にて途中の履物を脱せ、路次草履にはき替さしむべし、客は案内に任せ、待合に通り、能落付、香煎等出居らば、隨意に湯を呑てよし。着服を改め、足袋をはき替、若外套着用の人もあらば、爰にて脱取べし、茶事は禮を尊ぶものなれば女子は白襟紋付、男子は十德、或は羽織袴を着用すべし。時更に茶道は穏當を好ものなれば、華美に流れ、驕奢にわたりたる姿形を許ず、純粋高尙に出立つべし。偖又亭主は此時より帛紗を腰間に狹むべし。座箒にて茶席を輕く掃淨むべし。次に下火の加減を直し、香を焚客揃たる報あらば水桶を携へ往、手水鉢の水を入換、迎に出るなり。此時腰掛にても、又は疊敷有之場所にて、障子建切ある共、態々咳拂して迎ひを掛るを知らしむべし。鳥渡顔を見合せて席へ御通り可被下と云述ぶべし。待合中潜り、或は障子有所ならば、手掛丈明て掛置事習なり。又但し書の如く路次の猿戸は明置茶席入口の戸も潜り上りにもせよ、織部口にもせよ、明けかけて置ものなり。

一客方へ禮を受て（但此時客方も亭主の顔を鳥渡見合て時宜すべし）手水遣ひ、一人宛席へ入事法の如し。

但し入様は上客手水石の前に往たる時に、二客待合を出、上客潜上りの所に往たる時に、二客手水遣ひ、上客床前へ往たる時、二客席へ入、上客釜の前へ往たる時に、二客床前へ往、段々如斯、幾人にても同事なり。末客入り終りたる時、戸障子を僅少音ある様に建切べし。是則、客皆々席入濟たるを亭主へ知らしむるためなり。

（註釋）客方は迎の禮を受たらば、相客互に上客の禮辭あるべし、是は高貴の御方、又は其道に巧者の人ならば勿論、其人を上客に出すべし高貴の御方ならば末座の人御先立相勤、御手水をも掛

て上ぐべし。御履物も始末すべし扨上客定りたらで、御先へと云て罷出べし。出るには、座し居て草履を直し、足を先に出して履物をはき往べし急歩すべからず、徐々歩行しながら、路次の樹木飛石配置高下に心を付べし。兩便の心持あらで行てよし。席入後は失敬なり、爰にも手洗水あるものなり、蹲石の水は、杉柄杓を右の手に持、水を汲て左手に移し、兩手を洗ひ、又柄杓を持水を汲、左手へ移し、口中を洗ふべし、水を遣ふの心得は、水を十分に汲、ふさ〳〵と遣ふべし、清淨を要する故なり、後又水を汲、柄杓を逆に立て、持たる處を淨め置もの也。

（以下次號）



女禮（續）

禮節教授　有住常子

伸鮑三方參らする樣

これは近世よりのならはしにて、客來、諸祝儀、又婚禮式の節に用ゐ來れる物にて、今もなほ、祝儀婚禮式等の參らするなり。

まづ三方のとぢめを向にして、人の方にむけ、伸鮑の幅廣き方を右の方に、包みたる方を左の方にして横に載て、左の手にて手前のくりたる所より三方面のそこを捧げ、右の手にて右のふちを下よりもちて、

三方の上に敷紙ありて左右にたれたり、其上に伸鮑は置きたるなり。

兩のかゝとをたてゝ、右の膝頭を少しもたげて、右の膝頭を少しもたげて、右の方へ腰を捻りて、

この時左膝を右の方へ、たゝみをずらして寄せなが

ら右の膝をうかしたるまゝひらく也。
ますぐに持たる物のまがらざる様に立ちて、左足より進みゆくなり。
さて御前に至る閾ぎはにて、立止りて兩足そろへたるまゝ、膝を折りて跪きて、
この時三方のまがらざるやう心して靜に屈みて跪くべし、閾手前にて跪くなり。
もちたる三方すこし低くして、御前の方をそと伺ひ(これを中座の禮といふ)やがて立ちてこの時は其まゝ立上るなり。
(客來の節は)主客の中央に差置かん心組して進みて、三尺程の所に至りて程よき所に座して、
この時三方をきて一度進むれど、主と客の中央にあらん様に、其心して、立止りて、左を半足引て、左膝より跪き、次に右を蹴きて下に三方を置ながら右左と踵を平らになして居るなり。
三方下にをきて、胴をもちて押すゝめて參らするなり

さて貴人の方へ廻りて、中座去たりし所へ下りて、又貴人の方を受けて廻りて、例の如く坐して御禮申上ぐべし。
貴人の方へとは、上座の客右の方にあるには、三方押すゝめて、兩手を膝前に引よせて右膝に右手をそへて少し引て爪立て、左膝に左手をそへて少し引て爪立て、又右を少し引て、右膝をうかめて、右に捻りて立上りて、右足を一足引、左足を一足引、次に右足を左足のあとの方へ、横に引て付て、次に又左足を右足のさきの方へ竪に付てめぐりて返り、中座の所にて立止り、右足を左足の先へ横につけて、左足を右足の後へ竪に付て、右足を踏そろへて、左足を半足引て例の如く居りて御禮申上るなり。
さて主客も御禮あるなり、御禮終りし時、進み出で、三方臺の三尺程手前にて踏止まりて左足を半足引きて右足より跪き右足も跪きて、兩手をすこし間をあけてそろへて進めて、右左と膝をすゝませて、持よき

程にして、三方の胴を押へてすこし引て、初の如く左手右手にて持ちて、右膝を引て爪立て、左膝を引て爪立て、又右膝を引て、右へ捻りてたちて、三足引て右へ廻りて返るなり。

○こは稽古の時の樣なり、三方持て參る高さは乳通と心得てよし。又置つる時は少し進め、引くべき折は少し引出して持と心がけれくべし。一人の御前ならむ、正面に進め參らすべし。二人の時は中央におき多人數御列座の時は上坐の御前に持行て少し下に置く樣に進めてめぐりて立返り下坐より下の方にて御禮申上て、御客一同に御禮あり。終りたる時又進みて引くべし。

○婚禮の時の樣と、伸鮑包方は別にとてこゝにははぶきつ。



新撰 結物百種（第三）

百草菴一無

あたらしき方の用うべきやうは百草菴がこゝろこめたる所にして、古めきたるは石井ぬしがことなをみじかくうつしそへたるなり。第一。第二、はた此結たる形は、とみにしらせたるによりて詞をれとし、結の糸の乱れたる跡をもとゞめたれど、こたみよりのちはよく正しつゝ、百種の茂きをもつぎ〳〵に植ゑはすべし。

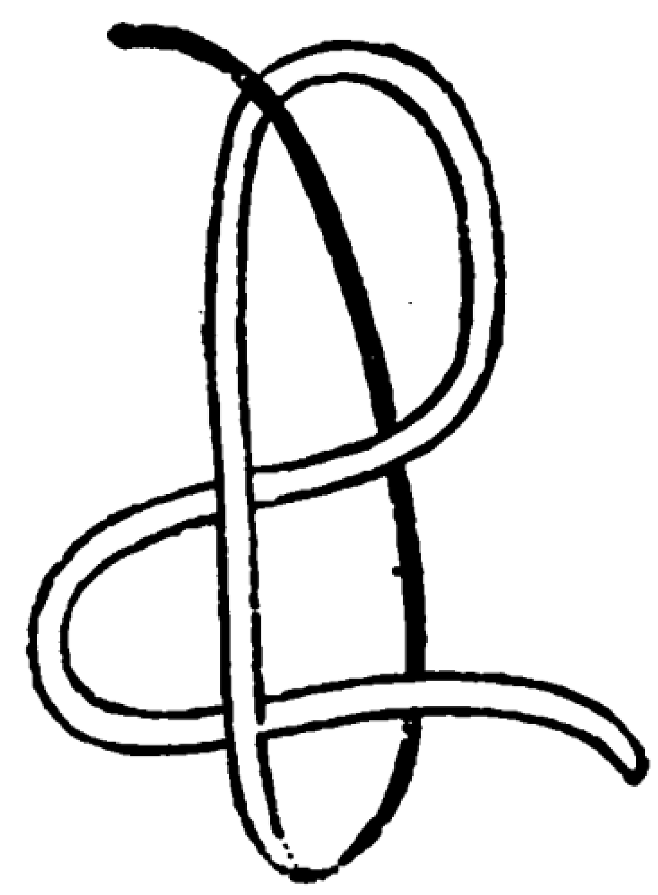
五行結　當世は男子の扇子の紐などに用ゐてよし。

（石井泰次郎云伊勢流の結記に、五行結一名はたむすび、表に結め三ッ、裏に結め二ッ故に五行結と云、機結とは、はた織る者糸の切れたるを如此して結び付る故はたむすびとも云なり。他流の結記に五行と叶は陰陽の結方にて、壁へも貝桶ならむ雄蜻蛉に

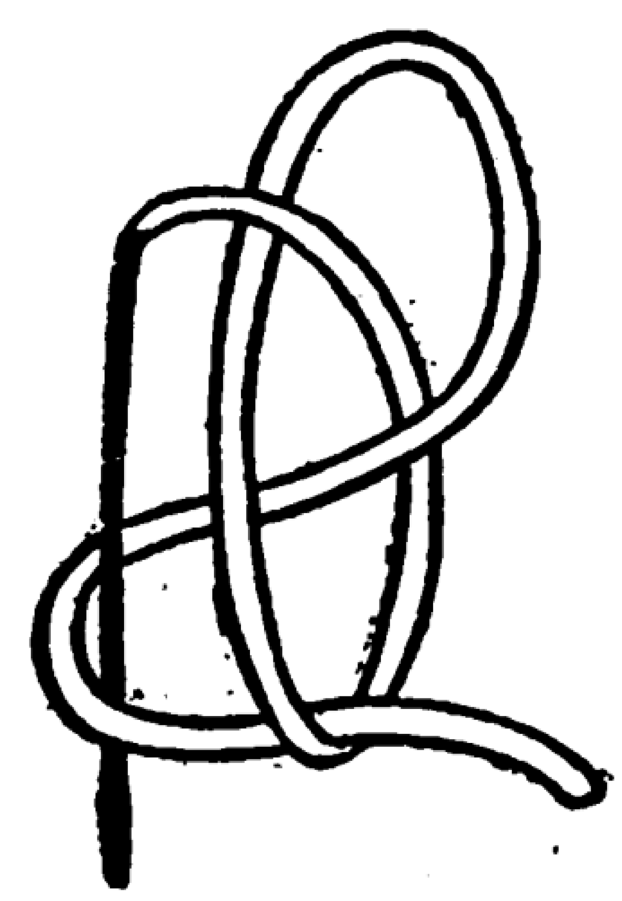
五行、雌蜻蛉に叶を用うるが如し。銚子雌蝶付る方に叶を用ゐ、雄蝶の方に是を結めの終りに用うるなり。又采配、軍扇の、腕ぬき、其外叺のくさり留にも用うと見えたり。

黒線の通りに紐を通す

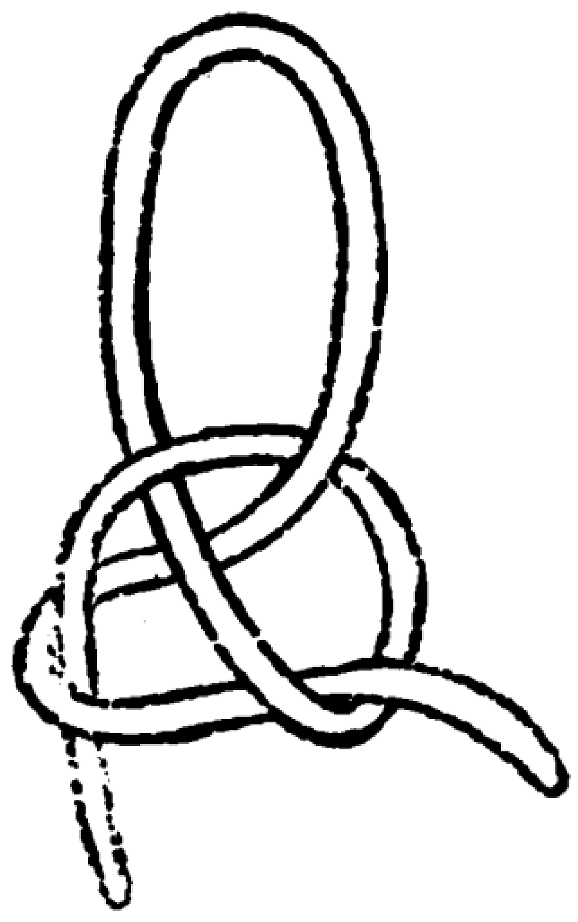
第一圖



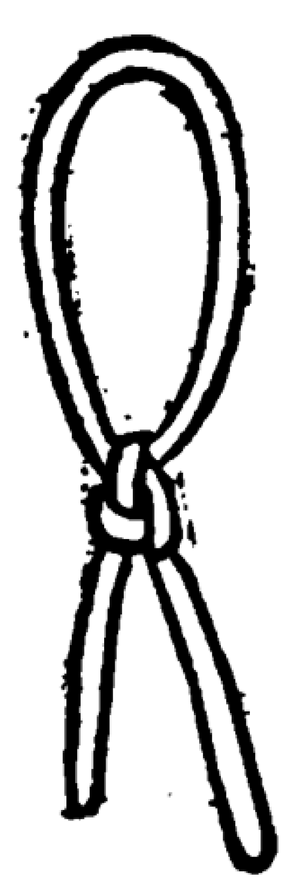
第二圖



第三圖



第四圖

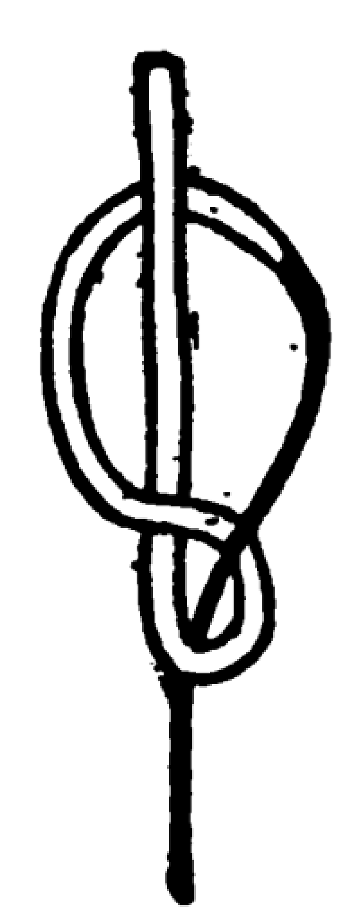


結び上り

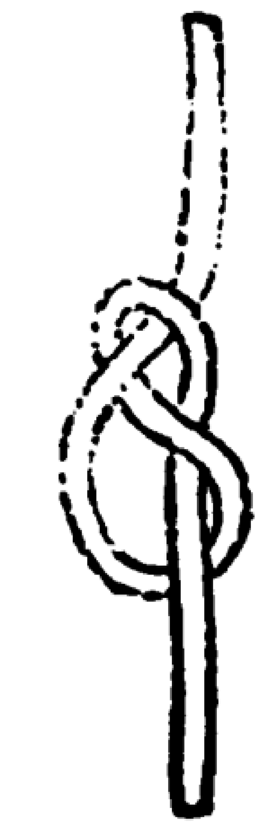
一筋五行　一筋物にふしを付る様の時に用う。假令へむ金物にてもかくして用うるが如し。

（石井泰次郎云つよくしめたるが、形五行結と同じけれど一筋五行といふなり。こをひきしめざるを直垂のきくとぢに用う、これを露の紐といへり）

第一圖



第二圖



第三圖



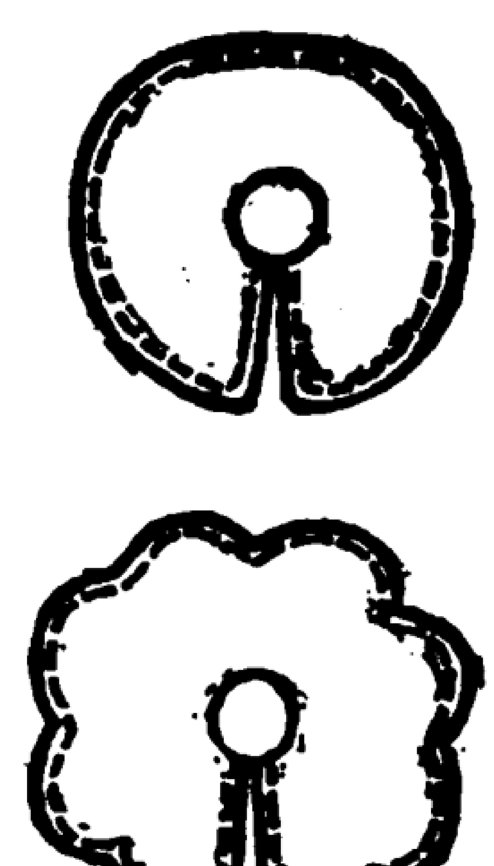
結び上り

たちぬひ

西山たい子

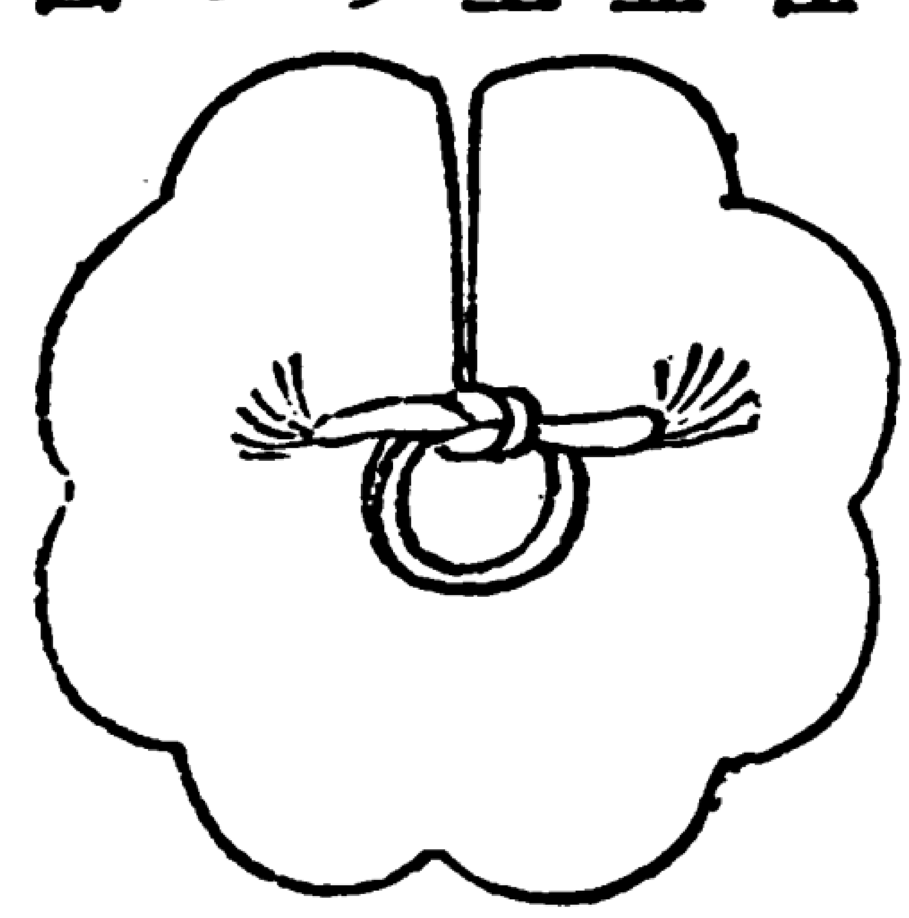
(九六) 誕懸の縫ひ方

まづ表切と裏切とを、表を中にして合せ、何れの形にても

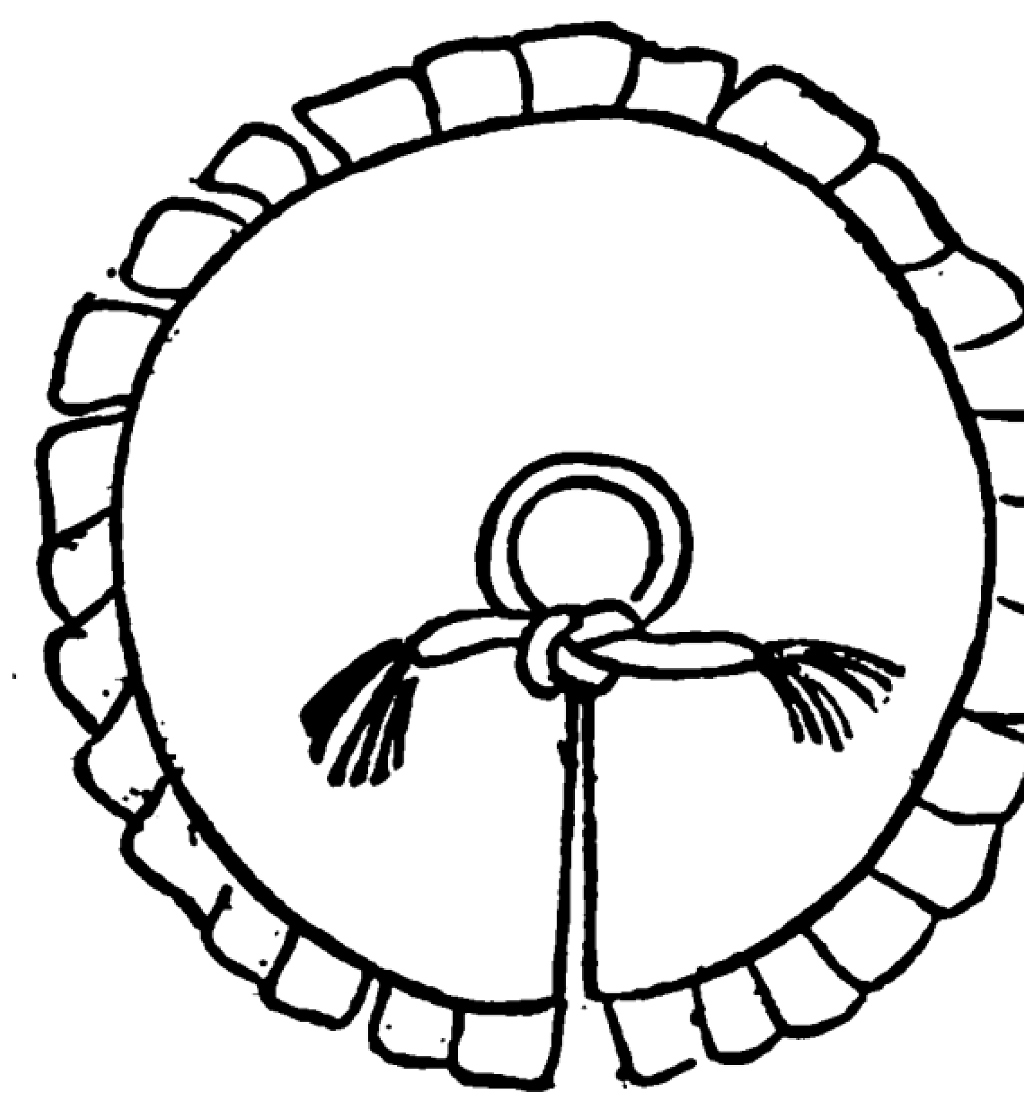


上圖の如く周圍をぐるりとぬひ、よくすぢをつけて、首まはりの所より引きかへし、そのあきをる所を合せて大針にとぢおき、それより紐をぬふなり。紐をぬふには、眞中を首まはりだけあけおきて、兩方を縦に細くぬひ、よきほどに綿を入れ、兩はしを糸にて引き結び、さて誕懸をとり、首まはりの所の表がはに、紐のあみおきし所をぬひつけ、裏がはにて絎けべし。但し周圍を縫ふ折りは、よくよく凸凹のなきやう注意してぬふべし。凸凹ある折はその形あしく出來あがれるなり。又此の形の周圍にひだ切を入れんとならば、ひだの切を縦に二つに折り、周圍の長さと同じ長さになるやうにひだをつくりおきて、誕切の裏と表とを合せたる間にはさみ入れて、其周圍を合せぬひ、同じく首まはりの所よりひきかへすべし。之も凸凹のなきやう、合せ方もぬひ方も注意すべし。もし凸凹あるときは、形いびつになりて見ぐるきものなり。

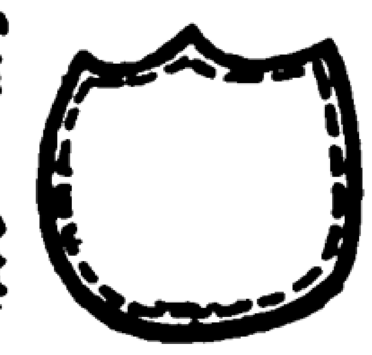
仕立上りの圖



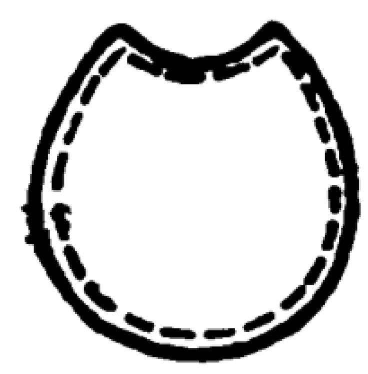
仕立上りの圖



又梅の形なるは、まづ五葉とも一つゝ、表裏合せて、

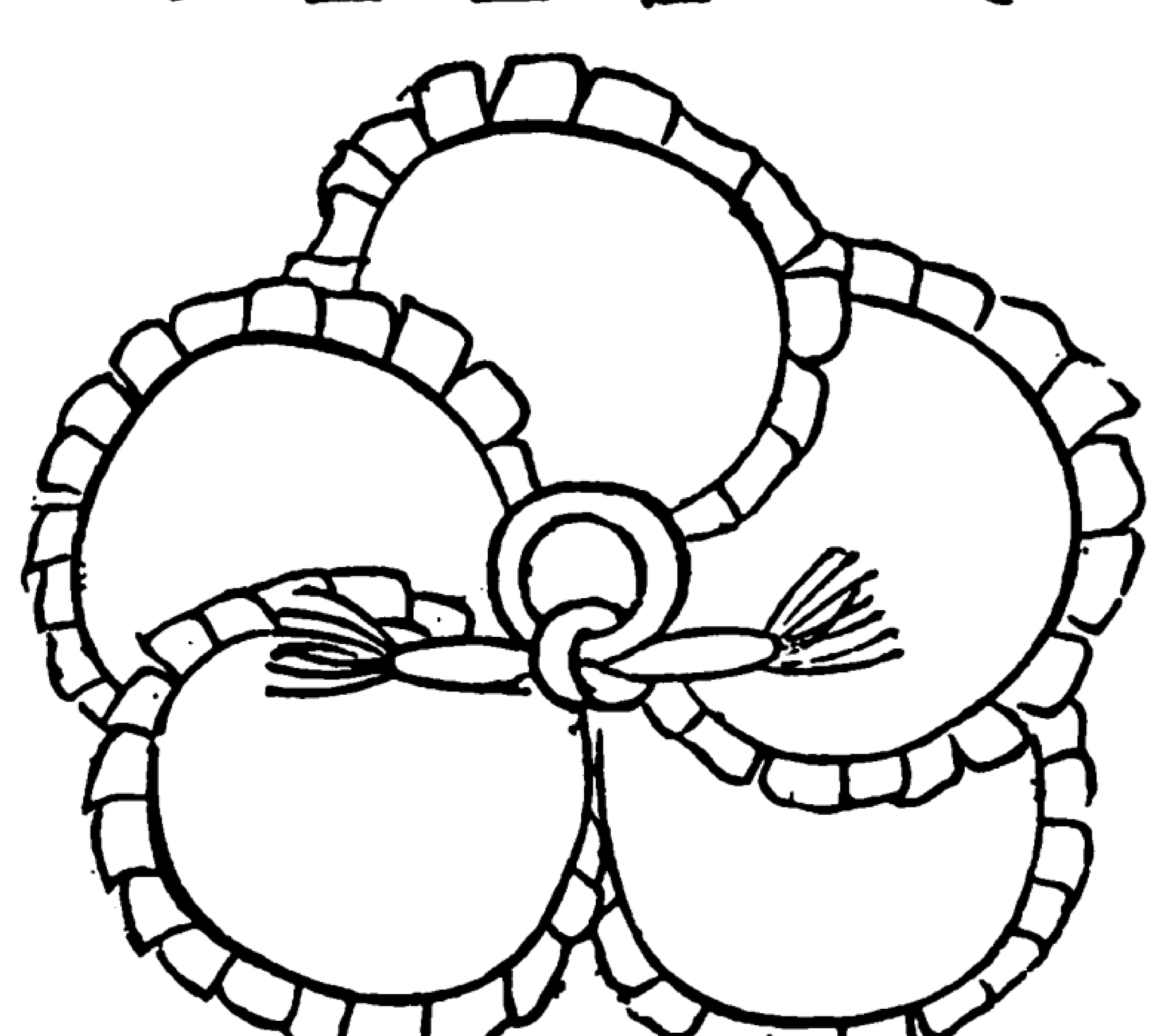


周圍を上圖の如くぬひて引きかへし、そのあきをる所を首まはりとするなれど、よき程に重ね合せ、かけをらぬを、一番上のはしに但し、



なして、五葉とも同じやうに首まはりをはかりて重ねあはせ、糸にて首まはりの所をとぢ、紐を初めに云へる如くにしてぬひ、首まはりの表がはにぬひつけ、裏にて絎るべし。又その周圍にひだ切をつけんと思はゞ、みな前の如く、その切の周圍を同じ長さにひだ切つくりおき、表裏合する時にはさみ入れてぬふべし。

その仕立上り



だいどころ

一　鱠

六月より九月迄を、期節とす。調理方、すつぽん煮、

かむやき、味噌汁等なり。

一 鯡

十二月より翌年の三月迄を、期節とす。料理方、甘露煮、すゝめ焼、あらひ等なり。

一 鱒

二月頃より四月頃迄を節とす。用ひ方、てり焼、味噌漬、鹽燒、酸の物等なり。

一 鮭

十月より翌年の一月頃迄を期節とす。てり焼、味噌漬、鹽燒、黒漬等なり。

一 鮭黒漬の法

新鮮き、鮭を三枚におろし、能程にきり、又は其儘にても、二三日間鹽おしになし置、白米二升程飯に焚、其中に麹五合を投れ、能く交合せ、(桶にても瓶にても宜し)能程の器に飯を一通り置、其上に鮭を一通りと段々に漬込、上へ鹽少しをふりかけ、重き壓を置時は翌年になりても味ひ變る事なし。殊に夏期に至り、鮨に用ふるも佳なるものなり。

一 鮭の子粕漬

鮭の子を、きずのつかぬ樣に袋のまゝとり出し。裏表より鹽をふり、壺の中に粕を投れ、子のすれ合ぬ樣に漬込み置、數月を經たる後取出し、大根おろしを交合せ、酸の物には妙なるものなり。又豆腐の汁に投れ用ふるも佳なり。



秀歌集

鹽井正男

○

山おろしに鹿のね高くきこゆなり
尾の上の月にさ夜やふけぬる

○これは、新古今集秋歌の下の卷にあり。○山おろし。山より吹きおろす風のことなり。○鹿のね。鹿のなき聲なり。○きこゆなり。きこゆるワイと詠嘆せる詞にて、こゝのなりは詠嘆の意をあらはすなりなり、古今集の「秋の野に人まつ虫の聲すなり我れかと行きていざとぶらはむ」のなりと仝じたぐひなり。ものを云ひ定むるなりにはあらず。○尾の上。峯のことなり。○さ夜やふけぬる。夜も更けたるかといふ意にて、さ夜は單に夜といふにかはらず、さは語調を助けむ爲めにおけける詞なりみ。山、み雪、みよし野のみも仝じたぐひの詞なり。

○一首の意は、ふきおろす山風につれて、鹿の鳴く聲が、高らかにきこゆるワイ。高峯ちかくさゐわたる月に夜も更けたるかといふ意なり、石原正明ぬしが尾張の家づとに、此の歌を評して、唐詩に猛虎一聲山月高とおるに、いとようればゐて、一首の趣おはれにめでたしとはめられたる誠に評したまへり。

けだかくめでたく、詩の壯ごんなる趣を得たり。

○

たぐへくる松の嵐やたゆむらむ
尾の上にかへるさをしかの聲

○これも仝集仝部にあり。攝政太政大臣藤原良經の歌なり。

○たぐへくる。たぐふは連れ伴ふ意にて、たぐへくるは連れ伴うて來るといふことなり。風につれて鹿の鳴く音のきこゆるを、かく、鹿の聲を連れ伴ひ來る風といへるなり。○松の嵐。松ふく風なり。○たゆむ。緩むといふに仝じ、ものの勢の緩み怠る意なり。こゝにては、風の勢の緩み怠るをいふ。○をのへにかへるさをしかの聲。峯に歸へるが如く、鹿の鳴く聲の遠くかすかになりたるをいふ。さをしかといふは雄鹿のことにてさはさ夜のさと仝じたぐひなり。

○一首の意は、今までは、近く高く聞こえたる鹿の

鳴く音が、いつしか峯に歸へるが如くに、遠くかすかになりたるは、尾の上の鹿の鳴くねを伴ひ來る松風が、吹き緩みたのであらうかといふことなり。

○

時しもあれふるさと人は音もせで
み山の月に秋風ぞふく

○おなじく新古今集秋歌の部にあり。よみ人もおなじ、心は、山家秋月をよめるなり。○時しもあれ時も時とて或は折りも折りとてといふ如き意なり。○音もせで。此の詞の下に淋しきにといふ意をたして見るべし。

○一首の意は、なつかしき故郷人の訪れてもくれさうなものと思ふに、ふるさと人は訪れもしてくれずして、もの淋しきに、折りも折りとて、み山の月のすむかげに、ものさびしき秋風が吹き訪づるゝ、されば一しほ淋しくおぼゆるよといふことなり。

○

こよひ誰れすゞ吹く風を身にしめて
よし野の嶽に月を見るらむ

○これも、仝集仝部にあり賴政のよめるなり。○すゞふく風。すゞとは竹の一種小き物なり。篠といふに仝じ。「よし野山すゞのかりねに霜さえて、松風はやし更けぬ此のよは」などのすゞも仝じ。すゞふく風とは、篠をふく風のことなり。○身にしめて。身にしみ／＼と深く感ずる意なり。

○一首の意は、今夜、誰れが、篠ふく風を、しみ／＼と身にしみおぼえつゝ、よし野の嶽に月を見て居るであらうか、さぞや悲しく淋しからむといふ意にておのれが月を見てあはれに悲しきまゝに、さぞや吉野の山にこもりて修行などして居る法師の、あはれに悲しき事ならむと思ひやりたる歌の心ならむ。情ふかく調べやさしくあはれにきこえたる歌なり。

○

見わたせば花も紅葉もなかりけり

浦のとまやの秋の夕ぐれ

○これも、全集全部にあり。よみ人は藤原の定家朝臣なり。○花も紅葉もなかりけり。心のなかりけりは花も紅葉も存在せぬといふにはあらず。花の事も紅葉の事もさる物をいふを要せずとか或は花もいらぬ紅葉もいらぬといふやうなる心なり。花も存せず紅葉も見えずといふにはあらず。浦の苫屋の秋の夕ぐれのけしきの面白さに心うかれて、花も紅葉もいるものかとめでたるなり。○浦の苫屋。苫屋とは菅茅など編みたる苫にて葺きたる小家にて海士のすむ家にいふ。故に浦わの海士の家なり。

○一意の音は、浦の苫屋の秋の夕ぐれを見わたせど花の事も紅葉の事も最早いふに及ばぬ、ワイ誠に面白きけしきであるよとながめたるなり。浦の苫屋の秋の夕ぐれのけしきをめでたるなり。

なほ全じ所にならびて、おなじく秋の夕ぐれをよみたる歌に、有名なる西行法師の歌あり。誰れも知りたらめど、次手なれどあげむ。

心なき身にもあはれは知られけり
鴫立つ澤の秋の夕ぐれ

歌の意は、あまりに明に、人も知りたらむと思へど云はざるべし。されどこれは秋の夕ぐれのけしきを面白くながめたるにあらず、心なき身にもあはれに悲しくおぼゆると秋のものさびしげなるけしきを身にしめたるなり。

源氏物語講義（第十二）

下田義天類

其の年の夏、みやす所、はかなきこゝちにわづらひてまかでなむとし給ふを、いとま更にゆるさせ給はず年頃、つねのあつしさになりたまへれど、御めなれて、猶しばしこゝろみよとのみのたまはするに、日に〳〵おもり給ひて、たゞ五六日のほどに、いとよわうなれば、母君なく〳〵奏して、まかでさせたてまつり給ふ。

これよりまた向をかへて、光君の母君、即桐壺の更衣の事を主として書き續けたり。其の心して見るべし。

○其の年 とは、光君三歳になりたる年、即御袴着の儀ありし年のことなり。

○みやす所 とは、御息所の儀なり。息みのみの字を音便にてんと撥ぬるやうに讀みたるが、遂には其のんの字も聲ぎれして、みやす所と聞ゆるやうになりしものなり。御息所とは、元來うへさまの御休息所を云ふ名なり。此の御休息所に伺候する女官を、みやす所の御方と云ひたるが、遂にうつりて其の女官の名のごとくになりしものなり。下々にて、奥の部屋にのみ居住する婦人をおく樣といひ、新造したる家宅に居住する婦人を御しんぞ樣といふと同例なりこゝにては即此の光君の母君、桐壺の更衣をさしていへるなり。これまではいつも更衣とのみ書きあらはしてきたる御方を、こゝに始めてみやす所と名前がへしてかきあらはしたり。此の物語の例を考ふるに、女御更衣の方々の中にても、其の他の御方にても、すべて御子を持たせ給へる御方をぞ、おほかた御やす所といへり。桐壺の更衣も光君を持ちたるが故にかくいひかへたるものと見えたり。これは此の物語の例なり。蓋當時かくのごとき慣例の有りたりし事なるべし。今親王方の御内君を御息所と申し上ぐる例とは聊かはりめあり。心得おくべし。

○はかなきこゝちにわづらひて とは、賴み少く思食すやうに煩ひてなり。

○まかでなむとし給ふを とは、御暇を戴きて内裏を退出せむとしたる由なり。即病氣療養の爲に、みやす所御自身の里亭へ引取らむとしたるなり。まかでは、まかりいでのりを音便にんと呼びかへ、さてい音を畧してまかでと云ひしが、これも先例と同じく、連聲の勢より聲ぎれして、そのん字も耳に觸れぬやうになり、遂には唯まかでとのみいふやうにな

りしものなり。即罷出でなり。內裏より自宅へまかり出づるなり。

○いとま更にゆるさせ給はず　とは、陛下の御許容なきなり。なせ陛下には御許容なかりしかといふに、次に連ねたるごとくに、年頃のあつしさになり給へれば御めなれておどろき給はざりしが故なり。言を換へて申せば、平生病氣勝の御息所の御事故に、此の度の御不例をもいつもの事と思食し御許容なかりしなり。これ併しながら、御寵愛の厚きが故に、暫時だに多く御側に置き奉らむとて、御いとまを賜はせられざりしなり。第三回目の講義の本文にありし『もの心細げにさと勝なるを彌々あかずあはれなるものにおぼして人のそしりをも得はゞからせ給はず』といふをこゝに對ひ合せて見るべき所なり。

○猶しばしこゝろみよ　とは、陛下より御息所への御詞なり。かばかり煩はせ給ふをも、平生の病氣に馴れ給へるが故に、一向におどろかせ給はで、猶しばし內裏に居て試みよとばかり勅掟あるよしなり。

○たゞ五六日の程にいと弱うなれば、右の次第にて兎角御暇を戴きかねて居たる程に、段々病勢は差重りて、日に〳〵重症となり、ホンニこの五七日間の中に俄に羸弱したればなり。

○母君啼く〳〵そうしてまかでさせ奉り給ふ　母君は御息所の母君なり。即故按察使大納言殿の北の方なり。御息所の御直奏にては、陛下の御聽許も容易ならざるが故に、此の度は母君より奏聞したるなり。御息所の命數既に旦夕に迫りたるよしを奏聞して、漸く退出すべき御許容を得たる趣なり。啼く〳〵奏す　とは、母君の思ひ入りたる眞心の底を顯して奏上したるなり。第五回目の講義の本文にありし『母北の方なむいにしへの人のよしあるにて何事の儀式をももてなし給ふ』といへる所をこゝに對ひ合せて讀み試むべし。

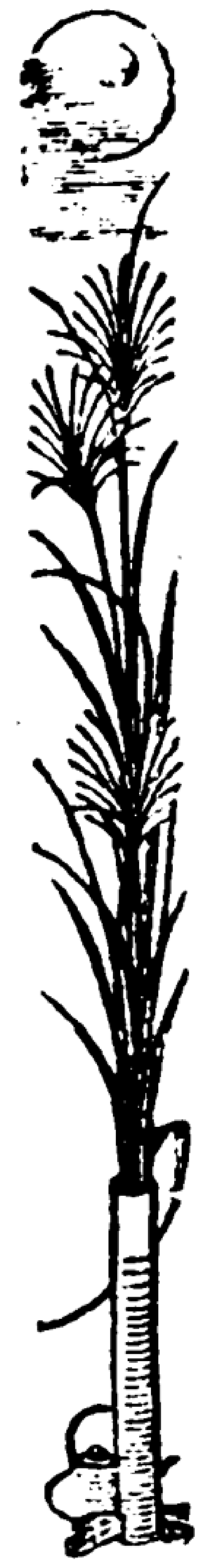
かゝる折にも、あるまじき耻もこそと、心づかひして

みこをばとゞめ奉りて、忍びてぞいでたまふ。
○かゝる折　とは、病氣危篤に瀕して、我も人も周章狼狽の際にもなり。
○あるまじき恥もこそ　とは、女御更衣の身分にあるまじき拔目落度もあるべきかとてなり。おとしめ疵を求むる人多ければ、存外に非難を受くべき事もこそ有らめと、豫め心遣ひしたる由なり。以ちて御息所平生の注意を察すべし。
○御子をばとゞめてまつりて、忍びてぞ出で給ふ　御子とは光君をさせるなり。御生子光君をば禁中にとゞめ奉りて、御息所御自身のみ忍びて出で給ひしなり。これ專人々の目にたゝぬやうに退下せむとの用意なり。
光君をいざなひ參らする時は、行裝も事々しくなりて、諸人の注目も多かるべければ一は以ちて諸人の目をひかぬやうにし、一は以ちて皇子に疵付けらるゝ機會を與へぬやうせむとてなり。

以上を取りすべて申せば、御息所は源氏の君三にならせ給ひし年の夏、頼少なに思食さるるまで煩らひ給ひて、後宮の奉仕に堪へ難きは申すまでもなく、行先きの事も覺束なく思食し給ひし故に、御病氣御療養の爲、暫時の御暇を乞ひて禁中を退下し、御自身の里亭にて緩々御保養を加へ給はむとしたり。然るを、陛下にはさらに御賜暇の御ゆるしなくて、此の年頃年來不斷の持病もちに成り給へれば、御病體をも見馴れ給ひて、さほどの事とも驚き給はず。いく度御暇を願ひ奉りても、まだゞ一も少しの間退出せずこゝにて治療のしるしをこゝろみよとやうにばかり宣はするにより、御息所の御心の儘に退下も出來かねて、彼是する内に日々〳〵に御病症はさし重り行きて、たゞ此の五日か六日が程に、ズット衰弱して、豫期の容體最御危篤になりにたれば、御息所の母君、即故按察使大納言殿の北の方より、退下御許容の事を、暗く〳〵奏聞に達し奉りて、漸御いと

まを蒙らすることゝし給へり。さて禁中を御退下遊ばさるゝに就きては、御子の御上も甚氣遣はしく思食せども、斯樣の混雜なる時には、何所ぞに拔目落度の爲損じもあるものなれば、成るべき丈人目に立たぬやうにせむとての御注意にて、皇子をば禁中に止め奉りて、御自身のみ極々ヒツソりと里亭へ御引取り遊ばしたりとなり。

註釋に、その年の夏云々は、上の段に恨みの積りたる事を云ひ置きて、こゝに至りて竟に病を引出したまへるさまにかきなされたり。是より下は帝の御寵愛の進み行く方を主とあらはしたりとある評は、讀者に對しての能き注意を與へられたるものなり。心得たくべし。



此度は記事輻輳して漢文學講義を掲げず、讀者諒してよ。



神宮御炎上小史（六）

安藤正次

第四 善後處分

神宮に御炎上あらせらるゝや、朝廷に於ては直に奉幣勅使を差遣し給ひ、また廢朝廢務を仰せいださるゝ等の事は既に之を述べたり。然れども、是は御炎上に對して謝意を表せられ、恐懼の意を體せらるゝものたるに過ぎざれば、その神官の處置如何を撿察し、殿舍の造營次第を計畫するが如きは、こゝに善後處分として存する處なり。

往古神宮に御異變あるにあたりては、朝廷は直に推問使を發して之を撿察せしめたりき。今其のものにみる

たる一つ二つをあぐれむ、延暦の時には、祭主諸魚卿、左大史船木宿禰一麻呂右少史良峯朝臣佐比雄推問使たり(太神宮諸雑事記)承暦の時には右中辨通俊撿察使として参向し(扶桑略記)仁治の時には公卿勅使參宮推問せし(神事供奉記)が如き是なり。然れども、後世亂雄の世を經るに至りては、かゝる事も全く絶ゆるに至りぬ。

かくてその推問の結果として、神官に對して祓除科をする等の處分ありき。實に延暦の際には大内人三人度會郡司等大祓を科して解任し、番小内人五人同じく祓を科して解任し、而して宮司野守は中祓を科し、禰宜には上祓を科したり。(大神宮諸雑事記)然れども是また後世にいたりては少しも制とするところなく、全く處分なかりしもの多し。

而して以上は神官に對しての處分なるが、こゝに殿舎造營の事はつぎてれてる問題なり。勿論是は直に造營に着手せらるゝ事なるが、もと年月を要するものなれど、その間大神を假殿に奉安するを例とす。さてその假殿なるもの、或は故殿を代用するあり、或は他の殿舎を之にあつるあり。或は新に之を造營するあり、一樣ならざれども、要するに、時の便宜によるとみえたり。而してその新御殿の御造營成るや、やがて之にうつし奉る。之を臨時遷宮といふ。蓋式年以外なるを以てなり。然れども、是亦後世にいたりては、式年の制度すら行はれざりし程なれど、いとゞみだれたる事ぞ多かりける。

すべて是等のこと、くはしくかきつくる時はいたづらに長くのみなりなむ、今はこれにて筆を擱くべきなり。

(完)

怱忙中稿をれてこしゝもの、前後とゝのはぬふし多かり、且なるべく簡單を欲したれど、今みるにあかぬ所もあれど、大かたにてさてありなむ。

秋風立ちて燈火親しむべくなりぬ。筆をあらひて新しき題の下にまた諸嬢に見ねむ、あなかしこ。

主従心得草（前編下の巻續）

諏訪忠元　寄贈

主従心得の事

●又いわく、きのふもあれなる庇の屋根にて燕と雀とチヽクチヤ咄しをするを聞に、燕のいわく、●其元は浦山しい事じや、いくつに成てもひよこ〳〵と、盆の心でくらさるゝが、我等は又盆も過、彼岸になると生れ古郷をふり捨て、遠い國へ往ねどならぬと云はり●●とすれど、雀は飛のき、身戰ひして恐るゝ躰、燕類をふくらしていわく、●我等こそ離別の愁もあり、汝又何故に彼岸と聞て恐るゝや雀のいわく、●燕は社日を知りて巣を辭し去るといふ事古き書にあるなれど、今に始りし事にも非ず、さして命の沙汰もなし、我等は命にかゝる大事あり、名聞か誠の慈悲者かしらねども、彼岸まへには鳥屋にいひ付、例年の通り放し鳥、雀何百羽鳩何百羽中日に持參すべし、幾日は先祖の日、何日は親の日子の日などゝて、百羽二百羽方々の注文に、鳥屋も其心當にて、前方より捕集め、買あつめて、彼岸をまつ、其間の困窮に半分は冥途の鳥となり、死殘りたるを以籠に詰、慈悲者の方へ持行ど、直に御寺へ參り、寺にて何やら和尙樣が唱へて下されても疲れ果て耳にもいらず、彼是する内はや戸をひらき放さるゝゆへ、●籠より出ても高飛ならず、やう〳〵塀の上土藏の庇にとびあがり、一息ホットつくを見て、あれ見られよ方々、鳥類とても恩をしり、此方へ向て禮をすると、放してくれたを恩にきせる、放して貰ふた嬉しさより、捕へらるゝ時の悲しさを推量して見給へとうらめしそふに●咄しけり。いかさま雀のいひし如く、買人があれどこそ賢人が出來、放し人があるゆへ捕へ人があり、もとより放す鳥をとらへて放すといふはいらざる殺生、慈悲じやと思ふてする事にも殺生になる事もあり、こゝろを用ゆべし。

●かやうにいへど、放生會はいらぬ事と思ふ人もある

べし。全以左にあらず、眞實にもせよ名聞にもせよ。放生會の出來る人はなすべき事也。生靈の重んずる所、壽に過たるはなし。金がほしいの、米が入用など云は、命をつなぐまでの手段なり。たとへ大千世界にみちたる寶でも、命にかへる寶はあるまい、其大事の命を死殺す事、惡の中の大惡也、報ひ。なくてかなはぬ事也。心にかけて放生會をなすべし。殺生戒を以て諸善の根本とする、德功の中の大功德なり。燕と雀の問答は善に魔のさす事あり。氣をつけよといふ事也。是いわゆる善の善たるをしりて、善の惡たるをしらずといふ古語の如し。又美の美たるをしりて美の醜をしらずといふに同じ、老子にもあり。見て心得給ふべし。



最明寺殿教訓百首（十）

福原 菫子 寄贈

うちわらふことも得しらずはらだちて
　たはむれしらぬ人ぞはかなき

ざれたはふれて笑ひ遊ぶと知らず、只嘲弄と心得て腹を立つ人は、まことにはかなき心なり。譬ひしれものありて、實にわらひ嘲るとも、たはふれにとりなし、其場をさむるこそ、天晴よろしき心がけなりかし。

わざはひの門は口ぞとつゝしみて
　ものいふたびにこゝろ用ゐよ

我人ともに禍ひは外より來るものとばかり心得、神佛の力を頼むことをのみ事として、己れを愼む事を知らざるは、迷ひのはなはだしきもの也。知らずや口は禍の門にて、舌は禍の根なることを。又舌三寸のさへずりにて、五尺の身をはたすともいへり。愼しむべしつゝしむべし。

いたはりて親のそだてしかひもなく

身をあだになす人ぞはかなき

人の親の子をそだつるその千辛萬苦は、中々言葉にものべがたく筆にも盡し難し、其子をいつくしみて大切に思ふ事は、萬の寶國天下にもかへ難しとなり。故に子たる者、父母の心を以てわが心となし、其身を大切にせんとならば、常に心をかけてこれを重んじこれを愛し危きに行かずそこなひやぶらず、全く保つを孝行とするなり。曾子曰く、身は父母の遺體なり。父母の遺體をそこなひて敢て敬せざらんや。孝經に云ふ、身體髮膚これを父母に受く、敢てそこなひやぶらざるは孝の初なりと。然るに、其身を粗末に持ち、高きに登り深きを渉りて身を危くし、不義非道にして身をけがし、或は罪を犯して毀ひ傷るは勿體なきことなり。かへすがへすも、我身は父母の遺體なりとて、大切に思ふべきなり。

貪慾はこの世も人にいやしまれ
後の世はまたならくにぞおつ

義理をわすれて、只ひたすらに貪るは、誠にむさくきたなく、畜生の心に等しきなり。諸々の罪障は皆貪慾を本とす。此世にて作りたる罪の因は、地獄におつるの果を見んこと疑ひあるべからず。

慈悲心はこの世の人に譽られて
後の世はまた佛とぞなる

譬ひ現世にては人にほめられずとも、成佛せむめでたからんに、まして他人にほめ傳ふるをや、これ日頃心を正しくして僞はらず飾らず、能古人の敎へを守りたるによるものなりとぞ。

情をぞ人にかくると思ふなよ
後はかならず身にむくうなり

人を愛する者は人常にこれを愛し、人を敬する者は人常にこれを敬すといへり。恩をあたへ情をかくれば、其恩德むなしからで、終に己れにかへり報ふ、これ爾より出るものは爾にかへるなり。さるを愚なる者は、只人の爲とばかり思ふ故に、まめやかに行ふ事なし。

上もなき玉を心にもちながら
　みがゝんとする人のなきかな

夜光の玉はこれを室に於けば、燈火なくして書をよみ、これを車にかくるときは、前後の車まで照らし、其あたひ城十五にあたる故、連城の玉ともいへり、誠に天下無雙の重寶なり。然るに人の心のあきらかにして、森羅萬象を照らし、理非分明にして神明不測なるは誠に無上の靈寶にて連城の玉と雖も遠く及ばず、さるを人欲の穢れにけがれぬれば、義理の光り發せずしてあれどもなきが如し、故に人は連城の玉を寶とする事を知りて、心の玉を寶とする事を知らず淺猿き事なり。あはれ志を勵まして、心の玉を琢磨き光りかゞやかさば、自ら富貴をも得、高位高官にも登りて、其あたひ十五城に限るべからず、勤め勵みて心の玉をみがきたつべしとなり。

よき人を見ればわが身もみがゝれて
　鏡にむかふこゝちこそすれ

人己れのかたちのよしあしを見ること能はず、鏡に向ひてこれを見る、人わが心のよしあしをしる事能はず、賢者のふるまひをみてこれを知る、これ善人君子は人の鏡なれば、其行ふところに習ひて、わがこゝろのすがたかたちを、正しくすべし。

みがくべき心の友をたづぬれば
　よきもあしきもかゞみなりけり

わが心ひたすらに善に移らん事をこひ願ふ者は、善を見ては勵み進み、惡を見てはてらしいましむるに於ては、譬ひ惡人の中に居ると雖も、心を磨くに於てはいさゝかも障りなきものなり。されば、善惡共にわが敎のかゞみなりとなり。

善人にむつみてもまた心なり
　麻の中なるあさを見るにも

よき人とむつみ合ば、其身自からよき人となる者なりと雖も、海の魚が鹽にしまぬが如く、聖人賢人と同く居ても移らざる者あり、これは下愚の至自らそこな

ひ、みづから棄るものなり。堯舜の時に四凶あり、湯武の世に桀紂あり、孔子の陽貨孺悲、小正卯、孟子の子敖等是也、此の如き人は麻の中の麻の直なるべきに、却てすなほならざるが如し、天下古今の捨りものにて耻べきは甚はだしきなり。いかなる愚人なりとも、善のしたがふべく、惡のさるべきを、曾て知らざるにはあらず、只其心におもへらく、我等如きの無性者は、人義の道は迚も及ぶべきにあらずと、我とわが身をそこなひて不義非道を行ひて止まず。かゝるが故に移ると移らざるは心なりと云へり、苟くも善の隨ふべく、惡のさるべきを知らむ。我と心を勵まして善を好む事眞實ならむ、善にすゝまずといふことなく、惡をにくむ事眞實ならむ、惡は去らずといふ事なし、小善なりとて棄ず、小惡なりとて爲さず、麻の中の蓬に耻て自暴自棄の氣習にかち、善に進み惡にふるべからずと、深く歎へ誡しめたるなり、古歌に「心こそこゝろをはかる心なれ心の仇は心なりけり」といふも心の移やすきを誡しめたる事にて、勤めて、心を惡に移らしめず、ひたすら善にひきとゞめて、能く守る時は終に聖人賢人ともなり得べきなり。

（終）

稲葉の露

井上頼文

ふみ月十七日の夕つかた、あづまの都をはなれ、新橋より汽車にうち乘て、おやこみたりいでたつ。さしもに氣色よき輿津のあたりも、ぬば玉のやみをぬひて奔る車のおとのみ。いとくちをし。トンネルの中ゆく時くろがねの橋の上渡るひゞき、または耳つんざかんむかりの發車の笛など聞ゆ、いかにをさなごの驚きやすると、あやぶみつるに、いとにこよかに、母の膝にありて、あたりの人々の顔などさしのぞきてうちゑみ、ほのぐらき天井の燈火などうちあふぎて咲ふさま、よろこぼしげなれば、まづ心おちつきぬ。されど去るやよひ、伊勢の國より、ゐて上りつる折は、はつか六つ

きに足らざりけれど、物の色音も、さのみは感ぜざりき。然るにこたびは、はや十つきにもなれゝど、ふたおやの、おもわも、おぼろげに見知りて、ものゝ音なども、やゝ聞きわきがほなり。故に高き笛のねにおびえやする。たゞならぬひゞきに驚きやすると、安き心もあらず。あくる日の午前八時ばかりに、名古屋につく。いとこみあひたれど、をさなごは、なごよかにあたり見やりてうちゑむ。こゝより車のりかへて、龜山につく。日かげまばゆく照りかゞやきて、暑さたへがたし。また乘りかへて、山田の停車場につきたるは、午後三時すぐる頃なりき。それより宮後なる、しぞくがりつきけれど、いと早かりし、こよひか、あすの曉がたならんと思ひしにとて、厚くもてなさる。さながら第二の故鄕に歸り來つるこゝちしてまづ嬉し。つまは、やをら板じきに腰うちかけ、をさなごに乳ぶさ含ませてありけるが、俄に心づけど、足はまがりのやうになりて、しばしすぐるほどに、あゆむこともあたはずなりぬ。水氣にやあらんといふほどに、をさな子も、いとはげしく啼く。つねは、寐覺にもにこやかにうちゑみて、啼くことは稀なるに、かばかり聲たてゝ啼くは、如何したるならんと、即ちくすしにみせたれど、をさな兒のは、いさゝか暑けに中りたる故なり。母のは脚の氣なり。心臟の鼓動はげしければ、よく心をつくすべし。はた脚の氣ある人の乳汁は、をさなごによからねど、こと人のを飲ましむべしといふ。とみに乳おもやとはんとて、をちこちさがしもとむれど、ふさはしきは、一人もあらず。からくして、近きあたりの人々のを、こひ求めて育ふほどに、うつくしき兒なり。しばしあづかりてみんといふ人の、いできにけれど、支度とゝのへてつかはしつるに、その夜なかばかりに、をさな兒の、いといたく、もだへ苦しみつれどてつれ來りぬ。こはたゞごとにあらじと、足もそらにて、くすしがりゆきつれど、はや門はかたくとざゝれて、はるかに吠ゆる犬の聲のみ高く聞えて、つねよりも、も

のさびし。やう〳〵に、おないをこひて、みするに、こは胃のよからぬに、乳を一時に飲みすぐしたるまでにてさせることもなしと、いはるれど、いと嬉しくていさみつゝ家にかへりぬ。しぞくの人のいはく。この兒、みめかたち勝れてうるはしく、愛らしけれど、心にかゝりぬ。死ぬ兒みめよしとか諺にいへる如く、あまりに愛らしき子は、命みじかきものぞ。此の兒は髭つら雷のやうなる人にも、おづることなく抱かれて笑ふ故に、何人にも愛せらるゝぞかし。ゆめな心をゆるべそといふ。つまは、あづまの都にて、もろ人にめでかしづかれしこと、はたゆきかひの車の内にても、よき兒ぞとめでらつることなど思はれてと、うちしはるゝを、はげましたてゝ、さま〳〵にいたはる。かくて、ひと日ふた日たつほどに、おとろへゆくさまの、何となく心ぼそけれどなどいふをりしも、朝がたよりいと苦しげにもだゆるやうなれど、もとのくすしと、またあらたなるくすしとに使はしらす。そのひまにくるしみます〳〵はげしくなりゆく。かしらは炎のもゆるが如くあつく、胸は荒浪のうち寄する如く、息つくごとに皮肉動きて、目もあてられず。かしら冷さんとて、氷ぶくろあつるに、あてたる氷はつかのまにとけて、とけたる氷はなまぬるき湯となりぬ。ものこそいはね、そのくるしさや如何ならんと、見る目も、いといたはし。ひるすぐる頃より、やすくねぶるさまなり。なやみも、いさゝかはれたりけるにやと思ふほどに、あらたにむかへしくすし來らる。とく苦みのはげしかりしほどに來りくれたらんにはと、家人のつぶやくもことわりなり。とやかくするほどに、もとのくすしも車はしらせて來らる。ふたりなみ居て、やまひの經過をかたらはるゝさま、あやふき病ともおもはれぬさまなり。こは消化器をそこなひたるがもとにて、熱いでたる原因は詳ならず。されど脳症には變るまじと、たはやすげにいひて歸らる。かくて夕つかたより足のさき冷えて、つめたきこと氷の如くなりぬ。たゞちに人を

くすしのもとにはしらせ、いまか〳〵とまつほどに、たなごゝろ、やゝやゝに冷えわたりて、はては半身氷のやうになりぬ。おのれ鐵醬筆に水ふくませて呑ましむれど、いとこゝちよげなる口つきして一口吸ひぬ、と見るまに氣もたゆげになりぬ。されどかしらと、胸のみはあつきこともゆるが如し。かさねて人をくすしがり奔らせしに、こたびはたゞちに來られて、さきのほどは、いづれも醫會にまかりて、家には在らざりきといふ〳〵、このさまを見て、こははやこときれたり。たのみなしといはるゝはかなさ、夢ごゝちしてたとへんかたなし。つまは、かしらと胸とのあたゝかきをたのみにて、なほよみがへることもやと、抱きしめつゝふり動かす。おのれもまた、かみのたすけを祈りつゝ、聲やいだす。ものやいふと、ゑめるが如き目もと、咲ふ如き口つきのみ、うちながめらるゝぞはかなき。百秋千秋さかえよと、稻といふ名つけたるもかひなしや。

玉しひは稻葉の露ときえはてゝ
　のこるなげきの種ぞかなしき
みのるべき秋をもまたでかきつ田の
　稻ばはあはれ枯れにけるかな

とうちいでつるは、三十一日の夜なかすぐる頃なりき。しぞくの人のいさめに、やう〳〵ひつぎにをさめ、よろづのことゞも整へ終へて、山田一の木町、字はしりれりの墓地に葬りつるは、八月二日の夕つがたなりき。こゝは小笹など繁りあひて、いと淋しき處なり。かゝるさびしき處に、をさな兒ひとり葬ることの悲しさとて、つまの歎くもわりなしかし。

　たらちねのはゝが乳房をこひつゝも
　　ひとりや野邊になきあかすらん

と思ひなげかれてなん。

をさな兒のみまかりしことを聞きて、三輪ぬしよりおくられたる歌、

横風の吹きのあらびに、ふた親の、かざせる花は散

りにきと、聞くだに胸のふたがりて、あはれしれども
はゆ。手にもたる白玉ならで、いとにぬきてとゞめ
てましを。七種の寶にまさるおもひ子を、さきだて
にたる憂たさは、いかなりけんとおしはかる。我さ
へ涙さしぐみて悲しきものを。君がこゝろは。

展墓紀行

安藤紫光

人やりならぬ煩悶に、心緒みだれて堪へがたきを、三伏の炎暑は現世の無情にも似て劇しければ、すこしく恙ある身はいとゞ腦裡のくるしみをましぬ。實にもわが思想は此の複雜なる社會に交はりて、世人の意思を迎ふべくはあまりに單純なるなり。まことやわが意思は此の險難なる世路をたどりて、前途の光明に達すべくは、あまりに薄弱なるなり。徒に世を恨み人を嘲つとも、何の甲斐かあるべき、いざさらばこの名利爭鬪の場をあとに見、紅塵雜沓の巷を立ち去りて、しばらく心身を靜寂の境におかむやとおもひ定めしは八月十二日の事なりけり。

されど、晨に釣殿に御し夕に水飯を召し給ふ金紫玉佩まばゆきわたりにこそは、箱根、大磯の清遊もふさはしからめ、玉樓の上に野邊の螢をはなち、翠帳の裡輕羅の袖に倚り浮世の榮華を樂しみ給ふ人々にこそ、須磨、明石の豪遊もおもしろからめ。落魄零丁かへるに家なく、寄るに所なき孤兒、この一寒措大がさしてゆくべき所やいづこ、東西南北いづれせむとも障なけれど、わが煩悶の慰藉をうべきは、たゞ亡き母の膝下あるのみ、永久に眠りませる母の御墓邊は實に孤兒の最なつかしき所にして、最親しき所、我は僅にえたる二三日の暇をこゝに費さむとこゝろざしぬ。旅衣姿はやつれたれど、足は輕らかにして朝早く都門をいでぬ。

おもへば母君とわれとのかなしき永訣は、實にわが七歳の年の四月花散りかたの頃なりき。その後久しからずして母君の墳墓の地を去り、後また父君にわかれま

つりぬ。爾來われは零丁孤苦、いつはり多き社會の途にさまよひ、定めなき浮世の波に弄ばれて、常に寄邊なく流寓をきはめ、孤燈明滅の下通霄いねず、泣きて現世を果敢なみしものそも幾度ぞ。

幸によすがありて七年の星霜を伊勢におくりたれど、不運の孤兒は常に薄倖なるべき運命を生れながらに有せり。しかの疑を脱却すること能はざりき。然して久しき流寓の間、なつかしき慈母の御墓にそむき奉りしもの、十餘年、落魄流寓の際またやむをえざる事なり。とはいへ春風秋雨、朝に夕に、この事は常にわか腦裡を攪き亂すものなりき、曽てなげきけらく、

母まさざればさぞとのみかこたれて
　　心よわさの身づからぞうき

母ぎみの御墓のあたりいかさまに
　　風わるゝらむ雨そゝぐらむ

いつかわれおもふこと遂げをへて
　　おやのみことの御魂祭らむ

孝なしとなきてぞ悔ゆる徒に
　　年はたとせあかしくらして

さるを、今年伊勢を去りて再東都に寄寓すること、なりしかば、いかにもして母の墳墓に謁せむとの心は禁ずること能はざりき。然るに今その豫てのおもひを達せむとす、たのしからずや。然れども、余はおもふこと遂げをへてよろこびを母の御前に捧げむとにはあらで、なかなかに萬斛の憂愁をいだきて、なつかしき慈母より慰藉の光明をえむとするなり。嗚呼余はいつまで不孝の子ならざるべからざる歟、悲しきかな。

母君の御墓は埼玉の縣、北葛飾郡早稲田村の中にて半田といへる所、萬勝寺の境内なりとはきゝ居たれど、素是生面の路なれば、たゞ一葉の圖をたよりとして、飄然として都門をいでたる身は、隅田川の長堤に沿ひて上り、右折して龜有にむかひぬ、堤上の綠樹は森々として陰おのづから涼しく、滿野の淸風は稻葉をわたりて綠波行人の裾を浸さむとす、少女が草を刈りはせ

る道、うなゐ子が水遊せる小川をすぎゆく、虚飾と塵埃との巷をはなるゝこと僅にして此の自然なる田園の風光に接し、日頃結ぼゝれたりし胸も少しく爽くやうの心地せられぬ。強き日の光に萎えしぼみたりし草の一村の夕立をえて青き色ふかく蘇るが如く、あへき喘ぎ山路にゆきなやめる旅人がたへがたき渇をしのびてたどりつきたる岩陰に、底清き清水を見いでたるが如く、

亀有村に入る、日既に午に近し、即茶店に憩ひて晝飯を喫す、主婦に途をとへば、中川を遡りて吉川まで到る早舟あり、これに乗り給はゞよからむといふ、よりて、その言にしたがひ、中川橋の傍より是に乗る、船は常に中川を上下するもの、亀有停車場の汽車發着に便せむ爲なり。船は和船にして屋根あり、風ある時は帆を用ゐ、然らざる時は二人の舟子棹をとる、陸にありてはたへがたき程のあつさも、水の上にては心からにもや、風なきに猶涼しきやうなり、少しく漕ぎはなれゆきて川の隈をめぐれる程、兩岸の蘆葦に風みえて、船中の曲肱うたゝ心地よきをおぼゆ。

舷頭に立ちてながむれば、中川の長流は紆餘曲折して上下の舟楫趣多きに、左右の堤防をへだてゝみわたさるゝ限綠野平遠として人家林叢その間に點綴し、大空を仰げば夏の強き光に日のあたりは紺青の色もすこしく褪めたるやうなるものから白雲の一むら二むらちぎれたるやうに地平線のほとり鮮かなるが、かゝるべき山もなくて、たゞ野の上に降り居らむとするが如きさまなる、嗚呼武藏野のながめやな、これが月の夜舟ならましかば、

乗合は人少なるに、野叟老媼のはゞかりなき高談もしばらくにして途絶え、人は皆午睡の夢靜なれば、窓に凭りてたづさへ來りし詩集など彼是よむ、かゝる程に船は大瀬、三九、谷、二丁目、彦倉などいへる所々に立ちよりてわが上るべき上彦名につきぬるは午後五時をすぎたる頃なりき。夏の永き日もやゝ西に傾きて、

茅屋の軒にかゝやく影いとあつかはしげなるに、蟬の聲いとかしましくぞきこえしか。

岸に上りて車を僦ひ直に半田なる萬勝寺へと心ざす、こゝよりは一里ばかりの途なり。見わたすかぎり稲葉浪よる廣野の中道をゆく、このわたりに名に負へる早稲をいだすところなれど、穂にいでたるが多し、しばしゆく程、かしこは既に半田なりと車夫のいふまゝ行く手をみやれば、今は暮靄やうやく薄墨のごとく棚引きて、遠村の樹立夕の色あはれふかく、炊烟帶の如くめぐりて點在せる家居、いみじき詩人の筆に上りたるがやうなり。この靜なる里が曾てわが幼遊の地かとおもへば、いとゞなつかしく、舊き記臆は逬るがごとく胸裡にわきいづるに、まことや彼の右の方にみゆる小高き森は萬勝寺の森なりとはやくもおもひうかべられたり。漸く近きて門前に下り立つ、とりめぐらせる生垣ならびたてる庚申三猿の石像すべてわれをむかふるがごとくなるに、傍をみれば墓地なり。石表累々としてならびたつ、いみじきれくれさきたつ例と見えて萬感忽ち胸をつくやうにればおぼえぬ。

寺に入りて寺僧をたづぬるに、今あらずとて留守居の爺嫗居たり。故由をつげて一泊をこふに、然らばこの寺の世話するものに談せられよといへば、老嫗の案内にて杉橋といへる家にいたる。老翁あり、年八十余の矍鑠たり、よく當時のことを知る、一家のものまた皆曾識のものなれば、よろこびて坐に延き、この夜は互に懐舊のものがたりに夜のふけゆくをもおぼえざりき。

浮世いかだ舟（第百五十五號續）

作者不詳

鷹の爪を引歓たる事

今はむかし、主君の御ひざうなさるゝ狗い侍りけるが、いかなるゆゑにや、にはかに死けり。主君はなはだれしみ給ひ、是はいかさま、わかたう共の中にて、馬錢といへるぞくをかうてころしたるらんとて、さまぐ\

せんさく有りけれ共、たれがわざといふ事をしらず。此上はとかくびんどうくじをとらせ、一人を切腹さすべしと仰出されたり。浮世坊申やう此事然べからず。もろこし。梁の帝、獵に出給ひしとき、白き雁有て田の中におりゐたり。みかどみづから弓に矢をつがひ、是を射んとし給ふに、道ゆく人有て是をしらず、雁を追たて侍り、みかど大にいかりて、その人をとらへてころさんとし給ふ處に、公孫龍といふ臣下いさめていはく、むかし衛の文公のとき、天下大に旱する事三年なり。是をうらなはせらるゝに、いはく、一人をころして天をまつらど雨ふるべしと。文公のいはく、雨をもとむるも民のため也。今是人をころしなど、不仁のおこなひ、いよ／＼天のいかりをうけん、此上はわれ死して天にまつらんとの給ふ。其心ざし天理にかなひ、たちまちに雨ふりて、五穀ゆたかに、民さかえたり。今君此白雁をおもんじて、人をころし給はゞこれまことに虎狼のたぐひにあらずやと申ければど、みかど大にかんじて、呉孫龍をたふとみ給ひけり。またいにしへ、太閤秀吉公たか狩に出給ひ、御秘藏の御たかを建巣丸とかいふ。秀吉公みづから御手にすゑられ、鶴におはせられたり。すけ鷹をはなちて、人々とびゆく跡を追てゆく、やうやう引おろしてちから草をとり、鶴を引ふせたる所へお歩のさぶらひ一人はしりよりて、御鷹をすゑなほして秀吉公へわたし奉る、ひでよし御手にすゑられ、かきなでゝ御らんじけれど、蹴爪を引かぎたり。秀吉大にいかり給ひ、是はいか成ものゝ引わけて、けづめをどかぎけるぞとて、御鷹師を御前にめされ、おのおのしるべし、たがしわざぞ、名をいへとて御こしの物に手をかけ給ふ時、御鷹師赤面しかうべを地につけ、すでにその人の名を申さんとしける色を、ひでよしてう御らんじて、小ごゑになりて、名をいふな／＼と仰られし。まことにありがたき御心ざし也。御ひざうなれどとて、たか一もとに侍一人をかへられん事、ひとへに是あるまじき事をおぼしめさるゝかた

じけなさ、いふばかりなし。されど、良將の士をおもんずる所かくのごとし。此ゆゑにや、布衣より天下をとり給ふほどの大功をとげ給ひき。今もつて狗ひとつををしみて、罪科もしれず、おさへて侍をころし給はん事、天命まことにおそろしき御くはだてなりと申けれど、主君大に感じ給ひて其の事止められしとなり。

伊達の墨塗

碧玉生

今は昔、寶曆の頃かとよ。都人某陸奥の國々に遊びて、伊達の郡、築館といふ處に、年を迎へけり。この地には、墨塗とて、始めて嫁を迎へ、聟を容れし家にて、正月の十四日といふに、知邊の人々音なひ來て、新夫婦の顏に、墨を塗るをもて祝ひとする風習あり。この事、年々例あれど、新夫婦は、塗られじと心して、其の日には、親しき緣のものにも、近よらずふるまひ、スハと云はゞ、逃げ去らんの身構へなか／＼に可笑しとなり。されど、寄手の人々も、これを興がりて、さまざまの計略に心を碎き、思ひよらざるところを引捉へて、墨塗らんとは、競ふとぞ、某の宿りし家にも、新夫婦ありけれど、其の心得怠りなく、明日は十四日なれど、墨塗る人の來もやせんかと、宵の程より、別座敷に籠る準備なんど爲し居たりしに、夜明けて、まだ目覺めざるに、宵のほどより、話しにとて來居たりし重郎治と呼べる六十路餘りの老人、何氣なき體にて、昨夜煙草入を失ひたれど、見てたべと云ひつゝ、其所此所と探り求るにぞ、花嫁御何の氣もつかず、共々に其所等みさぐりて近寄りけるを、得たりと、重郎治、隱し持ちたる、大筆取出でゝ、嫁御の顏に、墨を塗りけれど、これはと驚き逃げんとよる袂捉へて、猶、塗り重ねんとするに聟はこらへず、こはいかにと云ひつゝ、後より重郎治を引退けんとすれど、たゞ前にひつと、

ふりかへりて、又したゝかに、翁の顔にも祝ひけり。斯くと見てとりし、此の家の八十餘の老人、重郎治よい年をして、たしなみめされど、苦き顔しけるを、序なれど、お手前にもと云ふより早く、翁が顔にも一筆引きて目出たし〳〵と、祝ひ壽き、早足に立去りけり。某は、奥の一間に在りけるが、餘りの騒がしさに、立出でゝ見れど、興に乗りたる、此の家の男女共、客人にも、祝へやとて、筆ふりかざすに、思ひかけねど、もとの座敷に逃げ皈るを、すかさず、追かけて、したゝかに、塗りたりければ、愈々興は湧きて、家内一同、互ひに、追ひかけ、詰めかけて、鍋炭、する炭手當り任せに、塗りつけ、塗りかへし、數多の男女、打亂れて、各々顔も手も、黒塗となり、始めは、家内のみなりしに、後には、大勢となり、村中の家々、主も、家來も、老いたるも、若きも、尼も坊主も、集り來り、入亂れ、立亂れて、黒奴の踊りも、斯くやと笑ふもあれど、果は泣くもあり、酔ひたるも、酔はざるも、實にや、伊達の墨塗の可笑しさよと、某の都に歸りて、物語りぬるを、聞き傳へて、斯くなん。

碧玉生曰く、國々、各々、風俗の異なれるあるが、中にを、婚姻を壽く例ぞ、り異なりて、奇しきはあらじ。生、久しく、廣島に在りしが、同じ縣下なる、備後の北部にては、村に嫁娶の祝ひあれど、若者共、これが壽にとて、夜になれど、大きやかなる石、又は石地藏などを、新婚者の家の軒下に持ち行き、押しならべて、笑ひさゞめき歸る習慣あり。この習慣は、多くよからぬ方法に用ゐられ、新夫婦の常々若者共に、好く思はれざる者なる時は、祝ひを名として、大石を四海波靜かなる座敷の中に投じ、喧嘩の種と爲ることあり。この事、舊くよりはじまりて、明治の今日にも、猶行はれて時には罪人を出すこともあり。こは、餘りに、殺風景にて、可笑味なけれど、こゝに記しつる伊達の墨塗は、同じ祝婚の惡戯ながら、滑稽の趣なきにしもあらねど、掲げて讀者の一粲を博さんとはしつるな

り。奥州伊達の郡とは、今の福島縣岩代の國伊達郡ならん。されど、こは寶暦の頃奥州に遊びし人の、この戯れを觀て、云ひ傳へ、聞き傳へしものなれど、今も猶、この風習のありやなしやは知らず、若し、今もかゝる事のあらんには、願はくは、其の有様の知らまほしけれど、該地方の君達の通信を仰ぐになん。

執心

蓬生屋女史

いにしへは和歌はありたれど、連歌はなく、藤原の爲氏卿、此連歌を好まれて、いたくもてあそび給へるよりやう／＼盛んになれるが、應仁以後、世の中みだれ、京師はたび／＼兵火の災にかゝり、諸公卿も或は諸國へ寄食し、禁中參仕の人少なく、朝廷いたく衰微し、はては公卿朝夕の煙りも立てかぬるものから、色紙短册等を書寫して、御いちの上にかけ、行路の人に賣り與へ、やう／＼衣食せらるゝあさましき世のはては、いつしか、和歌の道もうち亂れ、連歌いたく盛りになり、はては、紹巴、法橋なんど申す連歌師さへ出で來て、いと名高く、都にもあづまにも此の道のみもてはやされ、京男も、あづまゐみじも、皆此の道をたしなまざるはなき中に、松永彈正、一日、人の許にて連歌せしに、ある人

すゝきにまぐる芦の一むら

とよみたりし句に、つけわづらひ、そゞろ沈思すれど、よき句つゞかず、折りしも、家より使來りて、何事かひそ／＼さゝやきぬ、やがて歸るべしとて、まづ使を歸し、なほ沈思數刻、又や使來りて、何事をか告ぐ、彈正、急ぎ行くべく答へてなほ沈思するに、又や使來り、急なるよし告げて歸り、ひき返しまた來る。彈正うるさげに今ゆくべし、うるさしと叱して、其場もたゝず案じ入り、遂に

古池の淺き方より野となりて

と云ふ句をつけ、火急の事出來ぬとて、急がはしく立ち歸らんとするに、何事にやと傍らの人尋ぬるに、宿



所へ野伏蜂起して、よせ來るより歸らせ給へとの使。急ぎまかりて追ひ散らし侍らんとて、はきものはきもあへず、走り出ると見れど、はや影も見えぬばかり、かやうのはげしき中にも、なほよまむと思ひし一心をはたしけるぞありがたき。

○

又登蓮法師と云ふ歌よみありけるが、あるとき、人の許に行きて物語りなしをりしが、ますほのすゝき、まそほのすゝきといふ事、渡邊の聖となん呼ぶ人よく傳へ知りたりと、人の語るを聞くや、登蓮、其の事の分ちきかばしとて、直ちに聖の許に行かんとす、折りふし雨いみじく降りて、さながら、衣のをつくばかりなれど、主人に簑笠を乞ひけるに、あまりに俄かなり、かく大雨の中を行き給はでも、やがては晴れなんに、雨やみて行き給へと云へど、無期の事を云はるゝものかな、つゆのひるまだにまたぬ人の命、晴れ間を待つべきかは、其間に、もしわれ死し、聖も歿しなば、誰かはきゝ傳ふべきとて、簑つくるもそ

こく〲、走り行きて問ひたりとなり、草木の事さへ昔の人はかく問ひあきらめぬるを、まして朝に道をきかで死なんも口惜しからずや。

一休のはなし（三）

草の屋主人

まけの衣、已れ中々に着たる口惜しさ、今一度不審せんものと、かねて思ひまうけたる御齋を供ふるにも、師の僧には精進潔齋、ひじきに油揚、がんもどきより外、海のものも、油こきものも供へず、一休にはわざと魚類の膳をすゑけり。如何にさがしき子なりとてかくては言葉も箸も出だし得ざらめ、してやりたりと心に忍びつゝ、何げなきさまにすゝむるを、あけくれ、いも、蒟蒻のみを食べをる一休、なまぐさきものゝつきたるめづらしさに、尾もかしらも殘さぬばかりに喰べ給ひぬ。亭主はつく〲とながめて、あな、人知れぬ衣召したる御僧のしたゝか魚をまゐられけるよとたはぶれけるを、一休聞くまゝに、口は鎌倉街道なれど、貴きも行き、賤しきもすぐるほどとて空うそぶくさまに、さらばかゝるものも通り候べきかとて、腰なる刀をすかりと拔きはなてど、諸刄すさまじうあらはれ、興もさめぬるばかりなるを、一休はなほ泰然うごきも遣らず、敵か身方かと問ひ給ふに、檀那取りあへず敵なりと云ふ。敵ならば此の關通す事はならず〲。いな身方なりと言葉あらたむれど、一休、にはかに、けへん〲としはぶきむせび給ひて、くせものが通るとて、俄かに關がすはりたるはと白刄の光り、秋水ばかりにも見ぬ能智に、師の房も檀那もたゞあきれにあきれ、此の小僧の口には如何なる名刀もかたれまじとより外は言の葉も絶ゑ、舌の根をふるひてやみたりとぞ。

和尚十と云ひて、僅かに小指一つを屈むる春のことなりき、師の房何處へか行き給ひたる留守の處へ、他所より餅一つ持ち來りたるを、一休すみの方を少しかぎとり、師の僧の歸りき給へる折り、取り出し、そこそ

こよりこを持ち來りたりとて見せけるに、師の房もれもしろき人、小僧はしをかき取りしなどれもふかゝ、叱言もせで、満月無片破闕は何處にかあると、たはぶれの給ひぬ。とは満月は丸くみちて、かげたる所なし、此の餅も満月の如くまんまるにてあるべきに、かげたるは如何にぞやと問ひ給ひしより、一休まだ年は滿たざれど、才智は夙にあまれり、こを聞くより、早くも其意を悟とり、雲隱有レ是とて直ちにかきたる餅とり出でたるに、師の房うち笑ひ、さても〳〵さがしき小僧哉とて、其餅みなたび給ひて、笑ひをみたしけりとなり。

笠子笑談集

金津常十郎

寶の山

南無大黒殿、われらに福をあたへ給へと朝夕怠らずいのりけるが、ある夜のこと、大黒殿告給ふは、汝年來我を信ずる事の厚きがゆゑ、此度寶の山を敎ふるなりとて、念比に其道ををしへ給ひて祠の内へ入給ふと思ひて夢さめたり。扨々ありがたき御告かなとて、其明る朝、敎の通り寶の山へのぼりて見れど、金銀財寶みちけるゆゑ、大きによろこびて、丁度わが力にあふほど寶を荷ふて歸りけるが、それより大福人となりけり。これ皆年比信心する大黒殿の御利生なりとてよろこびしが、次第に身も安樂になるにしたがひて、そろ〳〵奢が出來て、家も大きくたて直し、それから段々れでりが長じて、いろ〳〵物好に日をくらしけるが、奢は貧の礎とやら云ごとく、とかく商賣かたに損のみ多くて、果はどうやら昔の身に戻りかゝりけるゆゑ、ちとあたまをかたむけしが、よし〳〵いつぞや習て置きた寶の山へ行きて、今度はどつしり取出すが上分別じやとて、それからのそ〳〵寶の山へのぼりて、寶をいくらといふ事もなく荷に拵へ、扨くり出しにするつもりで、まづ一荷をになひやらやつと麓まで荷ひ出し、又戻

りては前のやうに麓までかつぎ出しけるが、多くの荷をわづか麓まで荷ひ出す間に、月日がたちて、頭も白雪とふりかはり、寶の山にて手を空しくして死したり。

註に曰、人皆身相應の分際ありて、其分限に從て奢をやめ、身分相應にして世をわたれば、其身相應に、今日が樂みにくらせるなり。侍は侍、町人は町人、各其職分あれば其職々を大事に勤めて、私事さへなければ、實に其職々が吾身相應の寶にて、常に安樂世界なり。それに、吾分限にもあはぬ奢をしたり、由なき望を起したりすると、段々重荷になるゆゑ、自業自得で吾職分の寶の荷を捨て、欠落したり果は乞食に成たりして、とうとう生命の日がくれて、子孫まで放下してしまふなり。諺に、慾張る鷹は爪を剝ぐと云ごとく、愼むべきは私慾なり。古語に曰、貪心害己。

梅の下風（九）

白魚女史

山烏の鳴く音をまちがてに立たんとするあれば、やうやうつあけの鐘に、はや朝餉を告ぐるあり、往くも歸るも大方急ぐ旅宿の朝、己が顔はたゞぬぐふのみ、はや手洗水よ、白湯よ、行燈下ぐる、臥床上ぐる、座敷をはく、椽をふく、茶を出す、膳をひく、客を送る等、目もまはらむばかり忙がはしき朝のつとめも、一まづはつと息をつく〳〵亂れし髮かきあげあげ、手にする小櫛うち守りて、涙にかきくるゝは、野尻宿なる旅宿屋の下女お專なり。形見こそいまは仇なれ、櫛ばかりとゞまる形見ならば忘るゝ暇もあるべければ、我身がやがて父の形見、母の形見、我が身世にありては、所詮消えせぬなみだ、みなぎりかへりて、夕しほのそゞろ滿ちみつるをわれからされさへて、まばゝなる袂のふと重さに、はたと心づき取り出すふみ、はや見しもの

か封も切りあるを、怪しげに眉をひそめ、よみつゝゆきていとおどろきしげに、やがては頬に、時ならぬ夕日を染めつ、又操返し見つ、そゞろ心もみだれしさま、見付くるもさとき女の眼、おやお専さん、大層しみじみおよみでおたのしみ様、おうらやましうぞ、はや、口さかなくたはれ言して、近う來かゝるに、お専は思はずおどろき、そのまゝふみをも卷きをさむるに、已が身のためしに引きてや、人は誠にをかしく見て、おや、お専さん、さやうにおかくしなさらでもお互に若きうち、二度はなきこと、我しも今、彼の人よりふみをおこせしのと耻かしげもなく、我れより取り出で見せんとするに、おやあなたこそはおたのしみさま、お浦山吹日影のもみぢ。人の云ひける戲れごとを、いつかは習ひて、そのまゝ返し、ふみは袂にをさむるを、おや、罪ふかき人、人にのみ言はせて、かくさでもよきにはあらずや、お名は何よ、お名だけ拜見よなど、袂のふみ取らむとするに、お専は驚ろき、さやうなる目出たき文にはあらず、之は少し、すこし、お目にかくるものならじと、袂を抑ゆるに、あらよきにはあらずやと、なほ強ひておしとらむとするを、此方も強ひておさへぬる、面にはみだれ心移りてくるしげなるに、あら罪深き人よ、それなら、ひとりお樂しみなされ、大きにお邪魔を致しました、眞平御免下されと、怒り半分去り行くを、お専は中々引きも止めず、あなたこそお樂しみなされと強ひてたはれ言云ひつゝ、あとはまたふみをも取り出さず、つく〳〵と胸に手を當て思案、さてあるべからずとて、起つて晝の仕度整のへ、晝食求むる客人たちにすゝめて、下げつ、いそしきこそ中中にうき事を忘るらめ、人よりはげに甲斐〳〵しげなり、已れも殘醬すゝるまも、兎角思ひの霧のかゝりげなるを、朋輩どものかしがましく、おやよき事を聞きぬ、わろき事は聞かぬ、お専さんが。おや、せんさんか。そう、よき人のあるつて、かくすはやぼね、かくす程をかしいはなどゝ、何のふみやら知らぬふみ、見

たは、見せぬはど、さやぐはした女の習ひもうるさく、よき人のよしと云ひける吉野山、深くぞ尋ね見られよとせかりお專は强ひても爭はず、たゞ巳れのみそゞろに心みだるゝ折りふし、お專殿、御身に逢ひたしとの人のありと告ぐるに、一同お樂しみと聲そろふるに、お專はわれならず顏紅にそめなせしも、よそのもみぢのたゞうつりてなるべし。來りけるは誰ぞ、之ぞ、高田村の傳吉にて、お專を見るより暫時言葉もさしぐむさまなりけるが、やがて先夜の禮をのべ、さて一昨日我が荷の形としおくられし御身が二つなき寶、たゞ大事に、佛檀に供へけるに、何處へ紛れ入りけむ、影も見えず、げに母御が忘れ形見、重々すまぬ事なれど何もやさしきこゝろにたゞ許されて、夜べ預けたる荷物與へ給ひてよ、御身が信實の心を見しほどに、あつかましくも櫛をなくして來りつるもたゞ亡き父母が草葉のかげの心を慰さめまほしき心のみ、孝行深き御身が心にくくませ給ひて、ゆるしも渡しもさせ給へとひたすら謝び入るに、お專は、つく〴〵と傳吉をうち守り、さても〳〵とらの口をのがれて、狼につけられ給ふとは君がこと、よく〳〵ねらふ人のおはしけるよ、御身がひたすらわび給ふ櫛は、はや妾が手許に戻りて、求め給ふ品のなきこそ口惜しき事してけるよ、されど妾も知らぬ事、今朝とく御身が隣家なる彌太八とか申す人の櫛持ち來りて、お預かりの品を渡してよとありければ、何の心もつかずお渡し申しぬ。げに誰にてもと申さで、御身ならずば渡さず定め置かばよかりけるものをとの言を、傳吉つく〴〵聞きて驚ろき、彌太八とは、かねて聞きし事も見し事もあらず、そも如何なる人にやと問ふに、白色く、鼻筋通りて、年もまだ廿歳上を五つとは越えぬお人、姿も賤しからずとこま〴〵聞けど、何分似たりとおもふ人もなく、譬へありしとて雲を握むがごときに、傳吉はがつかり、腰をするゑたるまゝ、また思案もなきやうなりしが、是非なし〳〵、もら〳〵我にさづからぬ金圓あきらめむより詮方もな



しとて、奮然身を起しながら、云はれがちに挨拶しつゝ歸らんとするに、お專も氣の毒さに堪へず、誠に妾も御身が災ひを救はむとして、思ひがけず此の禍を見ける事の口惜しさ、のう傳吉殿よく〳〵家内に心をつけ給へ、子は七人設くとも女に心をゆるすなと申す諺もはべり、かく申さば御女房さんをあしう申すやうなれど、壁に耳ある世の習ひ、家に歸らせ給はゞ、まづ誰にも語らで、かく〳〵し給へと、あとは耳に口よせさゝやけど、傳吉もなほはれぬげなりしが、まづ兎に角に示言にまかし、御身を煩はし申さん、何も天なり、命なり、金子の歸るも歸らぬも天道さまにおまかし申さんとてなほ云ほ〳〵立ち歸りけるあとやう、空やう、お專は云ひしながめ亘したり。

やがて家へと歸りぬるに、伯母、女房、左右にすがりて、金子の事、行李の事尋ねまとふに、されどとよ、折り惡しくお專どの他出して、用事も果さゞりしかど、兎に角、百五十兩の大金をあつめ歸りたることなれど、祝の酒宴開きなん、とく用意あらまほしとあるに、伯母も、女房も同意して俄かに、いもよなますよとさわぎ立つれど、傳吉もみづから走りて、庄屋をはじめ、世話役、組頭等へ至り、うま酒すゝめむと村中殘らずを催せど、田舍ものゝ皆よろこび、名主をはじめ、顏役どもゝ來り、さては、太郎作、次郎作誘ひあひ、伴れ立ちてやがては座敷一ぱいつらなり、皆うま酒に口をならして、傳吉が辛坊のほどを賞めつ、そやしつ、又は江戸の樣子とひつうらやみつ、さては、調子はづれのだみ聲はりあげて、東のはてと唱ふもあれど、權兵衞が種子まきおどるもあり、壁も拔け、根本も落ちんさわぎ、なほさりては興や足らず、傳吉どのは久しく江戸に居られたれど、また格別の手振もあらむ、いざれ歌ひなされよ、お踊りなされよと、ひとりすゝむれど、猫も杓子もと尾につくうるさく、今歌ひぬ、いま踊りぬ、あゝうんやら、あまりに大行李背負ひて、腰ものびじ、まづ〳〵御年貢をさめおきてからなど、たはぶ

れ〳〵立つて廁に行くさましてそつと伺ふ庭口には、はやくもれ專が頭巾まぶかに忍ぶ姿、傳吉を見るより近うあゆみ入りて、言葉はなく、そつとつま戸の端より家の内を伺ひたり。



秋山路　　東久世通禧

むら鳥のこゑもさびしき山かげの
紅葉みにくるひともありけり

庭秋草　　鍋島直大

七草のはなさくにはに出でみれは
かぜひやゝかになりにける哉

萩露　　高崎正風

いつのまに花になりけんま萩はら
露むかりこそれくとみえしか

秋水　　津輕承昭

落鮎のかげもあらはに見ゆるまで
すみこそわたれ秋のやまかは

海邊秋風　　池田政禮

吹はらふ海路のかぜにきりはれて
さやかにみゆる沖のとふやま

山家月　　前田利鬯

柴の戸をたゝくあらしは聞すてゝ
れとせぬ月にあけて出にけり

秋山路　　風早公紀

ゆくまゝに紅葉もきくも盛りにて
あかれぬものは秋のやまみち

夜虫　　宮地嚴夫

秋かぜもふけ去づまりてなく虫の
こゑのみ高きよもぎふのには

秋田庵　　阪正臣

庵してしづやもるらんあきの田の

引板ひく音の夜たゝきこゆる

滿野虫聲　小出粲

くさかげの野守が庵やいかならむ
さとまでひゞくむしの聲かな

山家秋來　遠山英一

くみにくる人かげ絶えて山の井の
そこすむ秋になりにけるかな

月前雲　内藤存守

うす雲をすきとほりたる月かげは
晴たるよりもおもしろきかな

秋祝　鎌田正夫

うちなびく靑人ぐさのよろこびも
稻むのいろにみゆるあきかな

文字　師岡正胤

まちかたをしらぬ國人とりのあと
蟹のゆく見てつくりいでけむ

稻葉管長の五十日祭に　大畑弘國

ちよませといのりしかひも夏川の
ふかきなげきにしづむこゝろ哉

小長謌　五七、五七、七七語調

たなばたをよめる　藤井行麿

たなばたに、まつる素麵、うちはへて、いく代にかなる、としをかさねて、秋を重ねて

立秋をよめる旋頭歌　仝

堪へかねし、暑もいつか、蟬の羽の、うすらぐなへに、肌すゞしも、秋立しより、風ふく時は、

月の歌よみける中に　三輪義方

朝顏のしぼみぬるよりけふもまた
まちくらしたる月いでにけり

轉が毋　佐々豐水

山水のきよきこゝろのかゞみには
世のまがごともうつらざり鳧

夜擣衣　足立正枝

ともしびは風にまかせて秋の夜の
更けゆく月にころもうつなり

鶏頭草　楢崎庸輔

秋の夜は色こそわきてさやかなれ
つゆにかたぶくつきぐさの花

秋眺望　鍋島榮子

いろづきし梢ばかりはあらはれて
夕ぎりくらしうぢのやまもと

秋草さきみだれたり　前田朗子

花むしろしくと見るまで百くさの
さきみだれたる秋の野べかな

旅宿鹿　柳原愛子

男鹿なくかたやま里にたびねして
あきのあはれを思ひしりぬる

月前霧　税所敦子

木の間より月はさしながら山松の
かげこそみえね霧やたつらむ

暮ゆく空に月いでたり　松平健子

花すゝきひとりまねくと思ひしに
くるゝまがきに月は出にけり

山路霧　下田歌子

朝ぎりのふかしとしらではこね山
あまころもきて行べかりしを

田上雁　日野西廣子

遠かたはきりにこもりて暮わたる
たのもさやかに落るかりかね

滿野虫聲　遠山いね子

ゆくまゝに野道のさまは變れども
みゝをはなれぬ虫のこゑかな

遠山鹿　佐藤艶子

遠やまのしかの音たかく聞ゆなり
ふけしづまりし夜半の枕に

尋紅葉　坂田泰子

道もなき落葉がうへをふみわけて

やまめぐりしつ紅葉みんとて

庭上月　鶴久子

我庭はとなりの木だちたかけれど
いでゝも月のかげぞまたるゝ

曉紅葉　河村重子

霜ふかきあかつきおきの袖の上に
まだゆきぞかゝり匂ふもみぢば

稻妻　土岐幾子

しらつゆのおくて色付く千町田を
てらすもうれしいなづまの影

墨　安東菊子

ちることをしらぬ墨繪の本見れど
千年をまつのけぶりなりけり

箱根の出湯にまからんとする途中に不二を見て　内田遊歌子

白たへの雪のころもをぬぎすてゝ
空のいろにも見ゆる不二のね

野露　足立三尾子

こばさじと思へど分けん方もなし
おきあまりたる野邊のしら露

稻毛紀行　遠山英一

すこし時候はおくれたれど、かねてきゝける稻毛の海水浴にものせんとて、九月一日朝六時半にいへをいづ、くるまをはしらせてゆくまゝに、七時半頃本所の停車場にはつきぬ。發車は八時なりといふ、切符をかひてしばしやすらふほどに、時もきぬれどのる、やがてくるまはゆるぎいでぬ、今日は二百十日なりといふにいとのどかなり。このわたり早稻は既にいろつき、晩稻もおほかたはほにいでたり、ほのかにをかめくところのみゆるは國府台ならんとおもふまに汽車はいち川にかゝりぬ。このほどの雨ゆゑにやすこしにごれり、わたりはつれば市川停車場なり。おのれさきつ年、この國府臺までは紅葉のころ來しことあれど、これよりさき

はこのたびがはじめてなれど、いかなるところならんとれもふもいとゆかし。打わたすいなばの上よりほかげのあまたみゆるは市川の下流なりといふ。

市川のながれはみえずなりぬれど
　かはすぢしるしつゞくほかげに

いちかはにうかぶほかげを打わたす
　いなばの波のうへにみるかな

など口吟つゝゆくほどにくるまはとまりぬ、いづこならんとみれど中山の停車場なり。こんにやくはこの里の名産なりといふ。梨園のおほくみゆるけしき大森川崎などのこゝちせり。次の停車場は船橋なり。こゝは千葉街道にては名ある驛なりといふ。されど、くるまは町のうしろのかたをかよへどよくもみえず、もはやうみに近づきしならん、ほかげなどほのかにみゆ。

ふなばしの里の並木のこのまより
　おきのほかげもみえわたるかな

津田沼をすぎて幕張の停車場につきたるは、八時五十分なり。こゝにて汽車をおり、前の茶店にいこひてみちなど問ふ、稲毛村までは一里なりといふ、人力車をやとひていでたつ、空もはれわたりていとあつし。

秋の日をさゝふるかけだになかりけり
　名はまくはりと聞てきつれど

などくるまの上ながらつぶやきつゝゆくまゝに検見川町にいづ、こゝよりは海岸にて、しほかせいとすゞしう、みこしに上總安房の山々みえてけしきいはんかたなし。ゆくての松原のなかにおほきなる建物のみゆ、車夫にとへど、これ海氣館なりといふにまづうれし、おとより四五輛の車もきたりてきそひつゝゆくに早くも海氣館にはつきぬ。女ども出來りて、おのれを階下の五號室に案内す、いへはあたらしくしていときよらかなり、二階は特等室とて、櫻、梅、紅葉、松などの各間あり。階下は東西に廊下通りて左右みな客室なりにはにわきいづるしみづいとすゞしげなり。池あり木立あり、うしろのかたはすべて松林にて、あまのこど

ものれちむかくなど見ゆ。

あまの子がれちむかくなる磯山の
汐風にふかれてひきゝいそまつも
　まつはいたくもやせてけるかな
　　ねのみはたかくあらはれにけり

あやにく今はひきしほにてうみにいることもならねど、わかしたる内湯をあひてあがりぬ。をりしも沖のかたにあやしきくものかゝりて、何となく空のけしきものむづかし、みるまに暴風れこりてあはといふまに座敷のものなどにはに吹とばせり。まどにあたるれといとはげし、雨戸もみなさしこめて、さながらよるのごとし。いかになりゆくならんといとれそろし、れそる〳〵硝子窓より外をみれど、今までみねしはかげもわかず、海はましろに浪立あれてものすごし、

にはかにも沖はましろになりにけり
　みねし帆影はいづこなるらん

けさみち〳〵みて來しいねもいかならんなど思ふまに、西南のかたすこしあかるくなるやとみるまに風はしづまりぬ。みな〳〵いきかへりたる心地して二百十日もこれにてすめむなどよろこびあへるもことわりなり。千葉の友人のもとにれくらんとて書簡をしたゝめたれど、こゝにはいまだ郵便をとりあつかふところもなしといふ、ひらけぬ處なるべし、ひるげくひて海岸をひだりに一丁程ゆけむ、稻毛館建築場などいふ標柱あり、ところ〳〵にみゆるはあまがやのみにて、ものうるいへなどはさらになし、ゆく〳〵みるまゝを、

いそ山の松にもくづぞかゝりける
　こゝまでいつかなみのよせけん

小出翁か先年こゝにあそびてよまれたるうたなどれもひいでゝなつかし、今はねぶの花はちりはてたれど木はところ〳〵にあり、松林のうちに弓場ありて、ゆみいる外國人あり。立とまりてみるに、雞卵のからをまとにしている、いと上手なり。海氣館のうしろをすこし右へさしてゆけむ小高きところに淺間のやしろあ

り。けふはまつりにや、里のわかものどもうちよりて酒などのめり、石階を下りてやどにかへる。人の碁などうつをしばしみるまに潮はみちたり。

しばし我みぬまにしほやみちぬらん
　磯のひかたはなくなりにけり

つかれたれどゆふげをすましてとくねぬ。二日朝よくはれたれど風立てなみあらし、不二のねのうみこしにみゆるけしき、葉山のうみによくにたり。九時ごろうみもまたくなぎぬれどきもののぬぎすてゝおりたつ、既にひきしほにてうみいとあさし。

ゆけど〳〵よぐ方こそなかりけれ
　いそのとはあさ水あさくして

見かへれどいそははるかになりにけり
　遠くきつらん磯のとはあさ

かへりて内湯にいる、客はおほかた東京の人にて、けふはかへらんなどいふをきくに、おのれもそのこゝろになりて午後四時三十分の滊車にてかへる。



雜報

●墺國皇后弑せらる　墺地利匈牙利國皇后エリサベス陛下は、本月十日、瑞西國ゼネヴア市にて、ルックエニといふ伊太利無政府黨員の爲に刺殺され給へり。因に記す、エリサベス陛下はバーバリヤ國マキミリヤン公爵の女にして、千八百三十七年十二月二十四日降誕、千八百五十四年四月二十四日立后あらせられ、本年は六十一歳にならせ給ふ由。

●孝子　北海道石狩國空知郡岩見村に川邉いとといひて、いと感ずべき孝子あり。年は漸く二十なるが、家素より貧しうして、母は早く世を失せ、さる廿七年の頃よりは父も病の床にうちふせしかば、殆ど糊口のみちも絶えはてけるに、いと女かなしきながらも雄心ふ

りたこし、骨身を砕きて一心に働き、僅に活路を得て父に不自由をせしめず、日夜看護に手厚きは洵に奇特なりとて其筋より金十圓を賜ひて之を賞揚せらる。年まだはたちといへど、たゞ紅粉盛裝してざれあるくが今の世のおほかたの女子のならひなるにひきかへて、こはまたいと感ずべき孝子なり。

●又　阿波の國に山口清三郎といふ人あり、年七十にして男女五子をもてるが、巳の財産を五分して之に與へ、各一家をなさしめけるに、五子みな相助け相勵まし、あらそふて父に孝養を盡せり、近隣のものども羨やまざるはなしと。是洵に孝悌の鑑なり。

●孝貞　羽前國西置賜郡豐田村銀木兵右衛門の妻なみは、三十四年の間克く孝貞の道を盡して嘗て怠らず。手足の自由を失ひたる姑の久しく老病に伏せるを看護することまめ〳〵しく、一家睦ましくして子女の孝順なる亦皆なみ女が德行の致す所なりとて縣廳より木杯一組を下賜せらる。

●貞婦　全國東田川郡新堀村の古畑まさ女も亦貞節の廉をもて知事より金六圓を下賜せられたり。

●又　越中國西礪波郡廣瀨館村大字祖谷村平民、高原理右衛門妻吉尾とよ女は、夙に孝貞を以て鄕閭に聞え、遠近傳へて龜鑑とせしが、今回知事より左の如く賞せられたり。

資性温良　姑に孝夫に貞克く一家親睦せり　姑嘗て眼を患ひ藥餌療養怠らずと雖も遂に其明を失するに至りトヨの悲嘆啻ならず益々孝養を勵み完省承歡、嗜好する所のものは之を供し又寺院に賽するには之を負て往復する等毫も不自由を感せしめず傍ら家業を勵み夫を助け子女を愛育し克く勞苦に堪へ孝養怠らざること二十有餘年一日の如く閭里其孝貞を稱す洵に奇特とす玆に爲其賞金五圓を下賜す。

●孝子龜松の建碑　信州南佐久郡の有志者發起し其昔同地に著名の孝子龜松の碑を建設せんとし汎く江湖同感者に向ひて賛助を求めたり其趣意は左の如し。

孝勇龜松墓表建設主意書

山河秀絕の地偉人を生すと眞なる哉我信濃國荒船山の麓内山鄕は山水奇岩に富み夙に偉觀を以て聞ゆ今を距ること一百十年の昔し天明八年戊申の秋孝子長岡龜松なるものあり年甫めて十一の幼童にして能く父の危難に窮り猛狼を一擊に斃して孝勇の名を顯せり事上聞に達し銀帛を賜ふて褒賞せらる嗚呼孝は人生百行の基本也天此奇孝子を名區に降して後進を激勵せるものならん歟然り而して其事歷は史籍に載せられて永く邦家の龜鑑たり斯の如きの偉蹟は彼の秀麗なる山川と共に永遠不朽後世に傳ふるは地方人士の義務なるべし今や南北佐久郡の同志協刀して一大墓表を建設し以て孝勇の標準を示さんとす此發擧にして成功の上は教育界に直接の補益を與へ深山幽谷の間に於て自然に名敎を維持するの効力を存する事果して大なるべきを信す因て江湖同感者の贊助を得んが爲め茲に要旨を畧述して以て天下に謹告す

（墓表の五大文字は海舟勝伯の筆蹟也）

紀元二千五百五十八年明治三十一戊戌歲七月

首　唱　者　一　同

長野縣信濃國南北佐久郡

南佐久郡内山町百三十七番地

孝勇龜松墓表建設事務所

●大石良雄の室陸子の墳墓　は、但馬國豐岡にあるなるが、未だ世に廣く知られざるを遺憾とし、全鄕の人より左の寄稿あり。

豐岡町より墓地に洞一つ渡れば、山を負ひ水に臨み風光明媚なる所、禪院あり、院後より礎を拾ふ數十級、蒼蘚深く封じ落葉地に滿つる處、卵塔亂立の間、高さ二尺ばかりの苔塔一基あり、碑面題して「石東陸孺人墓」と云ふ、其左側に「香林院華屋壽榮大姉」と鐫す、是乃ち亡國遺臣の龜鑑として三尺の乖髮子も其名を知らざるなき大石良雄の室陸子の碑なり、陸子は豐岡藩士石東源五兵衛の長女、良雄流涙の際、鄕里に預けられ一藩義士の菩提を弔ひ、七十有七にして元文元年十一月十九日沒す、山下の禪院は父源五兵衛の開創せる所、碑は豐岡裁判所判事濱口某遺蹟の堙滅に屬するを悲み明治廿二年頃建立せるものなり城崎溫泉に遊ぶの雅客は幸に詣りて義士が半面の芳魂を弔せよ。（九月七日紫安淸融）

●賢女　朝日新聞にむだ六といふ人あり。やたら帖となづけて古事をしるせるが、なかに讀むべきこと多し。左に出だせるは即其一段なり。

文政頃の幕府の天文方高橋作左衛門といへるは元は大坂の同心なりしが天學に長ぜしかば江戶へ召出だされしなり未だ大坂に在りし時庭に大いなる柹の樹あり秋ごろにその實を賣りて若干のこかねを得るなり然るにその邊の若者ども夜にまぎれて盜むこと數知れず依りて作左はその守りに夜もすがら寢で庭中を見廻りぬ或時番より歸りて見れざさむかりの大木を根ぎはより伐倒してありこは如何なる事ぞと作左大いに呆れしにその妻のいふやう妾が命じて伐せしなりと何故にさはさせしぞと咎めしにされば候ぬしは天學にて必ず家を起させたまふべき萌し見ゆはべ

り然るに夜ごとに屋根に上りて天象をうかゞひ深更にはまた柿の爲に精神を費やし給ふはびんなき事なり此木あらずとも本業專一にてよかるべしと思ひ侍るによりて斯くは計ひらしなりと言ひしとぞ。

●米國にての津田梅子の演說　さきに學事視察の任を帶びて米國に行きし津田梅子は、頃日全國婦人聯合俱樂部に出席して演說をなしたるよしなるが、其大要は左の如しといふ。

現今我國に於ける一般の感情は婦女の爲に改良を加へんことを欲するの傾向となれり慈仁なる我　皇后陛下は日本に於ける婦女の品位を高め且女子教育を發達せしめんが爲に事々物々極めて熱心に精勵し給へり予輩の玆に出席したる事實は以て婦女に對する一般の感情を表示せるものといふべし何となれば予輩の玆に來りたるは單に或る要路者の認可と同情とを得たるのみならず予輩の關係を有する諸學校の信實なる同情を得たればなり日本は從來種々の事物に於て米國の同情を得其信實なる友誼に浴したりしが今又我婦女の爲に有益なる事物を學ばんことを切望す予輩が此驚嘆すべき此美麗なる米國に於て見聞したるものは悉く之を記憶して我國に携帶すべし予輩は予輩に對する諸君の信實を以て單に個人の關係となさず泰西の婦女より東洋の婦女に對する教訓として之を受領せんことを欲す云云、

之を聽ける米國人曰く、布哇が移民を拒絕したる日本に斯る高尚の婦人あるかと。彼等未だ我が國人の眞相を知らず。

●日本婦人の束髮　このごろ、能く見受くる所なり。或人いへり、西洋婦人は束髮なれども帽子を冠る、是帽子は禮容を現はすを以てなり。しかるに日本婦人の束髮は帽子なし。是大無禮なりと。男子の洋服して下駄穿ちたるたると何れ。吾人はあまり美しき風として之を見るあたはず。

●高等女學校の教科書　現今高等女學校にて用ゆる教科書に、特に女子の爲に編纂したるものなく、目下撿定を出願せるものゝ中にも、僅に習字國語等の書あるのみなれど、今日にては已むを得ず中學校用のものを流用し居る次第にて、往々不都合なる所あり、他日高等女學校の數增加するに至らば、此儘にては益々不都合なるべきに就き、文部省にても怠りなく女子の爲にする教科書の編纂に勉むべけれど、民間にては大にこゝに注目し、女子の教科書の編纂に勉められたきものなりと當局者は語りたりと。

●醫科大學産科往診をはじむ　市民にとりてこよなき便利なり。こゝに廣告の全文を示す。

産科往診

東京市内に居住の姙婦にして出産時本院に來り診察を受け難き場合に於て往診を請ふときは産科專門の醫員を派して診療せしむ但診察料及凡て其他の費用を要せす

臨月の姙婦にして入院を請ふものは醫員に於て診察の上私費若くは施療入院を許す

東京帝國大學醫科大學第一醫院

●蜜蜂の飼養　は、農家の婦女子の職業として最も適當せるよしにて、我が國にては、古より紀伊、薩摩、福岡及び信濃等の山間に飼養せられたれども、未だ深く人の注意を惹くに至らず。然るに、英米諸州には最も盛に行はれ、亞米利加の如きは之に關する專門の雜誌數種あり、英國にも亦鞏固なる蜜蜂協會と其機關雜誌とありて、其協會員の一人なる某氏は本春來朝し、大日本農會に就て蜜蜂上の利害を詳述し、四季花あり氣候好適なる日本國の如きに於て本業の盛ならざるは實に遺憾の事なりとて一場の演說をなしたる事あり。米國人中にも日本養蜂業に就て研究せんとするものあり、現に同國ペンシルバニア洲養蜂雜誌記者ヒル氏は此頃早稻田農園に向け日本種蜜蜂の事に關し種々なる事を照會し、且日本現在の飼養法も其誌中に記したけれど、養蜂關係の諸國寫眞等を送られたき旨申來れり、されど同園にては目下夫々取調中のよしなるか、若し本邦養蜂家にして其自家養蜂場の寫眞等を贈らるゝ者あらば、同園は之をヒル氏に輸送の勞を執るべしと云ふ。

●伯林の訓盲敎師萬國會議　東京盲啞學校長小西信八氏は豫て盲啞敎育幷に白痴、孤兒、貧兒の敎育法研究の爲め去る二十九年末より米英獨佛等巡歷中去る七月廿五日より獨乙伯林附近なるステーグリッツに於て凡一週間開會の訓盲敎師萬國會議に參列を命ぜられしが此頃氏の留守宅へ七月三十一日付伯林發にて獨乙皇帝の肖像の入りたる美しき民間はがきの面に左の通信

ありたり
此度訓盲會にはスペインを除きて各國より參り亞細亞よりは日本のみ、此會へ獨逸帝室より六千マーク(三千圓)下され夫にて會費を拂ひ印刷もする由二十七日夕ステイグリッツ町の招待會盛んにして二十八日には伯林町の船遊び饗應あり各國の旗を以て飾り日の丸の下に我々岡田君とを置き伯林市長チエル君と文部省學務局副長とスティグリッツ訓盲院長と共に飲食を爲し市長より花の一束を我に與へたり後に獨逸帝と日本天皇との萬歲を祈りたり
猶同氏は右會議を濟ませ八月十一日出帆の神奈川丸にて歸途に就く旨報知ありし由なれば遠からず歸國すべきなり。

●各國民の富力　各國一人宛の富力を比較するときは實に左の如しといふ。一人の富力は即ち一國の富力なり。而して富は猶勢力たることを知らば、日本が歐米各國の間に介立して如何なる地歩を占むるやも亦推測し得て歎息に堪へず。如何にもして早く國家の富強を謀りたきものなり。女子なりとて豈遊手徒食するを得べけんや。

◎國民一人宛富力比較表

英吉利	二、四七〇円	墺太利	九九〇円
佛蘭西	二、二四〇	伊太利	一、〇〇〇
獨逸	一、四〇〇	合衆國	二、一〇〇
露西亞	五五〇	(日本)	九一

◎女鑑歌文月並兼題

十月五日　歌……雲間雁　文……晩秋田家を訪ふ　九月廿五日〆切
十月廿日　歌……落葉浮水　文……亡友を思ふ　十月十日〆切
十一月五日　歌……深夜鹿　文……長壽を祝ふ　十月廿五日〆切
十一月廿日　歌……枯野　文……書翰文の効用　十一月十日〆切
十二月五日　歌……松の雪　文……居宅新築を祝ふ　十一月廿五日〆切
十二月廿日　歌……風船　文……捨子　十二月五日〆切

教の庭



九月廿日兼題　茸狩

天　横濱市眞砂町二丁目　畠山香代子

多からぬ木の子なれども嬉しさと
　かをりは籠にもあまりぬる哉

地　福島市稲荷町九十三番地　香川知惠子

樂しさを茸もろともにこにもりて
　待ちます母のいへつとにせん

人　山形市新築　岡田陽子

あさりつゝわが見いでつる松茸を
　ねたくも友にとられぬるかな

秀逸（二十首）

落ちかゝる日かげわすれて小松原　肥後佐々　小峯子
　たけかりくらす今日の樂しさ

いは山のおち葉を分けてとる茸は　長野安孫子かつ子
　たまにもまして嬉しかりけり

こゝかしこ落葉かきわけ思ふどち　山形　金森俊子
　茸かりくらす今日のたのしさ

垂乳根のわをまつらんと茸とりて　石川　藤村幾子
　かへる山ぢぞたのしかりける

わけいりし山松か根にうれしくも　肥後　仁保しま子
　あまたの木の子見出でつる哉

おのれまづこを満さんと思ふどち　大阪　杉野ならめ子
　きそひてあさるきのこかり哉

我袖にあまるはかりも得つるかな　東京　千石素子
　おち葉か下のしめぢさゝたけ

くれぬまにいざや籠にいそぎなん　韓國　川上喜代子
　探しきのこはこにみたねども

落積もる木の葉を分てたのがしゝ　横濱　綿野りき子
　れはきをきそふ秋のたけかり

たづねわび松の根もとに打よれむ　奈良　西村ひろ子
　うれしくかをる茸のひともと

うなゐらに引きつれられて老の身も　三河　石川らく子
　きのこがりして山をめぐりつ

心あてにとるも嬉しや秋山の　熊本　戸塚てつ子
　くちきの下にたふるまつたけ

ときはなる松の木の根に採る茸は　横濱　笹子　茂子
　いろもかをりもゆかしかり鬼

里の子もまだ踏み入らぬ山なれや　東京　目黒佐喜子

採る手ひまなきけふのたけ狩

思ふどちわりごかたげてあき山に はつたけかゝのれもとろき哉　東京 佐藤喜代子

たけがりにわけ入る山は淺けれど 秋のあはれのふかくもある哉　猿島 田代まつ子

籠にみてる茸の數にも志られけり やまさち多きけふのたのしさ　新潟 大矢 正子

ふたつみつとりゐし茸ぬ嬉しさは たもとにあまる秋のやまふみ　豐前 下元もと子

家づとにけふははこりて語りなむ 志めぢさゝたけこに餘りたり　松山 野中あさ子

あさりかね暫しやすらふ松の根に 見いでしたけぞ嬉しかりける　廣島 香川 穎子

(以下原稿到着順)

山がつがこゑもきこゆるたけがりに みやこのひともましり居るらん　石井豐子

たけがるさ朝つゆわけてあらそふも 今日のなぐさのひとつなりけり　濱口眞子

家づさにとりいそぐらんみなひとも ひとむらさめにぬるゝたけがり　仁保基子

あきやまの一葉か下のかくれがを 香ににほはすはたれかしらまし　佐山[illegible]

あきやまの松のふるはながきわけて とり得したけのかずそあらそふ　安井章子

老いたるも若きも苦をはわすれはて おち葉ふみわけたけながるらん　山内かず子

むら雨のはれしなかべのしめぢたけ たもとおもげにかりゐつるかな　佐々有鄰子

人よりもわれさきたちてふみわけつ 小くさがながのたけながるさて　佐藤文子

家つとのきのこか何につゝまゝし のへのたのしさこゝにしみつれは　谷口なほ子

去年のあききのこさりにし小まつ山 またもたつれんわすれかれつゝ　安村歌子

歸るさもわすれはてけり木の子がり そこはかさなくやまめぐりして　木村きく子

いさゞふそ袖なつられてくるゝまて 木の子からげや籠にあまるまて　瑞生菊子

山かげはいさゞひかけのみじかくて おもひのたけもかられさりけり　島山千代子

野へに出てしめぢさゝ茸取りゐつゝ かるへるみちさへわすれけるかな　島山百合子

思ふどちあらそひながらあきのかな あさるやまぢぞたのしかりけり　島山千惠子

うちむれて茸がりすらしやまかけに みやこをとめのこゑそきこゆる　島山清子

こゝかしここまつか下なかきあさり ひねもすたけながりくらしつゝ　島山美子

さびしかる山のおくにもこゑのして あきのかさむる今日のたのしさ　島山ゆき子

打ち連れてたけがりにゆく小春日は そらもこゝろもうれしかりけり　竹内穎子

松が根をこゝかしこさてかへるさも わすれて木の子さるなさめかな　由井孤子

いさゆかん落葉かきつゝかなさめて　羽田三緒子

みれのおいきのまつのしたまて

うちつれて小松かはらにあきのかな
さめつゝあそふけふのたのしさ　河田いし子

里の子にうちましりつゝまつやまを
あさりくらしてあきをわすれつ　玉井慶子

やまなかのかゝるたのしきたけ狩も
みやこに住めはなすをねさりき　藤内よき子

をさ女子はかへるわすれて小まつはら
かたみにあまるたけをこそされ　徳永鳳鶴子

はつたけを手ことにとりて小まつはら
こゝろうれしくかへるをさの子　小森田輝子

うちむれて今をさかりのたけかりに
かれてひさなきやまもにきはふ　澤田春子

ふる雨にぬれてはゝゑむささの子か
もてるかたまや木のこなるらん　山口千技子

すゝきわけ小まつくゝりて山かつの
うなゐさともにさる木のこかな　永井るい子

かしこにささらんさすれは松たけの
またてひさにはさられぬるかな　高橋服子

諸ともに狩り得し木の子かそへんと
つさふもたのし草しばのうへ　久米眞子

今日もまたゝけかりすさてこそ更に
さほきやま路をたさり來にけり　曾眞吉子

風ふきちあらそひなからあさちふの
あきの香あさりけふもくらしつ　木内靖子

わけゆけはまつかせかなる木の下に
見ゆるもうれしたけの一もさ　野岡紫子

まつかれのこけちの露をはらひつゝ
香をさめてねしたけのひさもさ　野岡澄子

やまゝつの落葉かしたのかくれかさ
香をさめてこそ狩りもこそすれ　野岡鶴子

よのあきのものうき事もわすれつゝ
たのしくゝらす今日のたけかり　野岡勝子

さためなくしくるゝ空の晴れまちて
まつのはやしにたけ狩りなまし　春波不佐子

さはに得てほこらんものさ秋の香を
あさるやま路そたのしかりける　杉野志か子

おもふさち採りしくさひら籠にあまり
すゝきにさしてかへりけるかな　山本しづね子

わらへらか松のはやしにうちつさひ
おほきをほころきのこかりかな　石井みゆき子

こすゑなるもみちはおさて菲狩るさ
ふるはわけつゝくらす今日かな　遠藤千代子

こまつはらわきてうれしく思ふさち
たけなかりねてくるゝかへり路　竹村竹風子

つさにせんあまたの菲もこゝに入れて
かへるもうれしまへのやまみち　遠藤眞久子

なみおひしたけやありけむ松の中に
うれしくよほふこゑきこねけり　遠藤雪子

楽しさも籠にみちしくてをさめ子か
たけかりてなりなかのまつはら　吉田きる子

いへつさに千草もなりぬおもふさち
こまつかはらにきのこかりして　澤田せい子

山を出てやまに分け入るをさめらの
たほかりす處そたのしかるらむ　高山信子

秋さいへはたのしみ多きやまさとに
おちはわけつゝきのこかりして　新浦美律子

秋雨のはれしあしたはた もふさち　白石由子

こゝにかしこにきのこがりしつ　　川上停子

しの竹につらぬくきのこ數ずそひて
ねたもたわゝになれるうれしさ　　青木たま子

今日もまた茸がりせまし足引の
やまもみち葉をたつれがてらに　　黒木信子

さもひさよ今日は日もよし松たけを
いざやさりなんこにみつるまで　　砂川梅子

つゆしげきやまぢをたさり松ばらに
たけがりするぞたのしかりける　　穗積稔子

色かへぬやま松かれにおひいつる
きのこをつみて千代も經なまし　　大坪修子

又も來んあきのやまへのきのこがり
たのしさつきぬまつのしたかげ　　大坪久子

狩りくらしいさかへらんさ數ふれは
さりしきのこのかずぞすくなき　　楠　靖子

打むれてたけがりに日をくらしけり
つきをさもなひかへるそまのみち　　細井球子

夕ぎりの立ちのぼるよりたけがりの
ひざはくれれさくたるやまみち　　濱口直子

人しらぬかたやまかげをあさりつゝ
ひさりしめぢはうれしかりけり　　町田鶴子

分けいりし山のかなたぞさわがしき
むれてたけとるこゑのきこゆて　　西村登羅子

おく山のみちなき木かげふみ分けて
茸とる今日ぞたのしかりける　　松原常子

さびしかる山のおくにもこゑのして
あきのひさむるけふのたのしさ　　中島房子

また人のしらぬやまかげあさりつゝ
ひさりしめぢはいともうれしき

いさ分けん松やまかげに香をとめて
世にかくれがさ朽ちはてぬまに　　大亦たか子

けはしさもいさはさりけり木のこ狩
ひめよりお尊くねんさおもへは　　西　部子

うすくこく色つきそめしやま／＼を
あさりてたけをかるぞたのしき　　大井以志子

けふも亦しくれのあめさあきのかの
かさたつやまをいくめくりしつ　　森やす子

おもふさちきそひ／＼ている山に
ひさまつたけのかずぞしられぬ　　日高かず子

へたてなききさもうちつれて茸がりに
こゝろのうさもわすれぬるかな　　青山秀子

里の子がすゝきましけりのこまつはら
別け出つるそてに茸のあまれる　　玉井ふく子

家路をもさらにわすれてうなゐらさ
けふもひれもすきのこがりしつ　　石川類子

いさきませ今日も山路に分けいりて
たれおさうしさきのこがりせむ　　石川なほ子

もみぢなすあきの山路をふみわけて
きの子がりするけふのたのしさ　　野口さん子

むあひのさもうちつれでまつたけや
しめぢをあさるけふのたのしさ　　三磐操子

きのこがりみやまにふかくわけ入りて
かへるみちさへわすれけるかな　　高石登代子

まつたけのこゝにさいへはもろ人の
そこによるさへをかしかりけり　　吾妻ちか子

こゝかしこをもあらそひて目の前の
たけをはひさにさられつるかな　　諸井久耳子

木の木さあまり／＼しまつたけを　　館脇ます子

おちはかきわけ見つろうれしさ

枝折してあすもまたこんたけかりに
あかてくれゆくあきの日なれは
中桐香子

いつこそせよへはこたへてまつ山を
こゝろ〳〵にあさるたけかり
池谷富子

ふる雨にぬるゝもしらてけふもまた
こまつかはらにきのこかりしつ
萩原萃子

日もすから秋のあはれを狩るたけに
わかこゝろも手はまつの香そする
數島花子

親も子もみなうちつれてのにやまに
たかりくらすけふそたのしき
蒲生粲子

いかばかりたのしかるらん妹させか
こゝまつかもとにきの　かりして
吉田信子

あしひきの山路わけ入り葉かくれに
先ふるきのこさゝろそうれしき
垂水たに子

歸へるさもわすれてけりな山ふかく
たけ狩りつゝもあかぬものから
堀いさむ子

ゆくりなくみ山のはてをきはめけり
もみちふみわけたけかりをして
佐久間八重子

一つとりまたふたつみつつき〳〵に
たけはかたみにみちにけるかな
加藤さく子

たけ狩のかりのすさひのそれすらも
ひさにおくるゝ我か身なりけり
小神野きん子

まつ山におちはか[illegible]わけあさりつゝ
たけかりゝけふにたのしかりけり
橋本さよ子

むらきものこゝろうかれて足もとの
たけはひさにもとられけるかな
本郷つれ子

業終へしのちなれはこそひさし振に
たのしさまされけふのたけかり
橋口たき子

茸かりにこゝろさられていつのまに
かくもをのへにのほりきにけん
樋口霧子

思ふどちひまこたつさへあきやまに
木の子かりしてあそふたのしさ
道籔八重子

たつさへしかこにも今日は餘りけり
まつのしつくのかゝるきのこは
田代節子

思ふどちうちつれもつゝあきやまに
木の子かるこそうれしかりけれ
田代綾子

いさきたれいつこさもなくまつ茸の
香ににほふなりたつれゆかはや
北原學子

たけかりに嵐ふきもさちうちつれて
わけいるあきのやまそたのしき
白石椿子

まち〳〵し村さめふりぬいさけふは
もみち見かてらたけやからまし
長谷川松衛子

おもふさちうちきそひつゝ茸かるさ
あきのやまちなあさるたのしさ
森こさ子

家にまつはゝにみせはやかりねたる
しめちはつたけすくなけれさも
仲田榮子

やまなかもけふにきはしき聲すなり
むれてやひさのたけをかあらむ
濱とみ子

へたてなくうちかたらひて友さちさ
たけかりするそたのしかりける
木下菊子

嵐ふさちうちつれたちて日もすから
たけかりくらすまつのしたみち
鵜濱喜代子

まのあたり枯葉のなかのまつたけを
くやしくひさにとられつるかな
清水ゆき子

おもふさち打つれたちてきのこかり
あめにぬるゝもたのしかりけり
大竹治子

あさりねし茸はこにみちこゝろには
田中[illegible]子

うれしさみちぬいまかへりなん

やま／＼にこゝろ引かるゝたけ狩りは
ひさゝせここにまつそたのしき　絹川ますゐ子

うすくこく茂るれやまのたけがりに
たもさるむくも日はくれにけり　高国はぎの子

なり／＼はこさの[illegible]草もつみいてゝ
こゝろうれきけふのたけがり　日吉あさ子

山ふかみひさのゆかりはまつたけを
ここにみつるまてさえそうれしき　澤つる丟子

よそめにはそれとも見わかぬ松たけの
香をたつねてそしるへかりける　末次たみ子

きゝしのみ見ぬも床しきいなりやま
まつたけがりのむかしかたりを　田中つれ子

馴れぬ身はきのこさめ得て路もなき
なみ木のうちに入そなかしき　福原菫子

ねものをは袖につゝめさなか／＼に
うれしさあまるけふのたけがり　降田滿起子

やままつのつもる落葉をきわけて
さりねしたけの香こそたかけれ　辻本ひさ子

まつやまにまたきゝなれぬ聲すなり
いまみやこひとたけがりすらむ　高田泉子

けふは我れよさのはらへに先たちこ
やまのきのこを多くとらまし　奥濃君子

まさひつゝいつか深山にわけいりて
くるゝもしらぬきのたけがり　浦弁豊子

しくれつる森のまつはわけゆけは
かさをならへてきのこおひけり　市来さへ子

むなしくも歸るこけちにあきのかの
たかきたけをはなるそうれしき　西内ため子

おもふさちいさ打つれてあきやまに
わけのほりつゝきのこがりせむ　尾立富子

たつさふるかたまにみてゝ踊らまし
わけ入るやまに生ふるまつたけ　村尾鄉子

おもふまゝ茸をかり得しうれしきは
いひしらぬまてたのしかりけり　[illegible]本辰世子

秋されはまつのしつくにわかそてを
ぬれそほちてもたけをさらなん　井上一枝子

立田ひめをりなすにしき身によそひ
小まつのもとにたけがりそする　井上[illegible]子

山ふかくしつかをさ女にともなはれ
うき世のほかにたけをかりけり　寺尾まさ子

(以下延着)

思ふさちそてふりはへてあきやまに
まつのきのこをひくそたのしき　佐野幾代子

山ふみはあきこそことにたのしけれ
まつの木のまにたけをかりつゝ　高橋[illegible]子

思ふさち木の子さりつゝあそふまは
あきわひしさもおもはさりけり　高橋かね子

朝またきつゆのやまちをふみわけて
いさたけからんこゝろあひの友　木村萩子

朝またきかせもみにしむおさはやま
いさわけいらむたけがりのとも　小林文子

もみち斑のてりそふ山のしたかけを
わけてうれしくきのこかりせり　名取よし子

たもとにもここにもあまりて嬉しさは
なにゝつゝまんけふのたけがり　名取正代子

さとの子もみやこの人もうちましり
木のこかりするあきのやまふみ　坂田きみ子

九月二十日兼題　快樂

天

鹿兒島市山下町四百二番戶　日高かず子

快樂てふものは、人皆の心にあり。心たのしからざらんには、身に綾錦をまとひ、口は海山の美しき味にあくとも、などか樂しかるべき。朝には父母のうるはしき御顔を拜し、晝はれのがさま〴〵、世のいとなみをはげみ、あかねさす夕日の影まちては、またしき同胞打集ひ、來し方行く末の事など語ひ、あるは古へ人の書をひもときて、身の行ひをいましめあひつゝ、かりそめにも、一家よこしまの道をふまず、身体をすこやかに、浮世の波風をよそにして過しなば、隙ゆく駒のあしなみ早きも覺えざらまし。かくてこそ春の花も殊に麗しく、秋の月も一入限なきことと覺え、はにふの小屋のいぶせさも、玉敷の高殿にもたちまさり、つゞれも錦に劣らざるべけれ。あはれ、得がたきは、心の快樂にぞありける。

地

橫濱市本町壹丁目　綿野りき子

春の野邊秋の山など、何れも心ゆくべけれど、家庭の和樂にはいかでしくべき。たとひ、やはらかき衣にまとはらず、海山の珍味に飽かずとも、はらからむつましう、たがひにいつくしみはげみ、とこしへに春風の心の內に吹きかよひたらんには、花よりも猶うるはしき父母のゑまひのちる時なく、實にゆかしくもたのしきかぎりにこそ。

人

千葉縣安房郡富浦村原岡　佐久間八重子

花笑ひ鳥囀る時、心合ひぬる友どちと、袖うちつらねて、墨堤もしくは吉野に遊び、又かのそれがしが、きさらぎの花よりも紅なりといひし瀧野川、若くは高雄山に筇を曳くなど、何れかは快樂ならぬ。夏の夕浪のまに〳〵舟うけて、思ひの儘に凉をとり、又冬の朝火桶抱きて、銀世界に仙遊をこゝろむるも。亦何れかは快樂ならぬ。然はあれども、心合ひぬる學びの友と、文の園生をかき分けて、思ひ〳〵に木末の花を手折り、又螢の光り窓の雪に、古き新しき書どもを繙き、文の林に分け入りて、愚なる身にも天理の妙用を覺り、最氣高き最尊き聖人、最健き丈夫、最操貞しき婦人たちと遊ぶことに、爭でかは及ぶべき。若し男の子に生れたらましかば、或は高樓の方丈に八珍をつらね、管絃の海に大白を浮べ、或は劍の山の上。矢玉の雨の中に大功をたて、或は舌の林に蘇張の辯をふるひ、或は雲の上に日の光を輔けて蒼生を照しなどすることの、如何に快樂ならむかし。快樂の數何幾そゞくあるを知らず。然はあれども、之を得るには道あり。もし其の道に由らずして、之を得んとせば、木によりて魚を求むるが如し。請ふ見よ、春に花なくして秋に果實あるか、又見よ、怠惰なる人の手折りし文の花たてし功あるか。なべて、勞苦は快樂の種子にして、勉强は快樂の培養

なり、苟も結果を得んと欲りせむ、乞ふ種子を蒔きて之を培養せよ。萬の眞の快樂自ら其の内に在り。

(以下原稿到着順)

佐々有鄰子

快樂にさまざまあり、春は花の下に歌よみ詩を吟じ、秋は紅葉をあつめて茶を煎じ、草花を折りて月のむしろの小盃にさし、はや夏も冬も、時節にふさはしき快樂はあるべし。しかあれども、學校に螢雪をあつめて、八箇年のひさしき師の君のふかき惠をうけて、花やかに終業なしし時の快樂にすぎたるはあらじと妾はおもふのみ。

春波不佐子

苦しみあれば樂しみありとは、古へよりいひ傳ふる言の葉なり。快く樂しむは、何れの人ものぞましき事にて、又こよなき身のくすりとぞいへる。されど、常に安らかにのみ、遊びてくらしたらむには、これぞ快く樂しき思ふ事あらざらん。凡そ物心つきし頃よりは、多少の學びの業、はた家の事などなし終へし夕ぐれどもに、年老いし人よりはじめて、いと幼きまでうち集ひて、ありし事どもうち語らひ、春秋の花をめで、月をたゝふるこそ、けに快き事のかぎり、樂しき事の極なれ。

大亦隆子

わざをはげむも、學の道にいそしむも、其終りの目的としいはゞ、快樂を得んが爲のほかならじ。憂き世とかこち、身をはかなむ人だにも、花に心ゆく時は、さく花に戯れ、てる月にあくがれ、さては富をよろこび、名聞をねがふも、また樂みなり。其のほか、四季折々の快樂は、澤あるべけれど、たゞ束の間の樂みにて、眞の快樂ならざるこそ口惜しけれ。さるは、いつくしき花も夜半の嵐に散ることあり、月も雲がくるゝときあり、浮雲の如き富や、名よ、さめては假睡の夢よりも なほはかなきものなりや。眞の快樂とは、心みづからの樂みなり。心淸く、身のつとめ怠らずば、良心はつれにみづからたのしからん。心樂しからば、花ちりぬとも、月かけぬとも、困苦も落魄も、只うつし世のうつりかはりのみ。心の樂みはとこしへにつくることはあらしかし、さるを、ともすれば、憂き世とかこち、この快樂の園をすてゝ、好みて不幸の淵に赴くものあるは、うたてきことなりや。もろこしの聖も「疏食をくらひ、水を飲み、肱を曲げて樂み其の中にあり」と、いひきこれらの樂みは、はたして何方にあるか、よそ眼にうかゞひがたきこそ眞の快樂とはいふならめ。

西　艶子

悲みは樂みの元とかや、憂あれば必ず喜びあり。快樂あれば必ず悲哀あり。實にまゝならぬが浮世の習ひとは云ひながら、今更是非なき事になん。さるにても、未だ浮世に立ちさわぐてふ荒浪にも漂はで、慈の露深き父母の敎の庭に生ひ立ちぬる程、或は學びに、或は裁縫に、各がしゝ其の業を勵みて、唯人に劣らざらんとばかり、其の餘の事は憂きもつらさも露知らず、春の花秋の紅葉の折々に、兄弟むつみあひつゝ、父母に伴なはれて、名たゝる所處の、花、紅葉を尋ねて、旅するばかり、樂しく快きは事は非ざるべし。ましてや、草枕、旅路を憂しとかこちしは、過ぎし昔の夢にして、今は、陸には汽車あり、海には汽船あり、居ながら千里の外も往來すべく、船ながら陸にひとしき、起臥とせられつべし、嗚呼快きは旅。樂しきは、父母の御供にぞありける。世に快樂てふことも、數多有るべけれど、憂き事を、知らぬ間の快樂こそ、眞の快樂にはあれ、然れは、こは獨り、吾がともが、專ら占むるところの、快樂とやいはまし。

青山秀子

凡そ、動物にはかならず快樂なるものあり。まいて人間にはいと多しとぞ。さていかなるものを快樂といふかそは外ならず、あるはワットの蒸汽機發明、あるは、コロンボスの亞米利加發見、あるはエヂソンの電氣發明、あるは韓信の人となり、又豐臣の將たる、皆其名を世に轟かせしなど、實に快樂の主なるものならん、あるは勝地に杖曳き、おさなおさなのたのしみありくさま、あるは家の富み榮ゆるなども、亦快樂ならむ。さて、かくしるしつゝ、つら〳〵思ひ見るに、快樂は皆忍耐のいたせる果

るめりいでや、我等は兩親のかたへにおつしたてられ、物一つ不足なう空しく日を送りつるは、いかに幸なる境涯ぞや、たゞ一時のさらに身を傾けなばなでふ誠の快樂を得らるべき。今よりとく心して、忍耐の海に棹さしかれたの岸につきなば、其の快樂如何はかりならむ。

三幣操子

世の人の、種々さま／＼のなりはひをつとめて、一日も空しく過さゞるは、快樂を得むが爲なり。若しこの世に、快樂といふものなかりせば、いかに淺しきことならむ。日々山野に出でゝ、雨に沐し風に櫛り、玉なす汗を拭ひつゝ、營々として勤むるも、妻子をはごくみ、一家の繁榮を計らむ、との快樂あればなり。父母の膝下をはなれ、幾年月の間學の窓に、螢雪の苦を積むも、業成り志遂ぐる曉には、父母をも安樂に、せさせ、自ら愉快にこの世を送らむ、の樂あればなり。かばかり苦心焦志して、勤勉勞働すとも、快樂その中にあれば、さまで苦痛にもあらずめり。されば、人世一日も、快樂といふものなくては、ね過すべからず。されど、世には、徒に快樂を求めむとするあまり、遂に詐欺をもて人の財をかすめ、あるは、竊盜などはたらきて、刑罰にふるゝものいとおほかりかゝる輩は、眞の快樂といふものを、知らざる故に、かへりて苦痛をまねくなり。肉體の快樂を求めむとするは、いとも賤しくして、眞の快樂にあらず、精神上の快樂こそ、眞の快樂にはあるべけれ。さるを、身には錦繡をまとひ、口には美味にあき、花柳の巷にさまよひ、酒樓に午睡の夢を買ひ、この世にかばかりの樂やあると、飽くことなく、遂には家をも身をも亡し、最愛の妻子を、路頭に迷はしむる者、今の世にいと多かるは、なげかはしき極なり。眞の快樂は、さる賤しきかたにはあらで、風月を樂み、花鳥をうたひ、あるは、學の園に遊び、文の林をたどりて、國の爲めこ一身の爲め、後日の繁榮幸福を計るなど、いとも高尚なる快樂をいふなり。眞の快樂を求めむには、酒肴の設けもなく、うたひ女の興を助けむ要もなく、定まれる主あるにあらねば、年々歳々つくることなく、その樂み極りなし。されば、世の人、ゆめ一時の興を得むとて、あだし道にふみ迷ひ、あたら身をはふらかして、世の笑となること勿れ。

目黑佐喜子

うつせみの世に生れたる人、樂みてふものなかりせば、如何で一日も得過ぐすべき。上は雲の上人より、下は草苅る賤の男まで、皆其の身／＼に叶ふ樂みあるめり。されど、なべては治まれる大御代に生れて、限りなき惠みの露に浴しつゝ、いつくしみ深き親はらからと、恙なくひとつ家に住み、着るに衣あり、食ふに事足り、斯くして、心長閑に、花を愛で月を賞へ暮さば、樂み此の上やあるべき。さるを、世の人、大方は足る事を知らで、いやが上に樂みを求めむとしつる末は、遂によからぬ道に踏み入ることそ、淺ましくもまた歎かはしき限りなれ。さればにや、「志不レ可レ滿。樂不レ可レ極」と、諸越の書にもかゝれたる。すべて、何事も、たやすく心の儘になりては、樂みも樂みならず、憂きを忍び、難きを貫きて後にこそ、眞の樂みは得らるなれ。彼の賤しき者共が、一日の苦みもてあがなひし夕餉酒は、中々に富みたる人の、價を問はで調じさせし珍味に勝ることいくそばくぞ。

岩瀬暥子

あはれ玉ほこの道ある大御代に生れ得て、天皇のあつき御いつくしみのほとは、海山ものかは。ましてよろつの事、日に月にひらけすみて、四の海は波立つかに、吹く風は枝をならさず、いとやすらけく治まる御代の大御惠のつゆにもれで、同し民草のかずに入りしは、誠の幸なるを猶他にたのしみといふは、いとふくつけきことと、なめれと、人としては身のほと／＼につけて、とり／＼にたのしむところあるへし。いたつらに花下の遊月前の宴にふけくるは、たゞ一時のたのしみになん。されはきことの道をふみまよはず、已の好む道にわけ入りて、やかて高峯の花を手折らむことこそ、眞の樂しみとはいふへけれ。

曾頁よし子

あはれ、尊き神のみ惠にて、こよなううれしき御代に生れながらも、その樂きを知らで、浮世々とかこちつうらみつ、あたら枯野の露ときえゆく人のみぞ多き。凡そ今の世の人は、只に黄金の利にまよひ、高き位に眼くらみて、終に家をほろぼし、身をあやまり、たのしき世なば、自か

ら厭ふに至らしむるこそうたてけれ。あはれ、世をかこつ人、あはれ世をうらむ人よ、昔かしこき君の教へ給ひけん正しき道を、ひたすらに辿り行かば、家も身もやすらかに、やがては高き山にものぼりうべく、實の海をも渡りうべく、かしこき神にはみ惠をうけ、よろづの人には貴はれ、齢を高砂の松にこよそへ、千代よろづ代かけて、いと〳〵世をやすく過しうべく、樂しき事かぎりなけん。

塙　いさむ子

なべて、世に生きとしいける人の、誰かは快樂を希はざる。その心の儘に、貨財を散して、うしろめたくかまけず、しどけなく其の世を過して、爲すべき業もせず、執るべき務も勵まざらんには、いかに心長閑に樂しかるべきや、されど、いな〳〵是れ眞の樂みに非ざるなり。たゞ徒に起き徒に寢れて、彼の古人も走尸行肉といへりけむ如く、世に露ばかりも益なく、寧ろ禽獸にだに劣りたる行なり。いかでこを快樂と言ふべけんや。抑々萬物の靈長と稱へらるゝ人たるものゝ、こよなき快樂は、身体健に、德行を勵め、身に萬の學問と技藝とをつけ、之を應用して、こと〳〵の世の爲めよき事物を發明し、あるはおのがじゝ其の生業に勤みて、やがて家富み榮ゆ、うからやからまさかに睦ましく、之を内にしては一國の富强を計り、外にしては國光を輝し、我が大君の御稜威を、とつ國々に洽く仰がれむことにこそ。かゝらんには、我が大御代は、朝日の昇るがごと、み盛りに開け行き、天地のむた極みなく、浦安國と洽まりて、如何計りか樂しく、安らかに住まはれん。げにかくてこそ、まことの快樂はあるなめれ。

佐藤喜代子

世の中に面白きものはさま〴〵あれど、家富みて兩親共に健かにおはしまして、足らはぬことなく孝行を盡し、さては學びやに通ひつゝ、もろ〳〵のわざに上達して、もろ人の上に立ち、惡しきをさけてよきに移り、四季をり〳〵のながめにも、たらちねの君の御心すが〳〵しくなるまでつかへ奉り、一家まどかに、日ねもす夜もすがら、東風吹く心地すめるなどは、己が心ゆくのみかは、はた人もいかに心よからんと思はるゝにこそ。げに、世の人のもとも幸なるは、快樂にまさるべしやは。

花和ゆう子

あはれ、大方世の人は、願はしかべき事のかなへば、また其の上を欲してやまぬめり。いはゆる蜀を得て隴を望むふものにて、其の足ることを知らば、いかにかゝらましやは。されば、快樂にも、秋の千草の色のさま〴〵あるべけれど、まづこよなうめでたきは、一家打揃ひて健かに、まがつみのたゝりもなく、數多のうからやから親しく睦び、世の人々に立ちおくれず交らひて、足らはぬことなく世を過ぐし、身におはぬことをばせず、其の足ることを知らば、いと安らならまし。まいて、家富み榮ゆ、萬のわざ身に負はましかば、すべての物事につけ、心のまゝにかなひて、其のうれしき樂しさはいかばかりぞや。

川畑芳子

今日は古稀を早く過ぎませる祖父の君の誕生日に、父君先つ日位階勳章拜受し給へるよろこびとも〳〵に、祝ひの莚を開き、二柱の友だちをばしめ。親族うみの子らに至るまで打揃ひ、ありこ衣の袖うるはしく、御酒汲かはし、盃のめぐる數もしられず、詩歌に千代をことほき、或は盡せぬ濱の眞砂に、世のこと打ちわすれ、いさ竹のしらべもあやに、うたひかなづる人々の、とり〳〵なるさまを、心は怪しくいとも愛度、最も嬉しく、かの郭子儀がむかしさへ思ひ出でられ、老いも若きも、夜一夜ゑらきとよめり、實に月花の遊びの外の樂しきうたけなりや。

東郷つれ子

日頃こゝろ盡しゝかひありて、學校の試験にも及第の證を授けられて、父母もよろこびめでまし、休業の内に避暑かてら、鎌倉の海水浴に行きしに、はからずも學の友達さへ數多踪先に來れり。こは〳〵と、互に悦び、日ごとに度わすれ貝など拾ふほど、ある日とも〳〵繪の島に遊ぶ、こゝのあさらけき魚の名物、畫けのさかなに、種々滑らなる器にもりて出せり。其味ひ一入なり、絶頂の辨天社に詣で、見渡せば、不二のねさやかにはれ、東の海原浪靜に、煙吐くふね方々に行きかひ、相摸かたは夕立かゝりてさだかならねど、遠近いひしらぬ氣色はさらなり、七里が

濱によせかへる浪、雪の如く、とり〲筆の及ぶかぎりにあらずなん。又鶴が岡八幡宮に詣で、數々の寶物、名勝故蹟をたづぬれば、歷史をひもとくより哀れこゝに身にしみぬ、かゝる樂しき旅は、はじめてければ、宿に歸りても忘られがたく、寢もやらず、二つなき都のつとのひとつにもとかくなん。

北原すゑ子

世の大方の人、皆それ〲一の望のあるものなり、他なし快樂なり、樂にもくさ〲の別あれど、たゞに快樂とのみ思ふべからず、諸越しの聖も樂と禮とのはべるべからざるをときたまへり。されば、徒に快樂にのみふける時には、遂によからぬ淵に陷るべし、朝夕の煙たえ〲なる身の褥みじかき衣に、夕立のかゝりやしつらむと思ふほど、あせしたゝりてかへりきし時、妻子のもてなし、やがて玉勺の酒あたゝめし時の樂みは、いかにありけん、凡そ、世の樂事は、常に苦中に存じ、艱苦は樂中に在るに異ならずとは、よくもいひにけるかな、はた、苦學に螢雪の功を積みやがて大御代に御惠の萬分の一をむくい、まつるを樂しみ、進みては大御代のいやが上に榮ゆむ樂み、はたつかさのをはりたる夕べ、月を樂み、朝に花を樂むなど、まこと快樂は命の養にもなり、はて榮もし哀もする物なり、されば、おのがこひ願ふ處は、身にふさはしからぬ樂の過ぎざるやう、ほどよき快樂に禮を以て節し、以てまことの快樂のありまほしき物なり、

大分喜代子

歡の庭のあけくれに、文讀み手習ふ事にいそしみつ、日曜日あるは祭日など、學のひまの折々に、春は花見、秋は紅葉見と、思ふどち秩連れて、野に山に遊びくらすはいと樂し。雪降り、風吹き、寒さ烈しく、皆人は外出は苦しなどかこつ折も、地は裂けくるがれもとけんばかりの暑き時にも、互にへだゝぬどちかこむ火桶は無くもあれ、涼しき室にはあらざるも、寒さも暑さ苦もしからざるのみか、却て樂しくこそ。かくて家にかへれば、老たる人や阿母など、時もたちぬになどいひて、まちわび給ふ御顏拜するだにいとうれし。まして、彼れ此れ語らふをや、又はらからがつみし菫かさわらびか、面白き話ありしかなど興かりて、といふもをかし。とはるゝも亦ときの事共思ひ出して樂し。若しかゝる人のなかりせば、いかでか樂しかるべき。況んや、心措く如き事あるに於てをや。されば、此らの快樂を覺ゆるは、家の內睦ましく、心のどかなればなり。たとひ富貴の家にありても、家內和睦からざれば、遊ぶも語るも右等の快樂は得べからず、貧賤にして僅かに朝夕の烟をたつるばかりの人たりとも、和合の家に育ちなば、心は常にゆたかなるべし、此を見れば、快樂は財もて得べきものならず、唯家內より生ずるなめり、總て快樂の中に快樂こそ、家內の和睦にはあなれ。聞く、女はそが和睦を保つべき天性なりとかや。あはれ、まめに、妾ら此快樂を願ふと共に、こを行はん事をちかふになん。

日吉あさ子

凡そ、人、おのが際を思はず、人を羨む心ふかかれば、曙の花をみよしのに尋ね、さやけき月をさらしなに詠め、又は身に綺羅を飾り、山海の珍味にあき、妙なるものゝね、勝れたる演藝に、耳目を慰め、四季をり〲の樂しみ、のまゝにふるまふとも、なほあかず思ふべし、たとへ雨もる宿のわびしくとも、正しき道をふみゆきて、各いそしむわざのいとま、親子はらからうちつどひ、たがひの勞れを春のこのめにくみあひつゝ、四方山の物語りに時をうつしたる、淚も氷る冬の夜も、照りはたく夏の日も、まごゝろの花の匂ひうつらふ時なく、すが〲しき心の月いつはり多き浮世の雲もとゞめず、善にすゝみ德をつみ、榮ゆゆく家の風四方に吹きしくに至らば、其の樂しみ又一しほなるべし。しろがれの景色をたかきやに眺め、涼しき風を海のあたりに求めずもがな、窓くりあけて遠山の雪に小簾あげし昔を忍び、五月雨のつれ〲には紫のゆかりの色のあさとひつ、あるは瓶にさす一枝の春に幼きものゝ生立を語り、軒もる月にふりにし人を思ひ出で、つゞれさせてふ虫に冬の衣を急ぐなどなか〲にたのしきや、げにこの樂しみは、雲嵐の障りもしらず、富士のたかねの白雪の消ゆる時なく、淸くゆかしき誠の樂しみとやいはまし。あらまほしきこの心より享くる誠のたのしみになん。

福原菫子

世の中に、高きいやしきわかちなく、誰かは快樂てふものなからん、されど、酒池肉林などの、一時肉體をたのしまむるのみをねがひて、精神的不斷のたのしみを、思はざるぞ、いとうたてき。金殿玉樓には住まずとも、錦の衣は飾らずとも、山海の珍味には飽かずとも、只まことの道を守りつゝ、春のあしたも、秋のいふべも、はた、霜ふる朝も、嵐吹く夕も、只美はしき父母のかんばせを見奉るこそよもぎふのいぶせき伏屋にありても、胸の中恒に、綽々と、餘裕ありて、こよなき、快樂にこそ。

降田瀨起子

人、たれかは快樂を欲せざる、老たるも、若きも、高きも、いやしきも、各ほどにつけたる快樂あり。されど、こを求めんには、必ずや多少の苦あるべし。かの諺に、苦は樂の基と云ふことあり。學の道にたづさはる人の、晝夜の分ちなく、螢に雪にいそしむも、貧しきものゝ身を惜まず働くも、はた人の親の其の子を育むも、皆後の快樂を願ひて、苦を苦ともせざるなり。げに快樂ほど、人に活氣を與へ、心をはげますものはあらざるべし。とは云へ、此の快樂にも、自らいやしきと高きとの差わめり。長きと短きとの別あれば、妄りにいやしき快樂をむさぼらず、心の快樂即高尚なるを求め、しかも其の度を過さゞらんことこそあらまほしけれ。

美濃君子

いぬはりこふねなど何くれと取りいでゝ未だまはらぬ舌に、語り興ずるをさな子の愛らしき顔をながめやりつゝ、ほゝゑみたまふ父母のそばに、おのれもをさなごも歸ると共に遊びなれば、心のうきも悲しきもとくきねて、いかに笑を忍ばんとすれども、得ぬこそ樂しさのきはみなれ。其の他、なほ快樂てふをかみれば、世の人の性情、はた境遇につれて、さまざまあるべきも、今は只おのが特に樂しとおもふ節のみかくなむ。

井上雪子

佛者は、諸行無常といひて、人の世をうたてきやうに語れど、わらはが身には、かくばかり樂しきものはあらじと思ふなり。蒼々たる天空、清々たる大海をながむるも、心おのづからのどかなり。花の旦、月の夕、あるは水無月頃の夕涼み、霜月師走の雪霰、いづれかあはれならざらんましてそを友としてしたしみつゝ、淨窓の下、萬卷の書を繙く朝夕のうれしさは、またたぐへんかたもなかるべし。つたなき文字を顧みれば、四季のながめ、讀書の快味は、一時のたのしみにすぎざれば、是等をもて、終身不斷の明玉と仰がんか、いまだ全からざるなり。人と生れし以上は、ただ日毎にいやまい快事を取らざるべからず、そは他にあらず、御國を照らす姫鏡を、己がゐまにかゝげ置き、日々いくそたび心の影をうつしみて、一點のけがれなからしめ、然る後よろづの文をも見、わざをもならひ、つみてもて、女子の天職をつくし、大みめぐみの萬分をむくいんことこそ、いやたふときまことの快樂なれ。げにこれこそは、海みなきり、あらしさわくとも、終世うごかぬ快樂なれ。

寺尾まさ子

人の命は、朝露のごとく、はかなくきゆるものなるを、心をなやましうしては、此の世に生れしかひなからん。身にふさはしからぬ榮華をねがひ、親子はらからむつましからで、己が利をのみのぞみ、まことの道にまよふこそ、うたてき事のかぎりなるらめ。身にうつくしき衣をまとひ、あまきを口にすればとて、心にやましき、事のあるならば、いかで樂しき事の有るべきいそのうらわに潮をくみ、深山のおくに木こりして、身にあらぬのをまとひても、一家たがひにむつみあひおのが業にいそしみて、正しき道をふみゆきて、花と月とを友となさば、花につらき嵐なく、月にはかゝる浮雲なく、うきふししげきうき世をも、まことに樂しきくすくし得べしとまゝを、かくなん。

（以下延着）

佐野幾代子

何をか快樂と云ふ人々其好む所によって異なり。然れども、大方春は花のかげに、夏はみどりすゞしき若葉のかげ、秋はあはれなる月のかげ、冬は火桶の本に、心會ひし友たち、歌よみ、あるは琴などかきならし、夜をふかすなど。是皆姉妹等がの快樂とするところなり。されど、わらは

は、餓られと食なく凍ゆれときるにころもなく、病めども看護する者なき、あはれなる友がらに食をめくみ、夜をあたへ、其病床にいたはり。かれ等の喜悦面に溢るゝを、見る時こそ。眞に精神に快樂を覺ゆ、此時を以て我はこよなき、快樂とはなすなれ。

名取正代子

明らけく治る大御代にうまれあひて、事に、物に、足らはぬことなく、いとやすく、平らかに、世わたることこそ、こよなき快樂にはありけれ、されど生きとしいけるもの〻情として、さる上にも、快樂をもとめて、痛苦をさくるは、世にふる常ののぞみになんありける、さて其のぞみを遂せんには常にまことの道をまもりて、よこしまならざらんことを心がくべし、一時の慾を恣にするもの、其始は快樂に似たりといへども、終には之に反する痛苦のともなふものなり、されど眞の道を行ひて後に得る心の快樂は、これ正しき快樂にして、終始變ることなし、古の聖人も、善を行ふを最樂しとはいへり、まことにめでたき金言といふべし。

坂田きみ子

世の中に、いきとしいけるもの、いかで快樂てふことを望まざるものあるべきやは、さる中にもおのが心の慾をとげつゝ、みづから求めて、快樂を得んとするものおほかるぞこと、實にあさましき限りなれ、身をつゝしみ、行を修め、慾を節し、おごらすたかぶらす、人に交るに信愛をつくしなべて人たるの道をふみ、人たるの德を行ひかの聖のいひけむ、善を爲すこれ日も足らずや、とかや心を修めたらむには、實におのづからなる快樂にこそ。されど世くだちては、みづからもとむるの人多く、おのづからなる快樂にすごすもの少なし、いかに恥つべきことならずや。

思出草

東京青山　舟葉女史

一　かすみこめたる春の日も、　ちぐさをゆする虫の音も、
うき世にのぞみなき身には、　などてたのしきことやある、

二　われが多くのとも人は、　此の世をたのしくすぐせども、
われが多くのしら人は、　此の世をたのしくおくれども、

三　あふげば高きひさ方の、　雲井にてりそふ月にだに、
みつればかくるものなるを、　なげくは人のまよひかな。

四　花はかすみと思ひしに、　めぐる月日のとく立ちて、
桐の一と葉をさき立てし、　あはれやさびし秋の風、

五　たれかあはれときくなれば、　しばしはゆるせくりごとを、
思へばなみだのたねなるも、　わすれんすべもあらぬなり、

六　とんで火に入るなつの虫、　身よりいでたるさびなれば、
自ら身をやうらむなる、　君のいとふもうべなりや、

七　すぎしなさけに夜もすから、　なきて明しゝ夜やいく夜、
わき出るなみだしぼりつゝ、　そでにつゆをや結ぶらん、

八　やみ夜のほしと見し君に、　みすてられたる此の身には、
すゑののぞみもたえにけり、　あゝ世にのぞみたえしなり。

九　人はたのしといへること、　人はうれしと思ふこと、
みなかなしみのたねぞかし、　ふさぐ心をやらんとて、

十　ふくる夜なかにたゝすめば、　くまなくてらす月のかげ、
月はこよひもかはられど、　かはりはてたるわが身かな、

十一　なく人もなしわが爲めに、　あはれと歎ふ人もなし、
やがてしとねによこたはり、　又もや身をばうらむなり、

十二　君がやさしのうつりがの、　そぞにのこるぞうれしきや、
くもりがちなるわがむねの、　はるゝはいつの時ならん。

暮春　　高橋保子

惜しめどもつれなく暮れて行く春の
ゆふへさひしきいりあひのかね

海上霞　　高田きよ子

まほかたほかすみの間より匂ひつゝ
なり〳〵もるゝ海人のふなうた

夕納涼

なつしらぬならの木蔭のすゞしさに
くるひとしけきゆふすゞみかな　山崎しつ子

席草

ふしのねのみとりの色につゝきけり
すそのゝはらにしけるなつくさ　高木つれ子

晩夏郭公

ふりいてゝひと聲なのれほとゝきす
けふをかきりのなつのなこりに　山田璋子

夕顔

山さとの世をすてかきにおのれのみ
ゑみひらけたるゆふかほのはな　仝

夕雲

吹きいてん風のけしきもかつみえて
こゝろもとなきゆふくれのそら　野間鐐子

雨後

ゆふだちのはれてすゞしき庭の面は
吹くかぜごとにつゆのたまちる　竹内まさ子

落葉深

吹きおろすあらしのさそふ紅葉はゝ
つもるもふかしやまのしたみち　佐々敏子

上野公園博物館に遊ぶ

世の中のあらゆる物をあつめつゝ
見するぞにはのをしへなりける　平野琴子

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題

住所
姓名

…………………………
…………………………

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題

住所
姓名

……、……、……。……、……。
……、……、……、……。……、
……、……、……。……、……。
……、……、……、……。

用紙は半紙二つ折の事。字體は楷書にて詳明に記し、句讀點を施すべし。

●割烹學校開設廣告●

割烹の女子教育。家政上の旨眼たる理由は更に言を要せざるべし、然るに未だ其職に有る者の、是を敎授せる敎場の設置有を聞かざるなり、偶二三女學校に割烹科の編入有りと雖も、正實丹練なる割烹專門敎師を擧ざるが如し、されど日常普通の料理法は調じ得るも、賓客の饗應、諸祝儀の料理法を調じ得る事を得ざるなり斯くては其科目の設けありとも割烹習學の本旨を得る事非ざるべし、爰に於て本校を設立して、割烹全科を敎授し、習學者をして、其一方に偏せるの遺憾なからしめんと欲す、朝野の有志、令閨令孃たち幸に來修して、此擧を賛成せられん事を希望す

本校規則

第一章　敎則

第一條　本校は日常雜菜料理より諸祝儀式料理に至るまで速成簡易に敎授す

第二條　本校の學期は修業成績の可否に依る、されだ別に是を定めず

第三條　本校所定の學科を卒業したる者には卒業證書を授與す

第二章　敎則

第四條　授業時間

女生徒　毎日曜日午前九時より午後四時まで

男生徒　毎土曜日午後一時より五時まで

第五條　敎授科目は左の如し

○雜菜料理法○普通料理法○茶會席料理法○諸祝儀式料理法○婚禮式料理法

第六條　右の科目敎授法は左の如し

○切方○煑方○焼方○掻敷物野菜むきもの造物の事なり○献立方○給仕方○庖丁式○包物○結物

第三章　試驗規則

第七條　修業成績に依りて臨時試驗を行ひ及第の者には卒業證書を授與す

第四章　入學退學規則

第八條　本校へ入學を請ふ者は左の書式により東京在籍もしくは寄留の者にて身元確かなる者を以て保證人と定め保證書を差出す可し

保證書

何府縣何市郡何區町村何番地
族籍戸主又は何誰何男女或弟妹
何　某

印紙

右の者入學致候上は御校則を守り申すべきは勿論萬一何の事故出來候節は拙者に於て一切引請可申候右保證候也

東京市何區何町何番地
保證人　何　某　印

明治何年何月何日

割烹學校御中

第九條　退學せんと欲する者は保證人連署にて本校幹事へ届出て學籍削除を乞ふ可し

第五章　費目

第十條　本校へ入學を請ふ者は入學金五十錢を納むべし

第十一條　毎月第一授業日に月謝金五十錢を納むべし（但九月中入學者に限り是を要せず）

第六章　開校

第十二條　來十月第一（土、日）曜日ヨリ開校

教授ス

明治三十一年九月

東京市日本橋區本町壹町目拾二番地

割烹學校

四條流庖丁師範
教授主任　八世　石井治兵衛

こゝろの華 八

●こゝろの華は歌文專門惟一の雜誌にして畏くも天覽の榮を辱うす●九月十一日發行

●論説●歌募りの弊 澤田穂足 ●消息文の栞(其二) 丸山松廬 ●筌簣 赤松景福

●文學史料●伴信友翁傳(承前) 山岸惟和 ●文苑 ○歌 高崎正風 ●小杉榅邨 ●佐々木信綱 ●歌

●久保猪之吉 ●税所敦子 ●小池道子 ●千種任子 ●富士山にのほりてよめる百首歌 兄

●第 延壽の記 坂正臣… ●五色を題にてよみける中に赤といふことを

小杉榅邨 ●明治廿七八年役從軍紀念碑文 萩原正夫 ●漫錄 忠度歌集(其二) 林陸夫 ●熊谷直好旅日記(其三) 林陸夫 ●長三州翁歌 長壽吉寄 ●歌學一斑(其二下) 田義天類 ●詞海 短歌長歌新體詩文章數百件 ●雜報 歌界の雅件記事例によりて例の如し ●學園 課題の歌文數百首 ●附錄 柳原權典侍税所權掌侍小池權掌侍眞蹟短册 は優美なる石版摺にして毫も眞蹟と異なる事なし ●歌文の投書を歡迎す 歌は佐々木信綱氏 文は坂正臣氏選

●定價● 一冊金十錢 ●六冊前金五十五錢 ●十二冊前金一圓 ●郵税一冊金一錢 ●郵分代用一割增 ●爲替は東京青山局苑の事●

●發行元● 東京市赤坂區青山北町 こゝろの華發行所●

●發賣所● 東京神田表神保町 東京堂 ● 東京市麻布簞笥町 文遊堂●

清風一秀美

國の誉
獄の花
(ひとや の はな)

高節一優雅

總クロース金文字入 菊版本製美麗 全一册 正價金五十錢 郵稅金六錢

口繪富岡永洗筆極彩色無比密畫 挿畫數圖

神氣清潔なる一名士か國事上の寃枉に座し惡魔の如き法官殘忍酷薄なる獄吏の下に苦悶するに當り高尙優美なる妙齡の一少女が溢るゝ計の熱情もて之を慰藉救護し其身神の安善を保ち苦心百端少女が神聖無垢なる愛情は遂に名士の熱心せる或る植物に古今無比の玉花を開かしむると共に其の幽閉を救ひ大に名聲を宇內に發揚えし最も名譽ある儀表の下に最淸廉なる結婚をなすに畢る斬新奇警高尙なる小說にして其の寫出す處には彼の獄界の悲慘なる名士少女が淸淨なる相思の情愛等人情の精微讀者をして一讀恍然たらしむ世の紳士淑女一本を備へて座右の友とせられん事を

試に書中の
目次
を掲ぐれむ

發行所 東京橋區築二丁目 國光社

賣捌所 各府縣書肆

最寄書林に無之時は直接本社へ御注文被下度

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑　毎月五日廿日發行

定價	一冊	十錢
	六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢
	十二冊前金（半年分）	壹圓
	全國無遞送料	
廣告料	五號活字廿三字詰一行金二十錢	

明治三十一年九月十九日印刷
同年九月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　川崎直衞

東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人　並木頁雄

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行所（電話番號本局八八）　國光社